

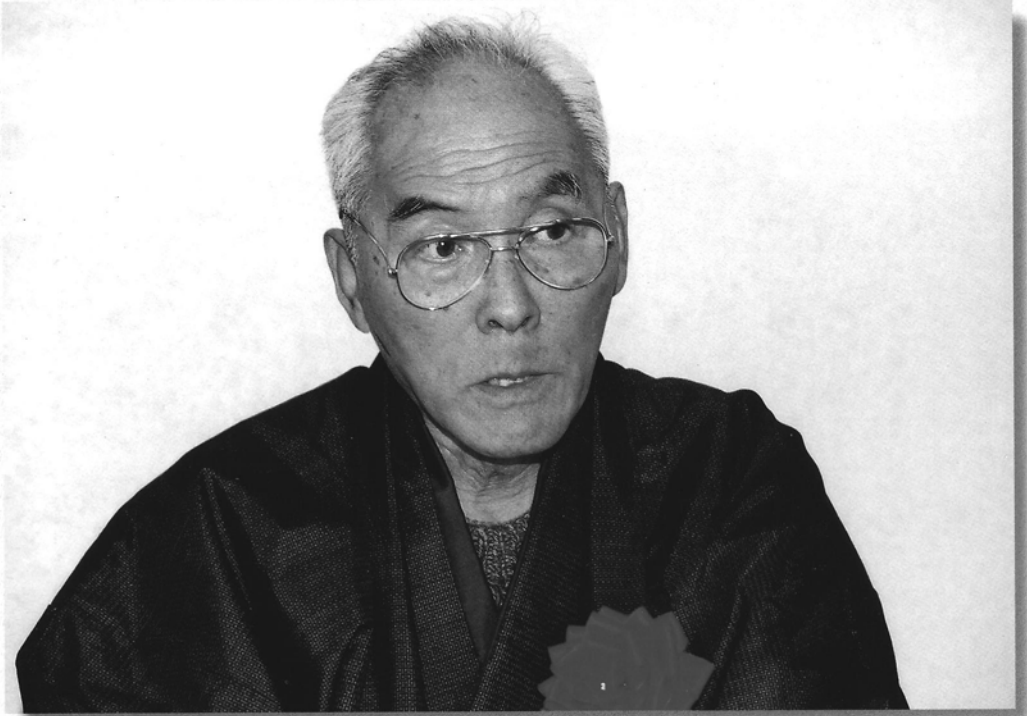
長崎の鐘よ鳴れ

長崎県動員学徒犠牲者の会 前会長
長崎県被爆者手帳友の会 前会長

深堀勝一

追悼集

長崎県動員学徒犠牲者の会
長崎県被爆者手帳友の会



平成9年6月19日、友の会創立30周年記念・祝賀会の日



昭和32年11月10日、創立総会（「生き残りたる吾等集ひて」より）



発刊に当りて

会長 深堀 勝一

昭和47年8月9日、発刊に当りて（「生き残りたる吾等集ひて」より）

亡き友、学徒慰霊のためにも、準軍属の処遇改善に努力して十五年。やっと陽の光りを浴びることになった。今、遺族もほっとしている。

なくなられた人々のみ霊よ、安らかに眠り給へ。

再びこの世に原爆の悲劇のない世界の平和を夢見てその実現に努力することを誓い、会創立十五周年を記念して動員学徒記録史「生き残りたる吾等集ひて」を発刊し、亡き友、亡き恩師のみ霊の御前に捧げる。

昭和四十七年八月九日



昭和42年 6月18日、長崎県被爆者手帳友の会発足記念祝賀会



昭和42年 6月18日、長崎県被爆者手帳友の会記念祝賀会

「遺徳しのぶ証を」

手帳友の会 記念碑の除幕式

「被爆者の父」 故安日原爆病院副院長

被爆医師として日赤長崎原爆病院創立以来、原爆症患者の治療に献身、被爆者の父」と慕われてきた故安日晋・同病院副院長（当時）の記念碑が、黒被爆者手帳友の会（深畑勝一会長、四万五千人）によって同病院玄関横に建立され七日、除幕式があった。

安日副院長は長崎医科大学三年在学中に被爆、三十三年、同病院設立と同時に内科医として勤務。以来十八年間、被爆者の診断治療と病院の基礎固めに努力、今日の原爆病院を被爆者医療のセンターに築き上げた。

被爆者の父、故安日副院長の記念碑を除幕する遺児の一郎君とエリさん



温厚で地味な人柄で、被爆者の一を二ぎに集めていたが、ライフワよき相談相手として被爆者の尊敬「ク」として被爆と関係の深い悪性

シユヨウの研究中、自らコウトウガンにかかり、去る三月十九日亡くなった。このため黒被爆者手帳友の会は「生涯を被爆者のために尽くした安日先生の遺徳をしのぶ証（あかし）を」と記念碑建立を急いでいたもの。

記念碑は、台座の上に七個の目に治療を受けた西彼外海町の辻原光男さんら被爆者二人が「被爆者のために余生涯を尽くした先生の崇高な精神を受け継ぐ人を期待しています」と涙ながらに追悼の言葉を述べた。



昭和51年8月7日、安日先生の記念碑除幕のあと親族の人々と深堀会長
([わが戦いの日々]より)



昭和51年8月7日、安日先生の記念碑除幕式 (写真提供：田川チサ子)

長崎の鐘よ鳴れ
長崎の鐘よ鳴れ
私達の肉親を奪った
私達の身体をむしばんだ
あの原爆が
いかに恐ろしいものか
あの戦争が
いかに愚かなものであるか
長崎の鐘よひびけ
長崎の鐘よひびけ
地球の果てから
果ての果てまでも
私達の願いをこめて
私達の祈りをこめて

長崎の鐘 建立 長崎県被爆者手帳友の会



昭和52年8月5日、「長崎の鐘」建立
長崎県被爆者手帳友の会



昭和52年8月5日、「長崎の鐘」除幕式
設置場所：長崎市岡町平和公園内
（「わが戦いの日々」より）



昭和52年8月5日、「長崎の鐘」除幕式
（平和公園600名参加）

原爆被爆者特別養護ホーム

昭和55年7月 かめだけ開設

原爆被爆により肉体的精神的に大打撃を受けた被爆者のうち老いたる者、傷つき病める人達の社会復帰を願い且つ豊かな老後をおくるための施設として建設されました。

国道206号線沿いの小高い丘の上の敷地17,313㎡に建つ、寄せ棟造りの和風建築で、広い芝生の中庭、白を基調とした部屋も申し分なく明るく、裏手の山は雑木林と自然に囲まれ、緑と太陽豊かな環境です。



落成式

深堀勝一 初代理事長



昭和55年7月21日（「かめだけ」開設25年記念誌より）



平成2年9月13日、原爆特別ホーム「かめだけ」敬老の日行事スナップ



昭和57年10月24日、旧三菱兵器製作所就業者の集い (写真提供：田川チサ子)



昭和62年 5月16日、動員学徒30周年・友の会20周年・創立記念祝賀会 (宝来軒別館)



昭和63年8月9日、ソ連レニングラード（長崎の鐘平和公園）の長崎の鐘



平成元年10月18日、政府国会陳情



平成2年3月4日、カール・ビンソン入港反対集会 於：佐世保松浦公園



平成2年8月7日、原水禁海外代表団歓迎パーティー（平野町宝来軒別館）



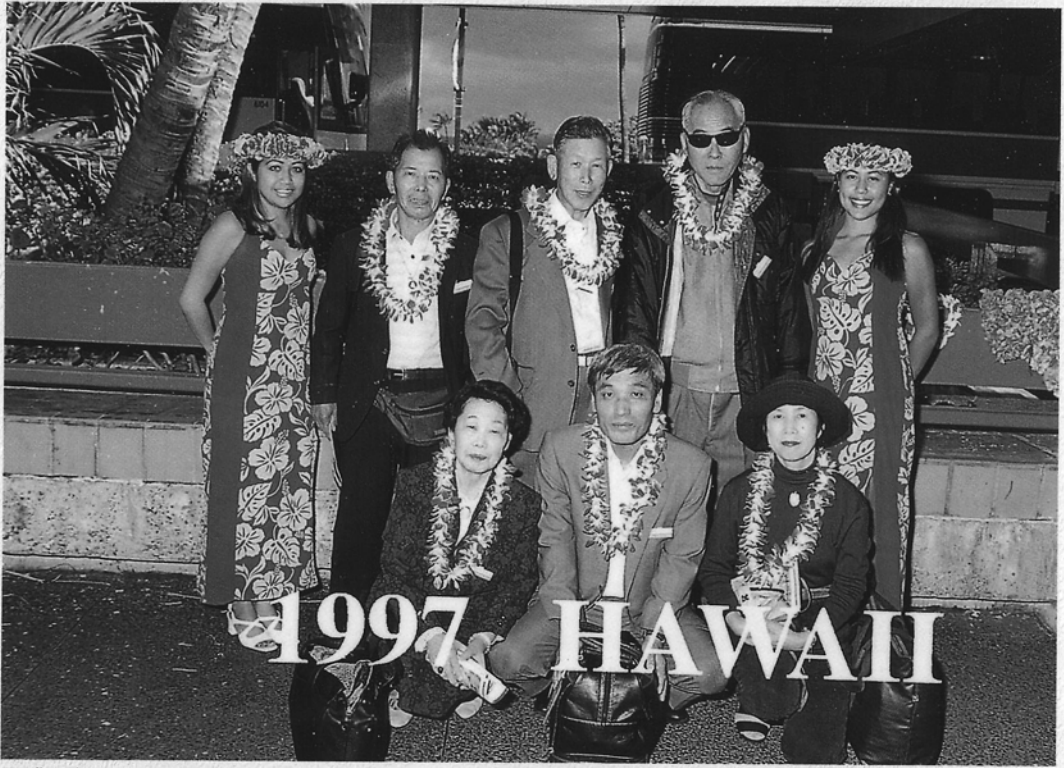
平成2年9月18日、中国瀋陽市「長崎の鐘」除幕式（「わが戦いの日々」より）



平成9年6月19日、友の会創立30周年記念集会



平成10年4月1日、長崎市政功労表彰記念 於：長崎市民会館 (写真提供：中村キクヨ)



平成10年12月7日、ハワイにて



平成12年3月4日、平和祈念会館オープン



平成12年5月17日、第11回 平和賞授与式（車 貞述氏）



平成13年8月9日、「聖マリア像」の除幕式



平成14年6月16日、韓日平和交流功労賞、受賞



平成15年2月17日、第12回 平和賞授与



平成16年2月10日、養護施設「恵の丘長崎原爆ホーム」（長崎市三ツ山町）雛人形（五段飾り）贈呈式

龍田弁護士に平和賞

県被爆者手帳友の会 受賞している。

(深堀勝一会長) は二十 龍田弁護士は十年以上九日、在外被爆者支援や戦後補償裁判などで貢献したとして、諫早市の龍田紘一朗弁護士に「友の会平和賞」を贈った。平和賞は平和に貢献した人の功績をたたえる目的で一九八八年に創設。これまで大相撲の横綱朝青龍関やゴルバチョフ元ソ連大統領ら十二人が

長崎市平和町の平和祈

在外被爆者の 裁判など貢献

県手帳友の会贈る



深堀会長から「平和賞」を贈られる龍田弁護士
＝長崎市平和町、平和祈念会館

念会館であった授賞式には、被爆者ら約四十人が出席。深堀会長が「被爆者運動に力を貸していただき、ともに大きな成果を挙げた」とあいさつし、賞状を手渡した。龍田弁護士は「依然として存在している日本人と外国人の差別政策を日本社会からなくさないと、被爆者救済は形だけに終わる。国際社会に正義と人道を確立する運動の力になりたい」と謝辞を述べた。



平成16年8月9日、三菱重工業長崎原爆供養塔献花 会長外32名、会員皆様と



愛犬(ターボ) 犬が大好き、自分の子供同然に生活していた。ハワイより自宅のターボに電話するほど

手帳友の会

井原氏が新会長

被爆者団体の連携強化

県被爆者手帳友の会 代目で「組織の立て直し（手帳友の会）は十九日や被爆者の援護と相談までに、新会長に常任理事活動を強化する。他の被爆者の井原東洋一氏を被爆者団体とも連携をとっていきたい」と話している。井原会長は二

る。

前会長の深堀勝一氏が二〇〇六年二月二日に亡



井原 東洋一 会長

くなり、中村キクヨ副会長が会長代行を務めていた。四、五月の選挙委員会で井原会長が内定していたが、本人の意向で十八日の総会で信任投票を実施し、正式に会長に決まった。任期は二年。井原氏は長崎市出身。一九四五年八月九日、爆心地から六・五キロの薩摩城（現東長崎地区）で被爆。手帳友の会では常務理事、常任理事を歴任。

長崎市議も務めている。手帳友の会は六七年六総会では、これまで二月に結成。被爆者健康手帳交付申請の支援を通じて被爆者の掘り起こしに人を置くことなども決める。県内五十以上以上の支部で組織する。体内最大約四千世帯という。

平成18年6月18日の総会にて会長就任（平成18年6月20日付「長崎新聞」より）

長崎の鐘と鳴れ



追悼集の発刊にあたって

稀有な指導者

深堀勝一さんを想う

長崎県動員学徒犠牲者の会 会長
長崎県被爆者手帳友の会 会長

井原 東洋一

くしの歯のかくるがごとく死してゆく被爆者吾等の一人一人が

この句は、深堀勝一さんが被爆後に療養中の病床で詠まれたものであります。

一九四五年八月九日の長崎原爆により学徒動員先の長崎兵器工場で被爆し、家族を失い、辛苦の病床から発せられた悲痛な叫びであったものと思います。

二〇〇六年（平成十八年）二月二日早朝、病院から「心肺停止」の知らせをうけてかけつけましたが、午前八時三〇分が幽明のわかれとなりました。

齢七十八歳でしたが、数十年前に詠んだ句のその一人になってしまわれました。

深堀勝一さんは、信念を貫き通した人でした。

病軀に鞭打ちながら、「原爆青年乙女の会」などの活動を重ねる中で「軍人恩給は復活したのに、変らぬ任務にあった動員学徒、女子挺身隊、徴用工などに対する援護施策が置き去りにされるのはおかしい」と社会正義のための闘争心に火が付きました。

一九五七年（昭和三十二年）十一月十日、遂に「長崎県動員学徒犠牲者の会」を結成して会長に就き、県下各地に足を運び、組織し組織し、そして組織し多くの政治家を運動に巻き込んで味方に引きつけると共に上京陳情をも繰り返し、正当な要求を次々に実現させる一方、犠牲者の慰霊にも意を注がれました。

それらの運動の延長線上の必然として、十年後の一九六七年（昭和四十二年）六月十八日の「長崎県被爆者手帳友の会」の結成があり、自らを会長に任じ、以来三十九年間の長きにわたって、その重責を果たしてこられました。

原水禁運動とつよく連携し、反戦平和運動の先頭に立ち、平和と人権運動の功労者を表彰し、国際的交流を促進するなど、運動の実績に支えられた自負心に裏打ちされた特異なカリスマ性は、他の批判をよせつけず、孤高の存在感を示し、離反する人々もありましたが、「被爆者援護」に生涯を打ち込んだ深堀勝一さんの功績は、評価に余りあるものと思います。

一昨年十二月三十一日の夕、病床を見舞った時、「井原さんハサミを買って来て」と訴え、「車椅子の拘束を解いてくれ」との指示でしたが、すでに好々爺となっていた会長の願いをかなえてあげることにはできませんでした。被爆者手帳友の会の常務理事として二十年近く、そしていま会長の重責を担う者として、深堀勝一前会長の稀有な活動と実績と、心の底に流れていた氏の真の人間性を正しく評価して後世に残すことは、私の責務であろうとの想いから各位のご協力をえてここに追悼集を発刊するものであります。

長崎の鐘よ鳴れ

C O N T E N T S

目次

追悼集の発刊にあたって
稀有な指導者 深堀勝一さんを想う

長崎県動員学徒犠牲者の会 会長
長崎県被爆者手帳友の会 会長

井原 東洋一

24

追悼の辞

深堀勝一氏追悼集の発行に寄せて

長崎市長 伊藤 一長

深堀勝一様を偲んで

参議院議員 西岡 武夫

追悼

参議院議員 高木 義明

熱く語られた運動への思い

参議院議員 犬塚 直史

平和への思いは永遠に

医療法人徳洲会理事長 徳田 虎雄

生き方の原点となった当時の体験

長崎市議会議員 中村 すみ代

天国でこそ、神様の祝福を

長崎県議会議員 押 渕 礼子

故深堀勝一氏を悼む

長崎県平和運動センター単産被爆者協議会連絡会議 議長

川野 浩一

深堀会長は物凄い怪物だった

前長崎県被爆者手帳友の会 事務局長

矢嶋 良一

深堀勝一さんを偲ぶ

長崎県被爆二世教職員会の会長・全国被爆二世団体連絡協議会前会長

平野 伸人

深堀会長、おつかれさまでした。

平和公園の被爆遺構を保存する会

竹下 芙美

長崎発、原爆メッセージ

元原爆病院医療ケースワーカー

増田 幸子

被爆者の視点に立って

元原爆病院医療ケースワーカー

西 宣子

52

悲しみのとき

追悼の言葉―深堀会長との別れを惜しむ

長崎県被爆者手帳友の会 副会長 中村 キクヨ

56

訃報を伝える各紙

58

ともに歩んだ道のり

歴史に残る名会長

本部会計監査

鍵山芳子

66

深堀会長へ初めてのお手紙

本部会計監査

嘉松愛子

67

骨身惜しまず運動のために

本部会計監査

川下フミエ

68

日銀窓口業務からのご縁

佐世保南支部

河邊総子

70

尽きせぬ思い出の数々

佐世保南支部

北村トクエ

72

深堀前会長へお詫びせねば

佐世保南支部

熊健

73

ハワイ航路で帰りたい

本部副会長

田川チサ子

74

“鯨肉じゃが”の思い出

本部副会長

東海ムツ子

75

今は愛犬ターボとご一緒ですか

本部副会長

中村キクヨ

77

故深堀会長を想う

本部副会長

早崎猪之助

79

深堀勝一君を悼む

本部副会長

平山兼則

80

ご気性激しい中にも優しさが

本部副会長

深堀寿子

82

ハワイで永遠の平和を誓う

本部副会長

前田昌宏

83

七十年のおつきあい

本部会計監査

松尾久夫

84

残された功績は山ほど

北松・平戸連合支部長

牟田寶藏

86

あのときの「リヤカー」

西町支部

山川米雄

88

追憶の言葉

西町支部

山川米雄

90

告別式の思い出

立山支部長

山本正人

91

深堀会長と立山支部

立山支部長

末永信雄

94

●座談会

故 深堀勝一前会長を語る

97

文・画

深堀勝一

空白の二十時間 — 原爆被爆惨状絵図

123

●特別報告

文責／井原東洋一

「被爆マリア像」と深堀勝一さん

141

深堀勝一略年譜

「長崎県被爆者手帳友の会」の歩み

編集後記

152 149 148

追悼の辞



深堀勝一氏追悼集の 発行に寄せて

長崎市長 伊藤 一 長

一九六七年に長崎県被爆者手帳友の会を結成された深堀氏は、手帳交付申請の支援を通じて被爆者の掘り起こしに努力され、被爆者援護法の制定や被爆地域是正をめぐる中央への働きかけなど、被爆者援護施策の充実を求める活動に大変ご尽力されて来られました。

友の会結成後も、三十九年間にわたり会長として被爆者の先頭に立って活動をして来られました。これも深堀氏の行動力と力強いリーダーシップに拠っていることは言うまでもなく、これまで被爆者の方々の大きな心の支えとなつて来られたものと認識しております。

一九八八年には国の内外を問わず平和への貢献者を表彰する「友の会平和賞」を創設し、旧ソ連のゴルバチョフ元大統領や大相撲の朝青龍関へ贈呈されたことなどを記憶しております。また、ご自身におかれましては、二〇〇二年に「韓日平和交流功績賞」を受賞されました。これは、深堀氏が日本国内だけでなく海外にも目を向け、国際的な活動へ積極的に取り組んで来られた結果だと思えます。生前の深堀氏の考え方や方針は、今後友の会の行動決定の指針として根付いていくことでしょう。

私は、被爆地の市長として、このような方々と連携し、信頼と相互理解に立脚した国際社会を実現し、一日も早く人類の上に明確な核兵器廃絶の道筋が示されることを心から期待しています。

また、被爆から六十年以上が経過し、被爆者の高齢化が進む中、被爆地長崎の使命として、これからも

被爆体験を継承し、被爆の実相と平和の尊さを多くの人々に伝えていくべく、平和行政、被爆者援護行政の充実に努めて参ります。

最後になりましたが、故人のご冥福をお祈りいたしますとともに、ご遺族並びに関係者の皆様方のご健康とご多幸を祈念し、そしてこの追悼集が、残された方々の故人への良き想い出となることを確信いたします。筆を置かせていただきます。



深堀勝一様を偲んで

参議院議員

西岡武夫

深堀前会長は、一九六七年に長崎県被爆者手帳友の会を創立されて以来、初代会長として、約四十年間にわたり、被爆者代表として、常に被爆者救済の先頭に立たれ、強力なリーダーシップを発揮され、友の会を県内有数の被爆者団体に育てあげられました。友の会に地域毎に支部を設けられ、被爆者一人一人を訪ね歩くなど、その卓越した行動力は、深堀前会長の活動の原点であったと思います。

また、一九八八年には、国内外の平和活動に貢献した方を表彰する「平和賞」を創設するなど、時代を見据えた平和運動についても率先して取り組まれました。

深堀前会長には、一九六三年の私の初当選以来、原爆特別措置法の制定（一九六八年）から原爆被爆者援護法の制定（一九七四年）にいたる原爆被爆者対策充実の取り組みを通じて、多くの示唆を頂きました。また、私が、原爆被爆者問題小委員長の時、介護手当の創設等の新しい施策を中心として、被爆者関係予算を対前年比五〇%と大幅増額を実現した時と、長崎市手熊地区の被爆地区指定を実現した時の事は、今も忘れる事ができません。

折りしも、被爆六十一年目に、北朝鮮による核実験実施、依然、混迷を深めているイラク情勢など、国際社会の平和が大きく脅かされている今日、歴史の生き証人であられた深堀前会長がご逝去された事は、今こそお元氣にご活躍頂きたかったと残念でなりません。

今、なお、原爆症認定や被爆者援護をめぐり、訴訟が続いている中、原爆投下から六十一年という長い時間の経過の中で、私は、被爆者の救済は、政治的決着しがなく、積極的な政治的救済が必要であると考
えております。

深堀前会長が生涯を通じて取り組まれた被爆者の救済、そして平和への取り組みを、今、我々もあらた
めて胸に刻み、引き続き全力で取り組む事をここにお誓いいたします。

深堀勝一前会長のご生前のご功績に対し深く敬意を表し、心よりご冥福をお祈り申し上げ、追悼の言葉
といたします。

追悼



衆議院議員 高木 義明

戦後六十一年が経過しました。原爆の惨禍を体験した長崎は、毎年八月九日に原爆犠牲者を慰霊するとともに、世界の恒久平和の決意を内外に向け発信しています。

国際情勢は厳しく、先の北朝鮮の核実験は、核兵器の拡散に新たな不安を投げかけています。一方、被爆者問題は在外被爆者、原爆症認定、二世三世問題など、今なお難しい懸案が山積しています。そして何よりも被爆者のみなさんは年々高齢化しています。

このような中でおよそ四十年間にわたり、「長崎県被爆者手帳友の会」の会長として活躍された故深堀勝一様のご冥福をお祈り申しあげ、あらためて過ぎし日々のご功績に敬意を表します。

深堀さんのお人柄から私は「不屈の闘志」に感銘を受けました。

古くはないおつきあいでありましたが、私の政治活動にもご理解を示され、ご支援いただきましたこと、感謝いたしております。

深堀さんは、爆心地近くにおいて、ご遺族や被爆者の生活実態を詳しく知っておられるからこそ、常に先頭に立って、動員学徒をはじめ、被爆者の願いや要望を実現するために、桁違いの行動力をもって、数々の成果とエピソードを残されております。

「被爆者が物心両面にわたって、援護され安んじて生きていける社会をつくりたい。」

これが深堀さんの初心であり使命感であったのでしょう。

深堀さんは、早くから被爆者の救援には、国家的施策の必要性を認識されていきました。そのためには「とにかく政治家を動かすこと」の決意のもと、被爆者手帳友の会の組織拡大に奔走されたのです。

また「権力に媚びず、庶民の味方になって、平和運動に尽くした」内外の方々に、手帳友の会平和賞を授与したり、被爆五十周年には、「空白の二十時間」を発刊され、子供たちに身をもって被爆の実相を伝えられました。

まさにバイタリテイと発想力の豊かな人でありました。

重ねて、故深堀会長の遺徳を偲び、私は微力ながら国政の立場で被爆者の援護と核兵器の廃絶はもとより、戦争のない平和な世界の建設をめざし努力することをお誓い申しあげます。

あわせて「被爆者手帳友の会」皆様の、さらなるご健勝とご発展をお祈り申しあげます。

合掌

二〇〇六年十月三十日



熱く語られた 運動への思い

参議院議員

犬塚直史

二月二日の朝、国会事務所で深堀前会長の訃報を知りました。長崎における被爆者運動のリーダーとして活躍されていた元気なお姿を思い出し悲報に言葉もありません。翌日三日の浦上教会で執り行われた告別式には、第一六四通常国会開会中のため、妻エブリーヌが出席した次第です。ここにあらためて、謹んでお別れのことばを申し上げます。

深堀前会長と初めてお会いしたのは、二〇〇〇年二月に、長崎市坂本町の長崎県被爆者手帳友の会事務所を訪問したときでした。

当時私は、同年六月の衆議院選挙（第三区）に出馬する決意を固めました。長崎県内の状況については右も左も分からない状況でした。このため長崎県内の親戚や知・友人、そして各団体・組織を頼りにご推薦やご支援のお願いを繰り返していたところでした。

こうした中で出会いました深堀前会長は、政治に対する関心が非常に高く、「県内の被爆者が結束すれば、政治を変えることが出来る」と眼光鋭い目をさらに輝かせて熱く語ってくれたのを昨日のことに思い出されます。

以来、友の会事務所や平和祈念会館を時折訪れるたびに、深堀前会長が、戦後「動員学徒にも軍人・軍属への補償と同等の補償制度を」と訴え、県動員学徒犠牲者の会を結成され、また、長崎県被爆者手帳友

の会を発足させ、大胆な行動力と強いリーダーシップを持って有力被爆者団体の一つに育て上げたこと。平和への貢献者を国内外を問わず表彰する「友の会平和賞」を創設し、国際的な活動にも取り組んでおられることなどを知るに至りました。あらためて深堀前会長のご功績に敬意を表します。

また、二〇〇四年七月の参議院選挙では、深堀前会長をはじめ被爆者手帳友の会の皆様の力強いご支援をいただき、国政の場に送っていただきましたことに心より感謝を申し上げます。

さて、いま世界をめぐる状況は、核兵器や軍事力による安全保障から、対話と共生による平和の確立に向けた流れに逆行するかのようになり、テロや紛争が激化し、「暴力と報復」の連鎖を拡大しています。

とりわけ北朝鮮の地下核実験と、それに関連して、日本が核兵器を保有する可能性も含めて論議が必要とする政府首脳発言は、原爆被爆の惨禍と今なお後遺障害に苦しむ被爆者の現状を無視したもので絶対に許すことが出来ません。

ここに深堀前会長が訴え続けてこられました、核兵器廃絶と世界恒久平和、北東アジアの非核化にむけた運動を受け継ぎ、長崎を平和の発信地としていくことをお誓い申し上げます。

深堀勝一前会長、安らかにお眠りください。



平和への思いは永遠に

医療法人徳洲会理事長

徳田虎雄

故深堀勝一氏の一周忌にあたり謹んでお悔やみ申し上げます。

深堀氏は長崎の被爆者運動のリーダーとして被爆者援護策の充実などにご尽力なされましたが、七十八歳というまだ頑張れるお年でお亡くなりになられ、残念でなりません。

深堀氏は長崎県被爆者手帳友の会を発足させ、被爆者手帳交付申請の支援を通じて被爆者の掘り起こしに努めました。また、被爆者自身に描いてもらった画集「空白の二十時間、原爆被爆惨状絵図」を発刊し原爆の悲惨さを多くの人々に訴えました。

私の故郷奄美からも女子挺身隊として長崎で原爆を体験した方々がおられます。原爆被害は本人だけでなくその子どもたちにも悪影響を及ぼします。生涯にわたり身体を蝕み、完治することはありません。

世界中で原爆を経験したのは日本の広島、長崎の二箇所だけに限られています。先日、北朝鮮が核実験を行いました。他にも核を保有しようとしている国があります。一瞬にして多くの人々の生命を奪い、生き延びた人たちも一生苦しみ続けなければならない悪魔の兵器です。二度と地球上で原爆を使用することを決して許してはなりません。

わが国は核兵器を持たず、作らず、持ち込ませずという非核三原則を貫いてきました。さらに核兵器不拡散条約の非核兵器国として核兵器の製造や取得等を行わない義務を負っています。法律上も原子力基本

法により、日本の原子力活動は平和目的に厳しく限定されており、今後とも日本が核兵器を保有することはありません。

世界でたった二箇所の被爆地の一つである長崎から全世界に核の脅威と世界平和を訴え続けてこられた深堀氏も旅たつてしまいましたが、彼の意志は多くの仲間たちによって永遠に受け継がれていくものと確信しております。

改めて心よりご冥福をお祈り致すと共に長崎県被爆者手帳友の会のご活動の更なる前進をお祈りいたします。



生き方の原点となった 当時の体験

長崎市議会議員 中村 すみ代

一九六九年（昭和四十四年）四月、私が日赤長崎原爆病院（以下病院）の医療ソーシャルワーカーとして就職して間もない頃だったと思いますが、ポマードの匂いをプンプンさせて右手をあげたポーズで入ってこられ応接セットのソファーにどかっとな腰をおろして、まるで我が家のような振る舞いをしてもらった姿が今でも鮮明に残っています。新米の私は恐らく自己紹介をしたと思いますが、よく覚えていません。初対面のこの時の強烈な印象は、終生忘れることが出来ないワンシーンとなりました。以来二〇〇六年（平成十八年）二月二日に亡くなられるまで、私の思いとは無縁のところ疎遠になった時もありましたが、様々な形でご指導いただきました。

振り返りますと、私が就職した一九六九年（昭和四十四年）四月は、ちょうど病院（昭和三十三年五月から診療開始）の経営主体が長崎市から日本赤十字社に移管した年で、しかも長崎県被爆者手帳友の会（以下友の会）が一九六七年（昭和四十二年）六月十八日に結成されてわずか約二年後のことでした。更に、一九六八年（昭和四十三年）九月一日に施行された「原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律」によって被爆後二十三年経てやっとわづかではありますが経済保障を受けられるようになって半年後であったということです。

私が就職したころは、友の会活動が最も活発で国に対して精力的に被爆者援護を求め続けた結果が法施

行に結実し、そして新しくできた法律を活用して被爆者の相談援助活動に力を注ぎ会員拡大につなげていった時期に重なっていたのではないか、ということは想像に難くありません。被爆者援護はやっと端緒にのびたばかりで、被爆者の多くは、肉体的にも精神的にもまだ傷が癒えない中であって友の会に参加してお互いを激励しあい困難を乗り越えようとされていたのではなかったでしょうか。

当時、友の会には竹馬さん、岳本さん、磯田さんをはじめ多くの皆さんが相談援助活動に親身になって取り組まれていました。私は病院内の被爆者援護相談窓口である医療社会事業部の一員として皆さんの熱心な活動と連携して援護サービスが受けられるように頑張りました。この様なことから私にとって病院での様々な体験はその後の平和運動をはじめ生き方の原点となり、また前会長をはじめ友の会を通じて多くの被爆者に出会えたことが私を一層成長させてくれたものと感謝しています。

最後に、二〇〇二年（平成十四年）六月十六日、「第一回韓日平和交流功績賞」（長年にわたり在韓被爆者の問題にとりくんできた団体・個人を対象）を前会長と一緒に受賞できたことは、誠に光栄であり今でも私の日々の活動の励みになっています。これからも、前会長の強い意思を受け継いで、戦争のない平和な世界を構築するために努力していくことを誓うものです。



天国でこそ、
神様の祝福を

長崎県議会議員

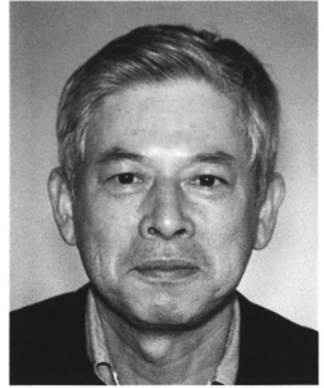
押 渕 礼 子

深堀勝一会長とのご縁は、わずか三年半あまりの間で、晩年の会長しか存じあげませんでした。六十一年前の原爆投下後、多くの被爆者のためにご尽力され、生涯を被爆者の幸せのために捧げられましたことに、手帳をもっている一人として感謝の念で一杯です。

はじめてお会いした時から、質素なお姿で粗末なベッドに横たわっておられました。が、すべてのことを超越して、ご自分流に生きておられたのでしょうか。

天国でこそ、神様の祝福を、あふれるばかりに受けていただきたいと心からお祈りいたしております。

(長崎市国分町)



故深堀勝一氏を悼む

長崎県平和運動センター単産被爆者協議会連絡会議

議長 川野浩一

相次ぐ別れ

被爆六十周年を待ちわびたかのように、これまで核兵器の廃絶、被爆者の福祉援護の為に必死に闘ってこられた人が次々になくなつて逝かれた。秋月辰一郎先生、葉山利行さん、そして深堀勝一さん。みんな長崎の平和運動、被爆者運動の代表者であり、顔である。この被爆都市長崎を代表する三人が、六十周年に同時に亡くなられたと言うことは、何か不思議なものを感じる。もしかしたら神が、三度このような悲惨な歴史が繰り返されないことを願われ、この三人に六十年の生を授けられたのではと思うのである。そう思わないと、三氏の戦後六十年間の生き様の説明がつかない。

長崎の鐘を贈る

一九八八年、私たちは手帳友の会と共に「長崎の鐘を贈る会」を結成し、ソ連（レンニングラード市）、中国（瀋陽）、米国（ハワイ）の三カ所に贈った。その時、後に手帳友の会の事務局長を務めた矢嶋良一さんと一緒に、深堀さんの事務所兼自宅を訪れたのが、最初の出会いである。狭い階段を上ったところにこの暑いのに股引をはいた深堀さんがいた。ハワイに贈るときだったか、平和公園の出立式で、長崎の鐘を鳴らした後、「深堀さんのご挨拶を」と矢嶋さんが言ったが、本人はいつの間にかいなくなっていた。

私も苦い思いがある。被爆問題で学習会を開いたとき、講師に深堀さんをお願いしたことがある。ご本人は快く引き受けられ、時間少し前にお見えになったが、まだ集まりが悪かったので、少し待っていただくことにした。さて始めようとしたら、いつの間にかお帰りになっていた。お陰で講師不在の学習会となった。

長崎の経済を心配される

一九八八年だったか、私が連合長崎の会長をしていた時、深堀さんが突然お見えになった。「川野君、長崎の経済を何とかせんばいかん。オイがA氏とB氏は動かすけん、川野君も知事や市長達は動かさせ、こんままじゃ長崎は大変なことになっばい」と来た早々から偉い剣幕で、蕩々と話され、私はあっけにとられた。結局は私も努力しようと言うことでお引き取り願ったが、全く違った面からも活動されていた。

最後に

深堀さんの功績を挙げれば数限りなくあろう。被爆者援護法の制定も彼抜きでは語れまい。神が彼を六十年間の長きにわたり生かし続けたのか……しかし、彼の必死の努力にも関わらず核兵器は廃絶できず……いや、ますます核拡散の道を歩んでいる。深堀さんのご遺志に報いるためにも、私たちは今後さらに努力しなければならぬ。ご冥福を心からお祈りします。



深堀会長は 物凄い怪物だった

前長崎県被爆者手帳友の会事務局長

矢 嶋 良 一

深堀前会長の思い出は山ほど存在するが、その一端を紹介することにしたい。

そもその出会いは、一九七六年の夏、会長の親友である当時県労評事務局長であった川原氏から、「勝一と付き合えばできれば君も一人前さ」と言われ、恐る恐る坂本町の友の会事務所を訪ねて以来、三十年近い付き合いになった。

最も大きな思い出は、米ソ両核大国へ「長崎の鐘」を贈り、核兵器廃絶を訴えたことである。一九八八年の暮れ、米ソの核に警鐘を乱打することで意気投合、その後、実行委員会と事務局を立ち上げた。「長崎の鐘」を贈る運動は、瞬く間に全国へ拡大し、三千万円を超す浄財が集約された。

ナチス独軍の包囲網で七十万人が死亡した旧ソ連のレニングラード、日中十五年戦争を始めた中国の瀋陽、無謀な真珠湾攻撃で有名な米国のホノルル、これら三国へ贈り、内外から高い評価を受けた。

米中口の鐘は、今でも青空へ、いや世界に向かって鳴り響き、平和運動の歴史の中でもキラリと光り輝いている。

次の思い出は、「長崎の鐘」を鳴らし、ハワイ州知事とホノルル市長への御礼の旅である。会長を団長とする六名の旅は文字通り珍道中となってしまった。

例えば、長崎駅へ集合すると、パスポートがなく、食事代や交通費などの団費もなく慌てた。又、会長



入浴後は湯水がピチャピチャとなり後は入れない。寿司屋では三人前注文して二人前は残す羽目になる。朝のバイキングでは突然ご機嫌斜めとなり部屋へ帰る。クルージングへ行くバスに乗ると冷房が入っていると文句をつけ、さつさとホテルへ戻る等々、事務局担当の私はほとほと閉口したものである。

でも、このハワイ旅行こそ会長にとっては最初で最後の海外出張となる。帰国後も旅先で思い立ったキング牧師の胸像を完成させた。ただ残念なのは、会長の夢であった豪華客船による被爆者のピースボートが実現しないまま終わったことである。

さらに、友の会平和賞にも思い出が尽きない。

会長が「最初の受賞者は誰が良かね」と言いながら、条件は「権力に媚びず、常に庶民の味方となって平和運動を実践した人」と説明された。即座に具島先生を紹介し、最初の平和賞受賞者に決定した。その後もコルパチョフ元ロシア大統領、宇都宮徳馬元衆議院議員、そして、元原水禁国民会議の森滝代表委員を推薦した記憶が蘇る。

他にも「深堀基金」の創設等があり、とにかく会長は物凄い怪物であった。

二〇〇六年十月三十一日



深堀勝一さんを偲ぶ

長崎県被爆二世教職員会の会長・
全国被爆二世団体連絡協議会前会長

平野 伸 人

強烈な個性の持ち主であった深堀勝一さん。被爆者運動の一方の柱であったが、わたしたちにはさまざま
な面で深いかわりがありました。

被爆二世問題の取り組み

一つは「被爆二世問題」での出会いでした。被爆四〇年の一九八五ころから、被爆者の高齢化や被爆
体験の風化が懸念される中で、わたしたちは、長崎での被爆二世運動の新たな展開を模索していました。
そんな中で、親の世代である被爆者団体の反応は複雑でした。被爆者団体にとって被爆二世への原爆放射
線の遺伝的影響の有無の問題はあるいはふれたくない問題だったのかもしれないからです。そんな中で、
深堀さんは「被爆二世の問題を放置すべきでない」として、わたしたちの活動を支援するとともに被爆者
手帳友の会に「被爆二世部会」をつくり、被爆二世の援護を求める運動を活動の柱の一つとして取り組ん
だのです。

在韓被爆者への支援

二つ目には、韓国・朝鮮人被爆者問題への取り組みでの関わりです。韓国人被爆者・金順吉さんが、強

制連行・強制労働そして原爆被爆を告発する「金順吉裁判」を提起したとき、全面的に支援してくれました。「被爆者の援護に日本人も韓国人もない」として、金順吉さんをはじめとして多くの韓国人被爆者の支援を続けられました。そして、金順吉さんが亡くなったあと、金裁判を支えた韓国原爆被害者協会釜山支部長（当時）車貞述さんに「手帳友の会・平和賞」を授与し、その功績に報いたのです。

韓日平和交流功労賞受賞

二〇〇二年に、韓日の平和交流に功績のあった個人を表彰し今後の韓日平和交流につなげ、在韓被爆者の支援活動の幅を広げることを目的とし「韓日平和交流功労賞」が創設されましたが、深堀会長はその第一回受賞者に選出されました。本島等 元長崎市長や岩松繁俊 原水禁国民会議議長、茅野丈二長崎愛病院 院長などとともに受賞した深堀会長は、さらに韓国・朝鮮人被爆者への支援活動を続ける決意を述べられたことが印象に残っています。

強烈な個性で運動をけん引

強烈な個性で運動を引っ張る深堀さんは、年代の違うわたしたちにとっては話をするのも緊張する人でした。そして、その強烈な個性とリーダーシップで一時代を築かれました。被爆六十年を経過して、葉山利行さん、秋月辰一郎さん、深堀勝一さんと相次いで、被爆者運動のリーダーが亡くなっていかれました。冥福をお祈りするとともに、その遺志を引き継いでいくことをお誓いしたいと思います。

（長崎市愛宕）



深堀会長、
おつかれさまでした。

平和公園の被爆遺構を保存する会

竹下 芙美

深堀さんとの出会いは'92年、平和公園の原爆遺構の出土した頃からです。「友の会」の会員ではなかったのですが、どちらかというと、私的なお付き合いが多かったのですが、私達の運動にも何かとお力を頂き、本当に心から感謝しております。

ただ一つ、毎朝（早朝六時前後）の電話には少々まいりましたが、三十九年もの永きに渡り会長職として活動され、又、「平和賞」も設立されて多くの方々を讃えて下さいました。「友の会、会長」という重責にあつて、少年の心を失われぬ楽しい人でもありました。早朝の電話は、その息抜きだったのでしよう。今はあちらで、ゆっくり休んでいらつしやるでしょうか。又は最近の核武装発言等、戦前に逆もどりしてゆく社会に怒つておいででしょうか。「友の会」も新しい会長さんが決まり、皆さんで、核兵器廃絶に向け、頑張つておられます。

どうぞ安らかにおやすみ下さい。お疲れさまでした。

（長崎市滑石）



長崎発、原爆メツセージ

元原爆病院医療ケースワーカー 増田幸子

深堀さんとの初対面は昭和三十七年五月、片淵町の原爆病院の一階玄関脇にあった医療社会事業部室であつた。一人で、紹介なしに、ぶらりと入って来られて、小一時間余ゆつたりと話をして帰られた。今、考えると多分私の首実検だつたのではなかつたらうかと思う。頂いた名刺は公務員の肩書だつた。それから時々同じような現れ方をして、序々に援護法の話がされた。多分私をオルグしていたのだと思う。

日本国は日米安保条約でアメリカから引き継いだものがあり、援護法もその一つであり日本政府は原爆犠牲者に対し特に戦時中動員令で拘束を受けて被爆した者に対し、補償する義務があるという主旨だつた。その後、私は受持つた患者さんを通して、彼に関する話を聞いた。原爆被爆死した娘さんの援護法の手続きを代行し、恩給を支給されるようになって、老夫婦の生活が少し楽になつたというもので、彼の働きがなければ動員された学生達の補償は認められなかつたらうというものだった。

国政選挙の度に、時の政府の政党を熱烈支持、援護法の拡大、原爆医療法の拡大は革新政を頼つては出来ない、一貫した考えを聞かされた。

エンタープライズが佐世保港に入港し、全国から反対運動の人々が佐世保に集結していた頃、浦上に小さなビルを建てたので見てほしい、ここを拠点にして運動体を立ち上げたいとの案内を受けた。間もなく、彼と彼の仲間は原爆手帳友の会の入会おすすめチラシを原爆病院の外来ロビーで連日配り、私の所には外

来受付、内科外来からこれも連日苦情が寄せられることとなった。見て見ぬ振りをしましょうというのを社会事業部の方針とした。後にも先にも病院ロビーでチラシ配りをしたのは彼らだけであり、忽ち会は爆発的に大きくなり、私の部署では彼らの活々とした動きを驚きをもって見守っていた。

あの頃から四十年余り、深堀さんは信念を持って一人でやり始めたことを、ゆるぎなく同じ地点に立ち尽して、人生を過ごされたと畏敬の念を持って思い返している。長崎発の原爆に関するメッセージがここにあった。

御冥福をお祈りいたします。



被爆者の視点に立つて

元原爆病院医療ケースワーカー 西 宣子

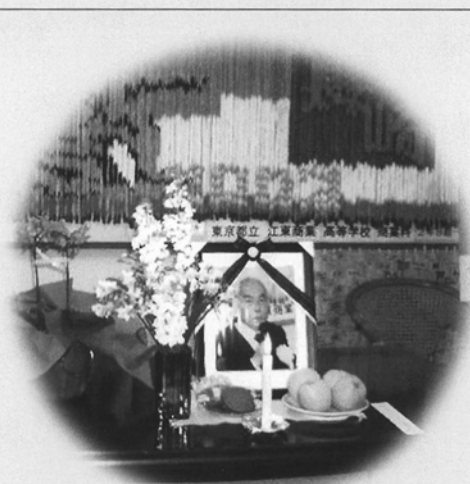
深堀勝一氏とお会いする機会があったのは、私が医療ケースワーカーとして働いていたからです。二〇代の私は上司の増田（旧姓松尾）幸子さんの側で彼が原爆の体験や平和運動について話すのを聞いたことを思い出します。

深堀さんは、それまでの原水爆禁止運動とは別に被爆者がほんとうに必要なものを獲得するために、全く新しい会をつくるのだと熱心に話しておられました。その若々しい姿を思い出します。少し浅黒い顔色の、黒ぶちの眼鏡の奥の目はいつもやさしく、にこやかでした。当時の原水爆禁止運動が、政治運動団体であったことの限界を見据えていておられたと思います。そこに彼の新しさと被爆者の健康と福祉のためにという熱心な思いを見ました。今でこそ、社会生活上の要求を目的にしたさまざまな運動体がありますが、当時はそういう視点は少なかったように思います。原爆病院のケースワーカーとしては、被爆者の高齢化と、病気でも通院しながら働ける職場や、入院するほどではないが、安心して生活できる所、などほんとうに待ち望まれたことです。増田さんと、保育所とホームを隣り合わせにつくったら、どんなにいいかと話し合ったものです。老人ばかり、病人ばかり、幼児ばかりというのではなく、いろんな立場の人がいるという状況がいいねと、そんなことも深堀氏に聞いてもらったと思います。

彼は、原爆被爆者生活援護法の制定を目指して運動をしようとっておられ、そのためには自民党にも社

会党にも被爆者の要求を聞いてもらい、実現を図ると言う姿勢であったように思います。医療社会事業部に、多分診療の帰りであったろうが、立ち寄り、「手帳友の会」の構想を熱心に話しておられました。その後実際に、被爆者を生活者の視点でまとめあげていかれました。カトリック信者としてのネットワークもその組織のベースにはあったでしょうが、社会の動静の変化に左右されない組織として、被爆者手帳友の会を誕生させ、後々の被爆者の援護法に近付くための足がかりを作られました。自分の経験を原爆被爆者の普遍的な福祉のために昇華させたことは私利私欲のない彼であったからこそ生まれ、発展したと思います。被爆者の生活援護の礎となりました。

悲しみのとき



長崎県被爆者手帳友の会 副会長
中村 キクヨ

との 深堀会長 別れを惜しむ

会長、聞こえる。中村キクヨです。

今日は私が友の会を代表して、お別れの挨拶をすることになり、昨晩はほとんど眠れませんでした。

会長、昨日早朝より井原さんから電話をいただき、胸が高鳴るのを必死におさえながら井上病院へかけつけ四一二号室へ着くと、会長の左腕をしっかりと握りしめました。

でも会長は“痛い”と言われなのまま、午前八時三十分、矢嶋さん、辻原さん達の願いもむなしく、静かに息を引き取られ、私は涙があふれてその場で呆然と立ちすくんでしまいました。

会長、貴方との出会いからこれ五十年が経ち、思い出せば、東京での陳情行動をはじめ、常に喜怒哀楽を共にし、誰かが言われたように、“長いようで短い二人三脚”の旅でした。

会長、昭和三十二年に動員学徒犠牲者の会を結成すると、直ぐに動員学徒、女子挺身隊、徴用工などの救済・援護を取り組み、貴方の活動は目を見張るばかりでした。

さらに十年後、被爆者手帳友の会の結成とともに、被爆者の援護と手帳取得を求め、日夜、県下を東奔西走され、多大な成果を収めると共に、県下最大の被爆者組織を作り上げられました。

また、被爆者の声を背景に、原爆病院やかめだけの建設時には、政府、久保知事に對し真つ向から切り込み見事に私達の期待に応えられました。

そうかと思うと、豊かな発想力で“友の会平和賞”を創設され、“権力に媚びず、



庶民の味方となって平和運動を率先垂範した人」を基本に、元長崎大学長の具島先生や、ノーベル平和賞を受賞された元大統領ゴルバチョフ氏へ平和賞を授与されました。

特に、核大国である米ソに対し、被爆地長崎から警鐘を乱打され、核兵器廃絶を強く求め、矢嶋さんと相談し、「長崎の鐘」を贈呈されたことは、今でも私達の誇りです。

そしてまた、被爆五十周年の節目の年には全会員に呼びかけ、「空白の二十時間」を発刊され、子供たちへ被爆者の実相を伝えられました。

会長、会長は時には強引でカリスマ性があると同時に、時にはワンマンでした。反面、優しさも随所に発揮されました。

例えば、「俺は朝鮮人に助けられた」と常々言いながら、命の恩人である朝鮮に対し、韓国、北朝鮮を問わず、両被爆者団体へ気持ちよいカンパをしたり、大阪の中学生からのお礼の手紙がくると、ニッコリ笑って、ウン、ウンとうなずき、三月の節句が近づくと、原爆病院や恵の丘へひな壇を寄贈するなど、誠に心優しい会長でした。

会長、会長の死は私達会員に大きな衝撃を与えたばかりでなく、長崎、いや日本の平和運動にとっても計り知れない損失となり、これからどう生きていけばいいのか途方に暮れているのが正直なところです。

会長、名残は尽きませんが、会長が作った友の会のすばらしい歴史と伝統を受け継ぎ、残った私達がしっかりと守り抜きますので、どうか安らかに眠り下さい。

浦上の丘から祈りを捧げながら。さようなら。

平成十八年二月三日

訃報を伝える各紙

県被爆者手帳友の会会長

深堀勝一氏が死去

78歳



長崎の被爆者運動を長くリードし、被爆者援護策の充実などに力を尽くした県被爆者手帳友の会

会長の深堀勝一（ふかほり・かついち）氏が二日午前八時半、糖尿病性疾患のため、長崎市宝町の井上病院で死去した。七十八歳。長崎市出身。自宅は長崎市坂本一丁目八ノ二九。葬儀・告別式は三日午後一時から長崎市本尾町一ノ七九、カトリック浦上教会で。喪主は妻春枝（はるえ）さん。

【27面に関連記事】

深堀氏は旧制長崎商業在学中の一九四五年八月、学徒動員先の三菱長崎兵器製作所大橋工場（大橋町、爆心地から約一・四キロ）で被爆。全身に重傷を負い、原爆で母と弟妹を亡くした。

戦後「動員学徒にも軍人・軍属への補償と同等の補償制度を」と訴え、五七年に「県動員学徒犠牲者の会」を結成。六七年に、当時加盟していた長崎原爆被災者協議会（被災協）とたもとを分かち、新たに「手帳友の会」を発足させた。

友の会では、手帳交付申請の支援を通じて被爆者の掘り起こしに尽力。県内各地に支部網を設け、有力被爆者団体の一つに育て上げた。大胆な行動力と強いリーダーシップで知られ、被爆者援護法の制定や被爆地域是正をめぐる中央への働き掛けでも中心的な役割を果たした。

八八年には、平和への貢献者を内外を問わず表彰する「友の会平和賞」を創設。旧ソ連のゴルバチョフ元大統領らに贈呈するなど、国際的な活動にも取り組んだ。半面、ワンマン運営への批判も一部にあった。

関係者によると、昨年秋ごろから体調を崩し、入院を続けていた。

非常に残念

伊藤長崎市長の話。長崎の被爆者運動を支えてきた大きな柱のお一人であり、非常に残念でならない。生前のご功績をしのび、謹んでご冥福をお祈りする。

反戦の思い新たに

深堀勝一さん
儀 250人、別れ惜しむ

糖尿病性疾患のため二任司祭は「反戦、平和の日、七十八歳で死去した 思いを声大にして叫び 具被爆者手帳友の会会 続けられた。彼が念じた 長、深堀勝一さんの葬儀

・告別式が三日、長崎市 本尾町のカトリック浦上 教会で厳かに営まれた。
親族や友の会の会員、 平和運動関係者ら約二百 五十人が参列。平野勇主

平和な世界が構築される よう祈りたい」と功績を たたえた。

本島等前長崎市長が 「けた外れに不思議な男。 類例のない強さを持った 人だった」、手帳友の会副 会長の中村キクヨさんが 「友の会の歴史と伝統を 受け継ぎ、しっかり守り抜 きたい」と弔辞。参列者 は、白い花を一輪ずつ祭壇 に手向け、強いリーダー シップで長崎の平和運動 を引っ張ってきた深堀さ んとの別れを惜しんだ。



約250人が参列した告別式 ーカトリック浦上教会

2006年2月4日付「長崎新聞」より

被爆者援護に尽力

深堀さん死去 関係者「遺志継ぐ」

「強烈なりターシツ
プとカリスマ性」を發揮
し、被爆者援護策の充実に奔走した県被爆者手帳友の会会長の深堀勝一氏（モ）が二日早朝、亡くなった。



自らの被爆体験を描いた絵画を掲げる深堀勝一氏＝2004年4月

一時は県内最大の被爆者団体といわれた同友の会を発足させた深堀氏は一九七五年に公務員を辞め、支援運動に専念。健康手帳の申請支援とともに、被爆者救済に果たした役割は大きい。

長年、活動を共にした同会の中村キクヨ副会長（八）は「やると決めたらとことんやる、どんな人の前でも自分の意見をはっきりと言える人だったのに」と声を震わせた。

深堀氏は韓国被爆者や被爆二世の支援にも協力。全国被爆二世団体連絡協議会の平野伸人会長（五）は「被爆者運動の一代を築いた人。遺志を継いで頑張りたい」と誓った。

五十年来の友人だとい
う本島等・前長崎市長
（八）は外国人受賞者も多
い平和賞創設など幅広い
活動に触れ、「権力に頼
り返った。
らず独立独歩で生きた潔
癖な人。被爆者の存在を
世界に知らせようとした
大きな存在だった」と振

被爆者手帳友の会・深堀会長死去

核廃絶へ連帯訴える

県被爆者手帳友の会会長の深堀勝一さんが2日死去し、被爆者援護、核兵器廃

絶を共に訴えた被爆者らの間に悲しみが広がった。同会は、被爆2世100

0人を含めて約1万人の会員を抱え、県内の被爆者団体では最大規模。

原水爆禁止県民会議の活動を通じて深堀さんと親交

を深め、現在、友の会事務局長の矢嶋良一さん(64)は「活動的で、被爆者の連帯を訴え、県内をくまなく回っていた」と振り返った。

事務局には深堀さんが描いた、被爆直後の惨状を伝えるいくつかの水彩画が飾られている。昨年4月の友の会の会合で、深堀さんは



自作の絵を掲げる深堀さん(2005年4月撮影)＝県被爆者手帳友の会提供

一つの作品を高く掲げて見せた。生死の境にいた自分が、腕をつねって生を自覚した記憶を描いたものだ。作品に深堀さんの強固な反戦思想を見て取る矢嶋さんは、改めて壁に掛かるこの絵を眺め、「良か絵です」と話していた。

2006年2月3日付「読売新聞」より

深堀さん死去

貫いた原爆への怒り

被爆者ら行動力しのぶ



被爆者援護法案に関する衆院厚生委の地方公聴会で陳述する深堀勝一さん（中央）

＝1994年11月、長崎市内

長崎の被爆者運動をリードしてきた県被爆者手帳友の会会長の深堀勝一さんの訃報（ふほう）が伝わった二日、深堀さんを慕った被爆者らは深い悲しみに包まれた。被爆者援護策を実現させた抜群の行動力と統率力。半世紀以上も貫かれたその活動の原点は、一瞬で街を破壊し家族らの命を奪った原爆への激しい怒りだった。

深堀さんと同じ学徒動員先の三菱長崎兵器製作所大橋工場で被爆した日本被団協代表委員の山口仙二さん（もも）雲仙市は「被爆者に補償がなかった時代、お互い黙っていらなかった」と、被爆者運動の草創期を振り返る。

深堀さんは一時、山口さんとともに長崎被災協理事に名を連ねた。しかし運動方針で対立し、「友の会」を設立した。「仙二さんと意見は対立したが、仲は良かった」というのが深堀さんの口癖。心から冥福を祈りたい。山口さんは声を震わせ、友の会設立後の一九六

八年に原爆特措法が制定され、健康管理手当などの支給が始まった。深堀さんは県内各地の被爆者を訪ね歩き、手当申請を勧めた。

の行動。原爆への憤りが根底に流れていた」と涙を浮かべた。

一方で、意見の食い違ふ幹部らとの対立や支部脱会など、組織の「内紛」もあった。元幹部は「気性が激しく、反発して去る人も多かった」と言葉少なに語った。

二日夜、長崎市本尾町のカトリック浦上教会で通夜が営まれ、会員ら約二百人が参列した。

国家補償を明記した被爆者援護法制定を求め、夜行列車で上京陳情を重ねた。九四年の地元公聴会では、原爆で家族を亡くし、自身も被爆者健康手帳を持つ遺族に限った「特別葬祭給付金」支給に反対意見を述べ、自ら受け取りを拒否した。中

被爆者の援護に尽力

深堀勝一さん死去
惜しむ声広がる

2日に78歳で死去した
の深堀勝一さんは、40年
の先頭に立ち、被爆者へ
の深堀勝一さんは、40年
の先頭に立ち、被爆者へ
の補償や援護の充実を求
め、活動に力を注いだ人
だった。

深堀さんは、爆心地か
ら約1・4キロ離れた学徒
動員先の三菱兵器大橋工
場で被爆。母親ときょう
だいを失い、自らも全身
に重傷を負って2カ月近
く入院した。

57年、動員学徒への補
償を求め、県動員学徒犠
牲者の会を結成。67年に
現在の県被爆者手帳友の
会と名前を変え、最盛期
の90年代前半には、約5
万人の会員を抱える県内
最大の被爆者団体となっ
た。

88年に創設した、平和
活動に貢献した人に贈る
「友の会平和賞」は、こ
れまでに旧ソ連のゴル
バチョフ元大統領や、横
綱朝青龍関らも受賞し
た。

同会によると、深堀さ
んはここ数年体調を崩し
て入院を繰り返すな
ど、活動に参加できな
い状態が続いていたとい
う。同会の矢嶋良一事
務局長(64)は「個性の
強さで反発を招くこと
もあったが、着想豊か
で、情熱と積極性のある
リーダーだった」と話し
た。

2006年2月3日付「朝日新聞」より

ともに歩んだ道のり

歴史に残る名会長

鍵山芳子



深堀会長に出合ったのが昭和四十三年でした。

今は亡き野口さん宅に十人余り何回となく集まり、会長の色々の説明があり矢上支部友の会が発足し、支部長に野口総一さん、副に金原勇さん、私会計もそれぞれ班長も決まりました。会員も二百名以上となり会長も大きな支部になったと喜んで下さり、とても力を入れて下さいました。

第一回の総会が商工会議所で行われ、六十人余り集まりました。十年前家を解いた折当時の日記を亡くしてしまい、思い出し乍らの文になります。当時より問題解決のため四、五人で陳情に上京されました。私にも声かけて下さいましたが、家庭の事情で参加出来ませんでした。その成果が現在になつてると思います。とても実行力のある方で友の会のために随分貢献されたことは皆の知る所です。私もよく事務所へも

よせて頂き、会員の手帳の件等親身になつて相談に応じて下さいました。特に忘年会等で愉快になられあの笑顔がうかびます。

晩年は淋しい御家庭であられ、回りの方々が良くお世話され、会長さんのままで往生され、一番信頼なさつていた現井原会長でホッとなさつてる事でしょう。昭和五十年には現川中尾の人々もどんなに喜ばれたことか一生感謝で過される事でしょう。たまにはトゲのある言葉も今はなつかしい思い出となりました。友の会の歴史に残る名会長、心よりありがとうのお礼を申し上げ御冥福をお祈り致します。

(長崎市田中町)

深堀会長へ初めてのお手紙

本部会計監査 嘉松愛子



会長、そちらでのお暮し、もう慣れられましたか。ご様子の聞かれないのが何とも残念です。先日初めて会長の夢を見ました。今まで一度も見た事のない会長の夢。なつかしく、そして不思議な感じでした。

なつかしいと言へば厚生省に行った折の車中の事が思い出されます。単調な景色にも飽き話題もないままゴトゴト汽車にゆられての帰り途ふと文藝の話になり会長は朝日歌壇に何回か入選されたことを誇らしそうに話して下さいました。そうして私の乞うままに、その入選歌を諦んじて下さいましたね。

口下手な私は何も申し上げませんでした、感銘深い立派な歌でした。その時書き留めておかなかった事を今も口惜しく思っております。私はその時一句も口には致しませんでした、この紙面をお借りして拙ない句を、会長に捧げます。どうぞ御笑覧下さい。

遠くなる

君に似し遍路の背中遠くなる

背い高き君に日傘の重たかり

炎天に座る反戦われも入る

検診やまわして帰る秋日傘

兄の忌の禿頭はげならば小春かな

ふかし諸戦争いもよぎり少女よぎる

ジャンパーがづかづか入り厚生省

会長が飄々ヒョヒョよぎる二月かな

八句の中、四句は会長追憶の句です。苦笑していられるお顔が見えてきます。

(長崎市立山町)

骨身惜しまず運動のために

川下 フミエ



当時、私は、純心学徒隊として浪の平工場へ通っていました。

八月九日、原爆の日は、非番だったので、下宿の家（油屋町）にいました。ピカッと目の前がしたかと思つた瞬間、天井板が落ちてきたので、一階に駆け下り、すぐに防空ずきんをかぶり、八坂神社の横の防空壕へ駆け上り、その日は、一日中防空壕の中で過ごしました。

夜になって外に出てみると、県庁辺りが火の海になり、燃えているのにびっくりして、体が震えて呆然と見ているだけでした。長い夜を過ごし、実家が田結村（今の「飯盛町」）だったので、夜が明けるのを待って、寺町を通り中川町に出ると、びっくりすることには、荷物を背中に背負い両手にも荷物を持った人、服が焼けてぼろぼろになった人、けがをした人などが、一列に隙間なく歩いて、本河内の坂を後から後

から続いています。

終戦後、学校から慰霊祭の通知が来たので、友達と会いたい一心で、焼け野が原を無我夢中で行ってみると、学校は跡形もなく、十字架だけの祭壇が建てられていました。多くの先生方、上級生の方が亡くなられたことを知らされ、涙が込み上げてきて、ただお祈りするだけでした。

深堀会長との出合いは、昭和四十三年七月十四日、福瑞寺において、「原爆手帳友の会」の発会式が行われた時でした。出席者は、百余名りでした。私は、会計という大役を引き受け、そこから、深堀会長、事務局の方々、多くの会員の皆様とお付き合いが始まりました。

深堀会長が、田中町から坂本町に引っ越されるときは、辻原さん、青木さんと三人で、荷作りの手伝いに行きました。私の家が国道沿いだったので、よく立ち寄ってもらい、情勢など

を聞かせてもらっていました。

思い出に残るのは、夜行列車に乗り、陳情に行ったことです。国会会館に着いて、初村先生、倉成先生、西岡先生、田口先生の所を回り、最後に、首相（竹下登）官邸に行きました。このような陳情には、三回行きました。

深堀会長との出会いを通して、年一回の総会、忘年会にもよく出席し、多くの人とふれ合うことができました。かめだけ原爆ホームの落成式、長崎の鐘の贈呈式、中国・アメリカ・ソ連に長崎の鐘が送られたときの壮行会にも出席しました。

まだまだ思い出はつきませんが、平成十七年十一月二十日、会長の体調がよくないとのことと千羽鶴を持ってお見舞に行ったところ、大変喜んでおられ、短時間ではありましたが、思い出話などをして帰りました。玄関まで見送ってまでもらい、それが最後の別れでした。

長年にわたり、骨身を惜しまず、被爆者援護法制定推進のため、平和運動のために働いてこ

られた会長を亡くしたことは、会員一同、悲しみに堪えません。会長が亡くなられた後は、副会長の中村キクヨさんが、六月の総会まで引き継がれ、その後、総会で選出された井原東洋一さんに引き継がれました。

八月九日の平和式典には、中村キクヨさんが、平和の誓いを立派に読み上げられました。きっと、深堀会長も見守っておられたと思います。

深堀会長には、三十八年七月という長い間お世話になりました。安らかに眠りください。

合掌

（諫早市久山台）

日銀窓口業務からのご縁

河邊 総子



人の出会いと、別れは不思議なものと思えます。昭和二十四年三月（西暦一九四九年）、日本が敗戦し混乱も未だ納まらぬ時期、地方経済復興の為に日本銀行長崎支店は開店いたしました。私はその時、長崎県立長崎女子専門学校（現シーボルト大前身）を卒業と同時に採用が決まり、入行させて頂き銀行員生活をスタートしました。官公庁を相手の公務を司る国庫課に配属され、与えられた仕事が官公庁の長崎支所等の諸経費を預る係でした。

深堀さんは、当時、農林省統計調査長崎事務所の国家公務員であられ、毎月の諸経費が本庁（農林省）から入金されるのを受領する為に、国庫課の窓口に来店され、小切手の受取り裏書に署名捺印と共に面倒な受領手続を済まし、発券課で金種別の現金受領をして帰っておられました。窓口で差出された小切手に裏書を依頼し

番号札を渡し、私が担当の帳簿に記入し所定の手続を経て、現金受渡し迄に相当の待ち時間が要りました。

担当者の私の旧姓を知った深堀さんは、私の兄と名門の長崎市商（現在の市立長崎商業高校）同クラスメートだと話されて、毎月の入金の確認電話の連絡等を依頼される様になりました。各々の官庁の経費受領のお客様（お役人）が多い為に、お待たせの時間が長く、ご迷惑をかける事が多かったと思いましたが、余り叱言をおっしゃらない、優秀なお役人さんの印象が残っています。

時は経ち。友の会を発足の為、深堀さんは被爆地の錢座地区の被爆者の結束に尽力して下さいました。当時の錢座自治会の会長故高比羅熊三さんや錢座地区婦人部の方々を勵まし乍ら、天神町の故田中ヒデさん、錢座町の故清水マサ

さん、故森下さん、故(母)小桐タケ等、又現在役員の(月川さん)水江オケさん、村里さんの活躍を支えて下さいました。錢座公民館に集い乍ら、数々の催しに皆さんの協力を頂けた事は懐かしい思い出です。錢座公民館建設では資金調達が難航していましたが、故高比羅熊三自治会長と共に東京銀行長崎支店に在職の(父)故小桐博も、佳きご縁で、多くの知人、友人の方々のご協力を頂き、公民館完成に至りました事を深堀さんが大そう喜ばれて、両親の許(現住所)へ度々来宅され快談されました。

十二月クリスマスには友の会員が浦上駅に集合し、出迎えのバスに乗って、亀岳の「ホーム」にお招き頂き、和気藹藹の、雰囲気の中で食事パーティが催されて、お土産に美味しいケーキの大きな箱入りを持ち帰った事は楽しい思い出です。

政治的な活躍をなさった深堀さんは、会員の為に国会、県議会、市議会の議員さんの選挙運動に大きな力を発揮して、機会毎に支援しておられました事は、有難く深く感謝しております。

最近では押淵礼子県議の立候補に応援して頂き、婦人候補唯一人の当選で最高点に導かれた功績の一角は、大きなものと存じました。

現在医療面で又長崎県の婦人の力が発揮出来る様に、又少子高令化の進む現代の諸問題で活躍中の押淵礼子県議員の議会代表質問の際に、議会傍聴席の上段に坐って、熱心に傍聴しておられた深堀さんの姿は、忘れられない思い出です。

又老人ホームの「恵の丘」に入所しておられる高齢の婦人の為に、三月の桃の節句のお雛様の贈呈をなさって慰問と励ましを残されました。

深堀さんのお優しい美しいお心が偲ばれて頭が下がるばかりです。お元気だった深堀さんに病が近づき、友の会の皆様の数々の応援のご配慮の中で、病氣治療の病院生活を過ぎられました、今年二月に悲しいお別れの日が参りました。私は沢山の有難い思い出を残して下さいました深堀勝一友の会会長に、感謝とお礼を申し上げご冥福を念じ上げ乍ら、追悼の文を綴りました。

(長崎市錢座町)

尽きせぬ思い出の数々

佐世保南支部 北村 トクエ



昭和四十二年十一月に深堀会長さん、長崎県久保知事さん、長崎市長諸谷さん、被爆者手帳友の会城栄町支部長松尾さん、若竹町理事保立さん、油木町理事峰さん、柳谷町理事永元さん、佐世保南支部皆様と一緒に国会陳情に上京致しました。

北村会長さんが何をお願いしたいかと申されましたので、病院代を無料にして戴きたいと申し上げましたところ、長崎の弁護士馬場先生に電話しなさいと云われ電話致しました。馬場先生が厚生省に連絡されましたので四十三年四月に健康管理手当が戴けるようになりました。深堀会長さんの御尽力のお蔭と感謝致して居ります。

厚生省陳情に行き、如何に会長さんが人物でいらっしやるか頭が下がります。淡路島の慰霊祭にワゴン車で会長さん外十三名参列、被爆者手帳友の会代表として参加させて戴きました。会長さんに感謝致して居ります。

ハワイでは平和の鐘を打たせて戴き、その時は会長さんは空港に見送りにおいでになり、又帰りもむかえに来て戴き、ほんとうにやさしいお方で頭がさがります。

瀋陽で平和の鐘を打たせて戴き、上海の迎賓館で歓迎会があり、呉副首相より握手を受け大変光栄に思つて居ります。会長さんのお蔭だと感謝致して居ります。会長さんは神様のようなお方でした。一生涯御恩はわすれません。

会長さんは谷間の家を尋ねておいでになり、「頼む佐世保に支部を作つて下さい」とおいでになり、一生懸命三ヶ月かかって被爆者のお宅を尋ねて廻りました。会長さん始め会員の皆様の御蔭と深く感謝致して居ります。

深堀会長さんが「四十周年を祝つてあげるから頑張つてね」と云われていましたが、残念乍ら他界なされショックでした。会長さん天国で安らかにお眠り下さい。合掌

(佐世保市有福町)

深堀前会長へお詫びせねば

熊 健



今を去る四十年位昔のこと 昭和四十年の二月の寒い夜 深堀会長が野母崎に來られて被爆者手帳友の会の話をされました。地元の町議 吉田源平氏の賛助があり 友の会野母崎支部が生まれた事でした。当時は三百名位の会員でした。吉田氏は自身被爆者では無くて奥さんが被爆者であったと聞いて居りました。吉田氏は深堀会長に賛同し、会長と共に副会長として、友の会のために、支部のために、力を出して下さったのです。

其の後野母崎支部は歴代の支部長と役員協力、活発に、順調に本部会長などと友誼を深めて居たのですが、平成十三年頃に、当時の支部長が会長と意見の相違が生じ、会長から「前は支部長を止める」と言われたらしく、支部長が反発し、野母崎支部員に一言の説明も無く、支部を解散し、会費の残りを自分達役員で、飲み食いに使って仕舞ったのでした。

私は野母崎支部が、会長から除名されたと聞

き、直接会長にお会いし問いましたところ「支部の除名はして居ない、貴方が支部を立て直して下さい」と言われましたが、旧支部長と役員が反対に動き、深堀会長の期待に添えず、残念で申し訳なく、心に残って居ります。

意見の違いはだれにもあること、それを踏み越えてこそ さらなる発展があるはずです。深堀会長と今迄の役員皆様の協力で今の友の会があると 思います。私達の被爆者手帳友の会 これからは新しい井原会長様 役員皆様の協力、さらなる発展をお祈り申します。深堀前会長も天国から、私等をお守り下さって居る事を信じます。約束を果たせなかつた私の事、お許し下さい。

新しい会長様 役員の皆様 健康に充分に、気を付けて、私たち会員のため 頑張ってください。乱文のままに

(長崎市高浜町)

ハワイ航路で帰りたい

田川 チサ子



一瞬にして最愛の尊いご家族を亡くされ、その深い悲しみ、苦しみ怒りを決して口にされず、犠牲となられた多くの市民の方々のために、又、ご遺族の方々のために、そして青春を奪われ、一生不安を背負って生きて行かなければいけない被爆者の方々のために、人生の全てを被爆者の援護に靈魂を捧げて来られました会長、その偉大なご功績に今あらためて尊敬と感謝の気持ち一杯です。当初何人かで設立された、動員学徒の会員も少ないため、上京される費用も大変だったと思います。運動をはじめられた時は法律がなく、被爆者援護法が出来る迄に力を注がれました。出来ましてからは当面一番必要な事から決議されれば有言実行、先頭に立って上京され、あの行動力は皆さんご承知の通りです。其の後あらたに被爆者手帳友の会を設立され、至る所で集会を開き援護に当られる中も、いつも体調が悪いので真夏でもクーラーも駄目で、冬の防寒用のジャンパーでした。今それを思う

と涙がこぼれます。常に平和を願い、原爆の丘に平和の鐘、長崎の鐘を建立され、其の後平和の使者として旧ソ連のレニングラード、中国の瀋陽、そしてハワイのホノルルと長崎の鐘を贈られ、会長の残されたご偉業は深く私達の心に刻まれています。

其の数年後、ハワイのホノルル市役所に建立されている長崎の鐘を現地の平和運動家の方々と鳴らす事になり、十二月八日に合せて会長外五名の方と、渡米致しました。其の時「帰りはハワイ航路の船で帰ろうで」、又は帰りたいたいと言われ、その時のことを思い出す度に胸がいたみます。

大きな体でそして大きな心で友の会を愛し、時には少年のような会長、長い間お疲れさまでした。有り難うございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(立山支部)

鯨肉じやがの思い出

本部副会長 東海 ムツ子



深堀会長様と最初にお目にかかったのは、一九六七年の夏、私が乗り降りしている、川平線の赤水平バス停で夏の暑い朝、ジャンパー姿の会長さんでした。おはようございますといったら、うんとといった感じでびよこんと頭を下げられたけれども何方かわからず、何処かで見えた人かなと思っていたところテレビで被爆者手帳友の会という事をいっておられた人という事がわかりました。会長さんが川平町のご自宅に居られた頃の事でした。会報綴を見ましたら友の会発会式が一九六七年六月十八日、川平地域集会が同年八月六日となっております。それから二十五年後友の会川平支部の支部長さんと現在の長浜支部長と一緒に私の家へ来られ友の会へ入会して長浜さんと一緒に云々といわれ、「川平の金魚のふん」が誕生。それから明日何処で、何時から拡大理事会があるから二人来て受付を

するようにといわれ、はいといって行けば、先輩さんから何しに来たかといわれ、指示された通りにいうと、受付は自分達がするから必要ないというありさまで、そうですかと引き下りしました。いつかの終戦記念日の時は、上京中の私の家へ夕方遅く来られ、八月十五日の全国戦没者追悼式へ行けなくなった人が居るので長浜さんも連絡取れないから二人の住所その他を記載してすぐ持って来るようにといって帰られた由、主人から連絡があり書類提出を依頼し、私も間に合うように帰崎、皆様と同行参列させて頂いた事を感謝します。

川平支部総会の時は必ず出席され、隣近所の人達と名前を呼び合い、会員共々喜び合って居られた様子も今は思い出だけで、初代会員さんは何人か居られるようですが当時を語って貰える人がお一人も居られず淋しい思いが致しまし

た。平和会館の方に移ってから、鯨の肉は買って来るけん、じゃがいもと一緒に煮てくれといわれ、長浜さん手作りのじゃがいも・玉ねぎをもち、大きい鍋を用意し、ガス屋さんからガス器具を用意して貰い、床に敷く板を借り全くの泥縄式とはこの事かなと、長浜支部長さんと二人で一人前を現在も進行しております。

長崎県被爆者手帳友の会 会長 深堀勝一様、永久のねむりにつかれ早くも十ヶ月余を過ぎ住む所は天と地と違っても生前通り長崎県被爆者手帳友の会の今後を見守り尚お導き下さることを祈願しながら会長様追悼の書の一片に掲載して頂きたいと思えます。

平成十八年十二月九日

(川平支部)

今は愛犬ターボーとご一緒ですか

本部副会長 中村 キクヨ



深堀会長との出会いは昭和四十二年。とても強い日差しの中でした。そして別離は寒い日の朝でした。

色々な想い出を残して去っていかれました。私達、被爆者の為に全力を挙げ、会の先頭に立つて最後まで運動された方でした。常に弱者の立場に立ち、強さの中にも暖かい人間性を感じる方でもありました。今考えてみれば、体力のない会長のどこにある強いエネルギーが秘められていたのだろうか、ただただ驚くのみです。

何回か政府国会陳情にも同行させて頂き、厚生労働省の方々と机を中にはさんで数時間議論をしたこともありました。「被爆者の立場をよく理解して下さい」と涙を流しながら訴える会長は相手の方の「そのお話はよくわかりました」との返答があるまでは何時間でも席を立ちませんでした。いつも中身の濃い話をされ、私

もよい勉強をさせて頂きました。話が終わりほっとしていると、名物のカマボコを袋から出して皆さんに振る舞い「うまかばい。食べたなら元気がでるよ。」そう言って笑わせたこともありました。

私にとって忘れることができない想い出があります。

大きな麦わら帽子をかぶった会長が「海水浴に来た。」と事務所のお手伝いさんと二人で我が家に訪ねて来られたことがありました。「今は海水浴場はないのですよ。」と私が言うと、「なら海水を汲んでバケツに入れんね。それで日光浴をして帰る。」本当に困りました。こんな風にわがままなところもありました。けれども人通りも気にせず、子どものように海水を体にかけ嬉しそうにしている姿、最後にはうとうとと寝入ってしまった会長の姿を見て、お手伝いさ

んと二人、笑い転げたことが今でも昨日のことのように思い出されます。

病弱な体に鞭打ちながら、最後まで強い意志と信念を貫かれた会長に改めて感謝いたします。

動物好きな会長でしたので、きっと今頃は空の上のお花畑で我が子のように可愛がっていた愛犬のターボーを抱き、にこにこしながら鳩に餌を与えていることでしょう。そんな姿が目には浮かんできません。安らかにおねむり下さい。

(長崎市小瀬戸町)

故深堀会長を想う

早崎 猪之助



風吹くままに花は咲き 雲行くままに人は去る、私共被爆者の為に一生一代をそそぎ、多くの人の心を取り上げ、かたい役所、國の大臣に渡り合い、そして平和の為に働いて下さった会長こそ私共の生き神様でしょう。

合掌

(長崎市立岩町)

被爆者の親として感謝の意で一杯です。私も二年前よりの入会者で、長年恩恵を受けながら、其の間の御無沙汰お許し下さい。色々と書を見て今日までの会長の苦勞が手に取る様に見えます。

他界される前、「今や自分の仕事は終わった。何一つ想い残す事はない」と言う言葉を聞きました。

今天国でゆっくり休んで下さい。深堀会長の御冥福をいのります。尚平和の鐘は九の日に浦上の丘より全市に鳴渡つてます。私共を又天国よりお守り下さい。終なき原爆の日幾年去れど

深堀勝一君を悼む

平山兼則



貴君は原爆動員被爆者の会、又原爆被爆者友の会を結成し、終始一貫原爆被爆者死者、又、遺族の方々に多大の功績をされました。貴君の功績は誠に大と思いますが。若くして病に冒され、未だ七十八才にて夭折されました事、私共小学校の同級生として慙愧に耐えません。

貴君は山里小学校、昭和十五年卒業生でいと学年は同じですが、クラスが違っていた様でした。従って余り遊び仲間ではなかった様でした。併しカトリック信者で私も同じですが、毎週月曜日から金曜日まで学校の授業が済んだら一目散に教会に行っていた。その当時教会の教え方（カトリックの教えについての先生）は眞田さんと呼ばれていて、その教については学校の先生よりも恐れられた人物で、少しでも騒いだり悪戯すると竹の笞で殴られていたので、戦々恐々としていた、まるで当時の軍隊式で教

え方をしていたので、宗教教育をするのに……、と子供心に変な気持だった。無断欠席しようものなら酷しい笞打ちの刑が待っているので欠席する者殆どおらず真剣に教えのことを学んだものです。私は真面目で一回も譴責は受けませんでした。殆どの人が痛い目を受けたのではないかと思う。

余談はさておき、彼は長崎市立商業中学校に進学し、卒業は多分終戦の年だと思えます。ですから、学徒動員で被爆したのでしょうか。昭和二十五年前後には農林省統計事務所勤務し公務員として働いていた様ですが、或る日突然私の会社に電話があり、同級生の誼で印刷の仕事をして二、三年続けて貰った記憶があります。その後、彼は学徒動員の会に参加し、彼の努力で学徒動員で軍需産業に従事し、戦災で死亡したり負傷した生徒の為に運動したり色々な面で孤軍

奮闘、政治家にも働き掛け、被爆手当、援護措置を受けるべく頑張った様です。彼が頑張ったお陰でと云いますと大袈裟ですが、援護措置が受けられたものと思う。被爆者友の会も同様です。普段は寡黙実行型で政治家に対してははっきりと物申す人でした。

最後頃にはロシアのゴルバチョフ大統領に対し、平和賞を授賞したり、長崎の鐘を原爆公園に、露、中、米に対して建立し、長崎からノーヒバクの旗印を揚げた功績は大です。同級生として彼の冥福を祈り、又平和の到来する事が彼の遺志に通ずると思います。

原爆忌 祈り洩れくる みぎひだり

(長崎市平野町)

「気性激しい中にも優しさが

深堀 寿子



会長ご逝去の一報をテレビのニュースで知った時、私は瞬間、「えっ」と大きな声が出てしまいました。まさかという思いで一杯になりました。人生最大の悲しみは、「死」という事なのでしようか。涙がこぼれ落ちました。戦後、友の会を設立して頑張つてこられましたね。最後は病に倒れられ、本当に残念でした。

私と会長との出会いは、私の主人が浦上の出身で、会長とは幼なじみという事もあり、会長ご自身から事務所の手伝い（ボランティア）を請われ、十ヶ月程お手伝いをさせて頂いた事があったのですが、その頃からだったように思います。それまでは主人から話しを聞く程度でした。私も時々、事務所に行く事もありました。当時は、有川さん、新木さん達が居られました。そうそう、犬のター坊もいました。その頃が、会長にとっては最も充実した時期だったような

気がします。会長は、どちらかという気性が激しい一面があり、人によっては受け入れられない面もあったみたいですが、時には優しい面もあるよと主人が申して居りました。

もう少し、会の為にも健康で長生きして欲しかったと思います。会長亡き後は、良き指導者が引き継いで下さって、天国の会長も喜んでおられる事でしょう。

最後になりましたが、友の会の今後の発展を心からお祈りしてペンを置かせていただきます。（主人深堀勇、病床の為、拙いながらも一筆書かせていただきました。）

（注）深堀勇様は、残念乍ら昨年十二月帰らぬ人となりました。

平成十八年六月

（長崎市上野町）

ハワイで永遠の平和を誓う

前田昌宏



平成四年十二月三日、忘年会終了後、会長より下五島の久保氏と上五島の私に連合体をつくりたいとの相談があり、下五島、上五島ともこれを了承しました。

これに伴い、上五島では五ヶ町の協議会を十二月十日に開催、有川町、若松町、奈良尾町、上五島町、新魚目町南、新魚目町北の各支部の承認を得て、上五島連合支部の組織化を決定いたしました。引き続き、平成五年四月十六日奈良尾町で、講師は長崎より兼松茂氏来島、連合支部が正式に発足致しました。

これも一重に皆様方のご協力、ご尽力に深く感謝いたします。早速深堀会長にも電話でご報告いたしました。

平成十年十一月、深堀会長からハワイで平和交流会に参加希望者はいないかとの問合せがあり、町内から三名(前田昌宏、永田弘、吉村悟)の希望者があり、翌年一月十四日、長崎の皆様

と共にハワイへ出発しました。

ハワイに「平和の鐘」を寄贈して、建立することで、永遠の平和を願う事業でありました。ハワイでは、式がすんだあと真珠湾や墓地等を見学いたしました。戦争は絶対ダメ平和が一番ですと感じました。

深堀会長には、多数のご指導とご教示等を賜りました。何んとお礼を申し上げたいのかわかりません。

今までの、永遠のおわかれに際し、深甚の感謝とお礼を申し上げます。本当にお世話になりました。ありがとうございます。

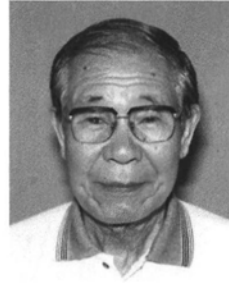
今後は、友の会の益々の御発展と会員皆様の御健康とご多幸を祈念し、私の思い出いたします。

平成十八年十月三十日

(新上五島町)

七十年のおつきあい

本部会計監査 松尾久夫



深堀君の最初の思い出は、小学校時代にまでさかのぼります。彼とは小学校一年から六年生までずっと同じクラスでした。ある日突然、彼が「松尾君、僕の家に遊びに来ないか」と誘ってくれました。これが私と彼との七十年間にわたる付き合いの始まりでした。彼の実家のある坂本町の付近で遊び回ったり、使いに行く彼に付き合っただけの実家の隣町にある、彼のおばさんの家に行った事などが思い出されます。また私の家も、彼の家も親代々からの熱心なカトリック教徒でした。それで小学校時代は学校の授業が終わった後、お互い毎日のように浦上教会に行っただけの習っていました。

昭和十五年に小学校を卒業し、彼は長崎商業に入学し私は小学校高等科を卒業した後、父の元で大工の見習いをしていました。しかし戦争が長引くにつれて、私も三菱長崎兵器製作所大

橋工場に働きに行くことになりました。後で深堀君も学徒動員で同じ工場に来ていました。その工場で作業している時に原爆が投下されました。被爆当日も、朝からいつものように熱心に仕事をしていました。しかし事務員さんが昼食の食券を集めに来たため、張りつめていた作業場の雰囲気や和らぎ軽口の一つもでていませんでした。しかし次の瞬間全てが暗転してしまいました。被爆の惨状は、今さらここに書く必要はないと思います。まるで悪夢を見ているようでした。私は幸いにもかすり傷ですみましたが、深堀君は右半身各部を負傷し大村病院にその年の九月末まで入院していました。

終戦後、しばらくは彼とは連絡を取っていませんでしたが、友達から誘われてダンスホールに行った時、偶然彼と再会しました。「お、今晚は、友達に誘われて来たときさ、よろしく

たのむばい」と挨拶しました。それから毎日のようにお互いにパートナーになったり、外の教習所にも行ったりして、二年間ほど楽しい日々を過ごしたことが思い出されます。その後は時々日曜日浦上教会で会う程度でした。それからしばらくして、深堀君は、長崎県動員学徒犠牲者の会を立ち上げ、昭和四十二年長崎県被爆者手帳友の会を発足させました。その後の活躍は皆さんもよく知っているとします。

平成十七年夏頃、彼と色々な話をしていて、急に「松尾、友の会を解散しようと思ってる」と言うのでどうしたのかと尋ねると、「友の会の当初の目的も八割方達成したので、会を小さくして運営して行こうかと思っている。僕も少し疲れた。」と心情を語ってくれました。これまで精力的に、会を運営してきた人間が、どうしたのかと思っておりました。後で彼が入院したと人から聞き、退院して自宅に帰った彼を見舞いに行つて彼の顔を見た時、私はその理由が判りました。本当に体調がすぐれないようでした。年が明け一月四日入院先の井上病院に

見舞いに行くと、私を見て、大変な喜びようで握手を求めてきました。その時が彼との最後の別れになるうとは思いませんでした。亡くなった日は、市外に仕事に行つて遅く帰つて来て、テレビのニュースで突然の死を知りました。

深堀君、ここに君への追悼文を書きながら僕の胸に様々な事が浮かんでくる。苦しかった事、悲しかったことも今となつては良い思い出。安らかに眠り下さい。お世話になりました。

(長崎市若竹町)

残された功績は山ほど

北松・平戸連合支部長 牟田 寶 藏



熱線が九千度とも言われ、秒速二千mに達していたとされる原子爆弾が長崎市に投下されてから早や六十一年の歳月が過ぎました。深堀会長は、長崎県動員学徒犠牲者の会を発会された十年位あとかと思いますが、昭和四十二年六月十八日、県青少年センターで、長崎県被爆者手帳友の会の発会式を行われました。発会までの十年の間、深堀会長は一般の被爆者にも国の援護法を適用してもらわなければいけない、と常に思いを深くしておられたと承っております。友の会発足のあとは連日連夜のごとく地区集會や総会に出向き、被爆者の意見、要望、苦情を聞きながら会の重要性や組織の強化を訴えて毎日毎日東奔西走であられた事を承知しております。私達も深堀会長の情熱にほだされ会の重要性や組織の力のあるかたを語り同志一同と共に入会し現在ここに至っております。

深堀会長は、被爆者の援護法を勝ち取るには、国会に対して陳情が必要だと、四十二年八月八日に第一回被爆者援護法推進総決起大会を開催され、同年十一月二十五日から三十日迄第一波の陳情団を自らが引いて上京し、国会や厚生省に又は自民党及び各党に陳情を行われました。以来昨今まで長きに亘りたゆみない陳情運動をされました。こうした陳情の中でも当初は自費で上京しておられたことは知る人ぞ知るとか、一升の米を金に替えて上京された方が今も存在されています。私も陳情団の一員として各方面に陳情をして参りましたが、それはほんとうに大変な事でした。こうした深堀会長始め、先人の役職員の運動の力が実を結び現在の被爆者に対する援護法が制定され、被爆者とその恩典を受けていること

を忘れてはいけません。又深堀会長は援護法のみではなく核兵器廃絶の推進にも力をそそぎ平和な二十一世紀を作ろう、を合言葉にして努力してこられました。その事業として、友の会、原水禁、県評などと協力してソビエトのレーニンランドや中国の瀋陽、ハワイのホノルル市に長崎の鐘を送り建立して平和の鐘を響かせ核のない国作りに貢献された事は、偉大なる意志の現われとして敬意を表せざるを得ません。

歳月が過ぎ去ると共に被爆者も高齢となり、地方分権として市町村各支部を連合体の支部に組織替を提唱され、平成五年にかけて連合支部が生まれ、本部と連携を取りながら友の会運動の遂行と会員福祉の向上を計ることにされました。

深堀会長が残された功績は他にも山ほどあります。深堀会長と共に友の会の発展と被爆者援護法の制定に尽力された今は亡き同志先人の方々を亡却のかなたへ追いやることは出来ません。深堀会長が作られ残した歴史と伝統をしっかり受け継ぎ、被爆者援護法の恩典を受けて

いる一員として感謝の気持ちを忘れないことを誓います。

合掌

(佐世保市吉井町)

あのときの「リヤカー」

西町支部 山川 米雄



私は一九八八（昭和六十三）年六月友の会に入会させてもらったのは、昭和六十三年四月今から十八年前城栄町上戸病院に糖尿病で入院中、私の家内が、ふつと同部屋の患者杉本房松さんを指差して、「あの人、あの人」が被爆者手帳友の会の西町支部の（二代目）支部長さんよ」（実は家内の妹山口文子が会員だった）と紹介したのが始まりです。

その後杉本さんに借用して読んだ「奄美の原爆乙女」著者上坂冬子氏、その書の中に深堀会長を「リヤカー」に乗せて朝鮮人が国鉄鉄道の音無踏切まで行ったことを知り、当時会長が避難しておられた。防空ご附近に疎らにあった民家に「リヤカー」は五、六台あって、殆ど焼けたり物の下敷きとなり使い物にならず、私の家のが畑の隅すみに小屋を作って置いていたのが小屋だけ吹き飛んで一台「ポツン」と残っていたの

で明け十日の昼過ぎ火傷、怪我した者は西郷踏切か狩又かりまた（音無）踏切りまで行くと救援の汽車が来るから連れて行くように言われ、何処の病院に行くかわからないが、背中後部等火傷している母と義姉を乗せて行こうと思って見に行ってみるともう無くなっていた。しかたなく、義姉は歩いてもらい、母を背負ったり引きずる格好でやつとたどり着いた時は終りの汽車は出発した後だった。そのことを後の三代目支部長下谷富太郎さんに、あの本に書いてあるリヤカーの話は、私の家のリヤカーのようだったとその状況を話すと、会長に伝えられ、それから会長に取材がある時、私が側にいる時はすぐに「リヤカー」の話しをしておられたネ。

会長は頑固で気やかましい人でしたが個々の会員にはその反面気は優しく、私達が事務所に行っても、まあそこに座れと席を指差して、座

らせ色々と話しをされていきましたネ。私が七年前前に九九%肺ガンの末期と言われ、後の1%の検査で別病気で脳まで上がっていたが命に別状関係ないことが分り、退院後高価な「灵芝茶」を「ガン」に効くからと一箱（三代目）支部長下谷富太郎さんに山川に飲ませてやれと持たせて下さった時はありがたく涙が出ました。そのように人をいたわる一面やさしい心の持主でもありました。感謝感謝

（長崎市江里町）



原爆被爆惨状絵図

追憶の言葉

西町支部 山川米雄

想えば貴殿は本人自ら認めた、頑固で独裁的な人でしたネ。しかし、それだからこそ学徒動員の会、長崎県被爆者手帳友の会の結成をなし

遂げられ、それから被爆者団体として、各種原爆対策に被爆者の援護運動に自分の原爆症疾患を押し、当時自由民主党の初村滝一郎氏初め外各党の国会議員さんを上手に動いてもらい、貴殿でないとなしえないことを^{しんすい}尽瘁なし遂げられました。感謝いたしています、只心残りは二世、三世のことを、なし遂げられなかったのが残念でなりません。

貴殿の初期中期の時代の活発でやる気充分で活動されているころは、会長が「クシャミ」しても、報道陣の方々がすぐに駆け付け取材で取り囲まれていましたが、後期になって貴殿の身体がひどく弱られて何事も思うように出来なくなりつつあった時分は報道陣も疎遠になっ

てまいりましたネ。残念でなりませんでした。しかし貴殿の数々の活躍、実績を残された功績は平和運動吏に永久に残ることでしょう。

本当はもつと永生きしていただき寝台の上からでも後輩の指導をしていたきたかった。後は私達も先がありませんが後を引き継がれた方々私達会員と、二世三世もふくめて、協力して、若い二世三世に引き継いでもらい、しっかりとやらなくては此の世から核兵器又核と名の付くもの総て廃絶してしまわなければなりません。どうか天国で地球上に平和がくることを静かに見守って下さい。安らかに。

合掌

(長崎市江里町)

告別式の思い出

山本正人



深堀会長の告別式はカトリック浦上教会で行われた。長崎原爆の記憶を風化させない。だが忘れてはならない記憶もある、として深堀会長という「宝石箱」が浮かぶ。奥からあふれる金色の光を放射する。その功績は永遠にまばゆいばかりの「光」を魅了した。粘りと根性を支えに被爆体験の継承をめざして、走り続けた生前の在りし日の姿が天上界の輝きすら帯びて照らされた。被爆者援護を訴える活動を活発に進める先頭に立ち続けた人生だった。

長崎原爆病院の建設に情熱を抱いて走り続けた。原爆後の白血病発生。予測。症状。病変。障害の研究治療で実績があるとして被爆者の終末期医療をめぐる諸問題に幅広い分野の「医療向上」を目指した。……現在も続いている。

被爆者二世への手厚い援護をと積極的に取り組んだある被爆者から戦後生まれの息子が急性

白血病で突然死亡したという話を聞いた。因果関係は定かでない。ただ親の被爆で子が、苦しんでいる。その子孫に対して不安がある。と「心が痛む」経験などを、もとにした「外国人在外」被爆者のボランティア支援にも新たな立場で熱心であった。

原爆特養ホーム（かめだけ）の建設に力を捧げた。健康を支え場合によっては精神的に支える事ができると、これまでの施設にない地域密着型サービスの取組みは地域の人たちの触れ合いを深めた。不安を持つ家族に光を当てた。

生き残った友人たちが原爆症で次々と他界する中「自分が死んだときのカルテ」として「書き残すべきではないか」と頭を悩ます日が続いた。平和町の友の会事務局に被爆直後の惨状を伝えるその思いを込めた水彩画が飾られている。その一つの作品、特に鮮烈（被爆の描写）なの

が生死の境にいた自分が腕をつねって、生を自覚した記憶を描いたものだった。被爆後初めて、「生きている」と感動したことを思い出させた。

とその動機を語っている。他の作品にもきのこ雲の下で起きた、生と死の境を克明に記録した。

その宿命を自らに課し気質として「地味な原爆水彩画を書きつづけた。過去の不幸な体験を、次の時代にどう生ずのか、考えてほしいだけ」と訴え続ける会長とは、本部総会後再会する日を心より願っていたが巡り合わせはなかった。

衆参両院議員を務める傍ら一貫して核兵器廃絶平和運動の先頭に立ったほか、「日朝日中」関係の改善にも努めた告別式の日には本島等前長崎市長は日本の指導的役割を果たした、宇都宮徳馬氏（故人）に手帳友の会平和賞を贈った。世界平和と相互理解交流のためそして日本のために営々たる努力に敬意を表し、元ソ連大統領ゴルバチョフ氏へ友の会平和賞を授与された。日ソ友好事業交流の推進ならびに、両国の友好の発展のために貴重な貢献をして下さいました。

深堀さんとは「仲のよかったり」「悪かった

り」して、互に論じあった時期頃もあった。貴殿とお会いした貴重な体験を、今も懐かしく覚えております。長年にわたりたゆむことなく、世界平和の建設に献身して平和に生涯を捧げた。

そして未来をより良い世界へと変革するため、ともに継続的な努力を続けております。ゆえにこの友情の絆は非常に大切なものです。と思いの出の数々を語りかけながら本島等さんは今一度、親愛なる「友」に追悼の言葉を申し上げます。と結んだ。その傍らの席で聞いていた私はお別れの言葉に引きつけられたというか、会長として頂点を極めた人だからまだまだ後進の指導に当たってもらいたかった。原爆症の身を引きずって懸命に友の会を担っていただき感謝していると、様々の思い出の巡り合わせに私の述懐は無暗に続いた。深堀会長と出会ったのは二十五年ほど前、三原支部の結成した頃だった。新体制の始動には支部会総会に出席していただいた。折々言葉を交わすうちに、たとえば変だが、愚直（ばか正直）に闘う誠実さの気風が私の性格と一致した。私利私欲を捨てて一節にかけた波

乱の人生行路に心を打たれた。

平成十二、十三年度と連続して開催された海浜温泉「鶴荘」での忘年会は多彩な（かに）料理が食卓を飾った。それに高級の鮮度情景に：深堀会長の好きな歌「長崎の鐘」の美しい歌声と耳の響きの優しい「ノド」との感動が確かめられて長崎風情の名曲が「それぞれの心を映す」熱き「ぎずな」の足並みが揃い、宴会の進行を促していつそう盛り立てた。続いて歌われた二曲ともメロディーと歌詞が溶け合って長崎の心の風景を映していた。温度の上がった愛する歌をもう一度聴きたい。心に残る映像「長崎の鐘」を二度と聞くことは無かった。恒例となっている忘年会でも再度歌う場面もなかった。

一瞬のうちに失われる喪失感と無常感、それが二度と再び大切なものを失いたくないという頭を悩ます日が続いた。陽が沈むと肌寒さを感じた。様々の思いをこめる哀愁が川の流れのようにならぬ時涙ともしずくともわからないものがあふれた。当時を知る人が減りつつある時代の「証言」者として巨大であった黄泉の地へと旅

立った。六十一年前、米国が長崎に原爆を落とした、（八月九日）を日本人が記憶するほどに米国民は知らない。会長の一週忌を記念し発行する追悼「碑」を次の世代に何としても伝えなければならぬという思いが歴史をも忘れまいという営みである。

平和の鐘に託した望郷の思い出は（巡り合わせ）は脈々と手帳友の会員に受け継がれていく。原爆症の原点とされる原爆のエネルギーの検証はこれからも続く。六十数年の歳月が過ぎても、八十歳（私）の陰影も果てしなく続く。

（長崎市三原一丁目）

深堀会長と立山支部

立山支部長 末 永 信 雄



深堀会長が亡くなられて満一年になろうとしています。月日の経つのは早いもので昨日のような気がいたします。

二〇〇六年（平成十八年）二月二日永眠されました。享年七十八歳。

私が深堀勝一会長とはじめてお会いしたのは平成十二年の夏でした。

前立山支部長の嘉松半四郎さんより支部長を任され現在に至っております。それは、平成十二年四月のことでした。会員歴はこれより前で、自宅の北隣りは、磯田泰子さんの住家です。かの女の父が磯田金蔵さんで初代の立山支部長です。当時、昭和四十九年の第一回立山支部総会時には会員二百三十名を擁しておりましたが、現在は七十名でございます。たいへん悲しいことです。

深堀会長のかの有名な「動員令」が思い出さ

れます。核実験がある毎に平和公園へ来てくれと電話がかかってくる。それも、抗議当日の坐込み数時間前ということもありました。当支部は家庭の主婦が大半ですので、その連絡にはたいへん気苦労いたしました。ただ参加人員が皆無ということはありませんでした。益の折に参加されたSさんは深堀会長と握手してきたよと誇らしげに話してくれました。その時の感動を未だに私は決して忘れることができません。

また、深堀会長からはこんなこともありました。ある日「佐世保の友（会員）が来ているので車をとばしておいで」と。別に用件らしい用件はないようでした。私は戸惑うばかりで、当副支部長の嘉松愛子さんへ行ってもらいました。今も何かしら時々思い出します。

私は立山支部の会員相互の親睦を深めるための行事をやっていないのをたいへん心苦しく

思っております。前支部長の嘉松さん（故人）は深堀会長の協力を得てよく旅行をされておられました。すばらしく思っていました。現在は会員が往年の三割弱程度になり、長寿会の旅行も盛んになっております。会員も年をとり長寿会への入会が殆どです。何だか淋しい限りです。

最後に深堀会長の遺言ともいうべき「後継者の問題」です。当立山支部も二・三世の健康については気を配っております。会員も年をとり活動が鈍ってきました。人集めさえもままなりません。後継者の確保即ち二・三世対策は愁眉の問題です。どこの支部も同じだろうと思いません。

深堀会長さん、ありがとうございました。これからも会員みんな手を携えて後継者対策に頑張ってまいりたいと思いますので、今後ともよろしく見守っていて下さるようお祈り申し上げます。



長崎県被爆者手帳友の会立山支部の班長さんたち。中央の男性が支部長の末永信雄さん

●座談会

故 深堀勝一 前会長
を語る

座談会 故前会長を語る

深堀勝一の 存在は 大きかった

●とき——平成十八年十二月二十日

●ところ——ホテル・クオーレ長崎駅前

●進行——井原 東洋一 長崎県被爆者手帳友の会会長

●出席者——中村 キクヨ 本部副会長
東海 ムツ子 本部副会長
辻原 津田子 本部会計監査
(順不同)

森 ユキ
田川 チサ子



井原 皆さん、きょうはお忙しいところありがとうございます。来年の二月二日が深堀前会長の一周忌に当たります。今追悼集をつくっている最中ですが、きょうは深堀会長の人となりというものを思い浮かべていただき、追悼集に華を添えたいと思って皆さんにお集まりいただきました。

そこで、まず会長との出会いについて、それぞれお話をいただきたいと思えます。まず中村さんからお願いします。

会長との出会いのきっかけは

中村 副会長の中村キクヨでございます。会長とは昭和三十八年ごろの出会いから始まりまして、約四十年ほどの長い会長との歩みがございます。そして、お亡くなりなるときも最後まで会長のそばでお別れさせていただきました。会長の思い出というのは、本当に一言、二言ではなかなか申し上げられませんけれども、……。まず会長との最初の出会い



井原東洋一

は、会長が各地区に回られたところに、私たちの地元の小瀬戸に立ち寄っていただいたのが、始まりでございました。

考えてみましたら、本当に長い会長とのつき合いでございました。

辻原 辻原津田子でございます。友の会では会計監査をさせてもらっております。一番初めは自治会単位で被爆者手帳を持っている人という話がございます、私の町内を一軒一軒回って、「原爆手帳を持っていらっしゃいますか」って。「持っている」、「いや、持ちません」、「いや、自分は引き揚げ者だから持ちません」ということで、その中から何人かずつ拾い上げて、やがて、飽の浦の公民館に集まり、そこに深堀会長が来られて、「実はここに集まれた皆さんの心を一つにして政府に陳情していきたいと思う。だから、みんなも力を貸してくれ」ということでした。その公民館は今もありますけど、バスに乗り降りするたびに、ああ、深堀会長とここでひざをつき合わせて話し、あっちから一言、こっ

ちから一言、と質問や意見が出され、皆さんと話しておられた会長が思い浮かんでまいります。

田川 田川チサ子と申します。私と会長との出会いは、主人が工業からの動員学徒でしたが私達が結婚して二、三年目ぐらいだったでしょうが、動員学徒犠牲者の方、徴用工の方、女子挺身隊の方々の会ができているからというのを主人から聞きまして、私が主人のかわりにほとんどの会合に出席させていただき、それ以来のつき合いでございます。

会長はそのころはまだ農林省に勤めておられました。そのころの記憶にありますのは、「被爆者の店」で何人かの方たちが集まり、そこでいろんなことを取り決め運動を決めて、それをずうっと一つ一つクリアされてきました。出会いというのはそのころからでございます。

そして、十年経った頃、自分たちの願いもある程度かなえたので、一般の被爆者たちの世話をしたいということで、私は立山でござ

いますので、それこそもう一軒一軒ずうっとくまなくお伺いをして、「被爆者の方がいらっしやいますか」ということで、結構入会していただきました。

それからは子育てとかいろいろ多うございまして、一〇〇%はお手伝いできませんでしたが、集金をしたり。会長もそのうちにお仕事もやめられて、それ一筋で頑張られたことなんですよね。だから、それに対して何か少しでも被爆者でない私が皆さんのためにお役に立つことがあればということ、今日までずうっとお世話になってまいりました次第でございます。

東海 東海と申します。副会長をさせてもらっています。

私が今の場所に引越してきたのが、昭和四十三年です。それで、移転して何日もしないうちに、そのバス停でたまたまお会いしたんですね。ジャンパーをこうかけておられて、朝だったから「おはようございます」と言った。どっかで見た方だなあとは思ったん

ですけど、だれかはわからなかったんですね。後で気づいたことは、被爆者手帳友の会ということで、よくテレビに出ておられましたね。そのお顔だったわけですね。

平成五年頃でしたか、川平支部長を前任者から長浜さんが引きうけられた時に私にも入会するようにさそわれました。まだ勤めていましたし、子供はおるしで、ちよつとねえとか言いながら、とにかく入って入ってと言われて入ったのが事の始まりですね。

今回、この記念誌をというようなことで、大分お年をめた方たちに何十軒も回ってみましたけど、やっぱり当時のことを詳しくしゃべる方たちのほとんどがもう亡くなられています。存命の方も八十歳も九十歳にもなっていれば、やっぱりもうようわからんもんねえというふうなことでした。

言葉数は少なくても、何かこうやっぱり思いやりのあるところもありましたですね、がんがん言われよったですけどね。

森 森ユキと申します。会長との初めのおつ

き合いが昭和六十年ぐらいですが、それからずっと今に至っています。昭和三十二年に国から七千円お金がおりてきたんです。それから始まった年金、特別手当の年金を知らなかったんです。そして、昭和六十年ぐらいに会長に教えていただいて知ったんです。特別手当を二年ぐらいいただいて、主人が亡くなったんです。それから一年ぐらいたってから「森さん出てこいよ」て、こんな会合があるからね、こんな手続もあるから出てきなさいというお電話をいただき、会長の指導で一年間位かかって年金の手続をしました。県の人でも市の人も何にも教えないんですよ。主人が会社を休むもんだから、どれだけ貧乏したかわかりません。それから三年かかって、お金がね、年金がおりてきて、それでずうっと今幸せに暮らしているんですけど、これも会長のおかげだと思います。

井原 私は、ずっと労働運動をしていましたのでね。まあ親しく話し合いをしたというのはあんまりなかったんですけど、一番最初お

会いたときは、まだ矢上に住んでおられました。矢上の切通。今、マルキョウか、あそこの上の一軒家でお会いしました。ところが、まだ暑いときだったんですけど、やっぱりジャンパーを着て、寒い寒いと言ってね。家の周りには風よけだと言って緑色のネットを張っておられました。

昭和五十年頃から私は衆議院議員の中村重光事務所に臨時専従していましたが、ちょうどその頃被爆地域の拡大運動が実って、政府案決定の夜深堀会長と田中町の船山さんや、現川の金原さんが事務所によばれて来ました。中村代議士の報告をきいて涙を流さんばかりに喜ばれていた事をよく覚えています。

私が市議会議員になってほどなく常務理事をしろというんですね。「常務理事って、そんな簡単に言ったって、会議も開いておらんからできないでしょう」と言ったら、「井原君、常務理事は会長が任命してよかことなつとつと。会長と副会長、監査は総会で選ばんばいかんけど、常務理事とか事務局長と



中村キクヨ

かいうのは会長が選ぶことになつとるけん、何も心配せんよかと」と言つてね。常務理事に任命されて、その後、十年前には新社会党を立ち上げたりいろいろありましたが、彼から怒られたことがたつた一回あります。もう数年になりますが、あのTさんの件があつて、特別に監査をせんといかんということで、私は名乗り出て、詳しく調べました。そのときに、「何でそげんことばすつとか。お前は監査じゃないじゃないか」と言つて、随分怒られましたけど、「しかし、それはね、会長のためにしよるとよ」と言つて話をしました。そのときだけです。あとはずうつと、ある意味では頼りにしてもらつて、「井原さん」つて、それで要求のあるときだけ「井原さん」つて言つていましたね。

言いだしたら聞かない会長だった

井原 何にしろ、思いついたら直ちに何でもせんといかんというような人で、そういう思い出はいっぱいあると思いますが。

中村 もう何が何でもね、曲がったままでもいいから突っ走れというふうなことで、私たち「真つすぐしてから会長しましょうよ」と言うけど、いや、もう曲がってもどうしてもいいから、とにかく何でも物事はしようということでした。

井原 何回もありますよね。例えば、長崎市長を本島さんと、伊藤さんが戦った際、とにかく市長候補は見つけ出してこんばいかんと言うんですね。それでね、当時、国連の事務次長をしていた明石康あかしやすしさんていらっしやった。その後、広島平和研究所の初代所長さんになられた方ですが、「あの人を呼んでこい」と言うんですね。元県労評の阿部国人さんに行ってもらって話ばつけてこんばいかん。何の脈絡もないのに市長候補だとでっちあげる

始末でした。それから、原爆のことはやっぱり、アメリカの大統領に会わんばいかん。「大統領に会いにくけん、あんたも一緒に来い」と。「どんなして手続きすつとね」と言うたら、いや、「クリスチャンやけんね、おれもクリスチャンやけん、クリスチャンの代表から申込めば、会わんとは言わんやろ」と。

厚生省陳情などの裏ばなし

井原 よく厚生省とか国会議員さんとか、中央に率先して陳情に行っていましたね。付いていったことあるでしょう。

中村 あります。何回も会長とともに行動させてもらいましたけれども、私が初め驚いたのは、着の身着のまま、もうどこに行くにも服装を変えないというかな、ジャンパーだけで、そして靴も運動靴でね、もうそれも白じゃなくて、もう白が黒くなっているのを履かれて、「会長、その靴くさいわ」と言うたら、「いや、そげん飾り立てんでもよかと」

と言つてね、もう本当、身の回りなんか全然なりふり構わずに、ただ一生懸命被爆者のためになさつたという、それはあります。もうこの服装を整えないということだけは、初めから最後まで、私の印象に強く残りますね。

田川 ちゃんと下着は持っていつているのに、着替えないの。

中村 うん、着替えないですからね、下着もね。ハワイに行ったときもそうだった。

田川 ちゃんと用意して持つていつているのに、最後まで着替えなくて、ただ自分の思つていることを全うすれば、それで満足なんです。

中村 こんなこともありました。広島に原爆特養ホームができて、会長がご招待をいただき、私も御一緒させていただきました。駅のホームを降りると、ずっとお偉方がね、市長さんはじめ出迎えに並んでいらつしやるんです。それで、私や会長やら数名、みんな正装して出席してるのに会長だけは例のごとく、そのジャンパーで、もう身なり構わずにホームに降りたんです。そしたら、私達の中で一



番幅がよかつた方に「会長さん、よくいらつしゃいました」とご挨拶なさるんですよね。

それで私びつくりして、「いえ、会長はこちらのジャンパーを着られた方なんですよ」と、私も本当に恥ずかしかつたんですよね。そしたら、「ああ、そうですか」と言つて、皆さんびつくりされてね。その時のことを思い出しますよ。そしたら、会長はへへつと笑つて、「よかたい、今日はあんたが会長になつて、おれが鞆持ちになつてやつけん」と言つてね、みんな大笑いしましたけどね。

田川 一番御苦労されたのは、中村キクヨさんだと思えますね。もうずっと、地元でも同行のときもいつもお供されて。

中村 いえいえ、でも会長が言っていました。「中村さん、あんたは小瀬戸にそのまま住んでおつたら、小瀬戸のばあさんで終わつとばい」と。「おいと一緒には仕事ばし、人に会ういろいろしたやろう。そういう勉強になつたやろう。そいけんあんたは少しはましの、人の中に出られる女性になつたとばい」と言う

て、若いときそんなに言われませんでしたけどね、それは本当。私もね、何十年もの会長とのおつき合いで、そういったいろいろな面の立派な方たちとも、会長のおかげでお会いして、お話もすることができ、いろいろなことも勉強させていただいたので、本当にそれだけは会長に感謝しております。

田川 会長を中心にしてね、何か一つの社交場でもあったんですね。それもいろいろと勉強しながらですよ。

中村 そうです。うん。

田川 何というか、女性は女性でね、もうみんな団体にまとまっていたね、いい思い出しかないですね。

中村 そうですね。

森 会長の親切なお世話をうけた私は、話せば涙の出るけど、会長がね、「来なさい」と言うて年金の手続きをしていただけでしょ。もうそれが忘れられません。一回だけ怒られたこともありますが、ありがたい会長でしたよ。

井原 とにかく記憶力が達者というか、その地域地域の主な人たちを全部頭に入れてあったんですね。

中村 そう、それはね、本当です。一回お会いしたら、もう名前をその次にぱつと言われるからですね。私たち書いていても覚ええないのに、会長はさつと、頭よかったですね、その点は、本当に立派でした。

「平和の鐘」除幕式同行の思い出

井原 中村さんと田川さん、今はロシアのサングトペテルブルグと言いますが、当時のレニングラードで平和の鐘の除幕式に私の家内も行ったんですよ。あれに始まって、中国そしてハワイにまで鐘を贈りましたね。ハワイはそのときに行ったんですか？

田川 いやそれより八年後の十二月八日に合わせて、行ったのです。

中村 真珠湾攻撃の日にあわせて慰霊の旅でした。

井原 そのときは友の会からは、あなたと、何人ぐらいいましたか。

田川 六人でしたかね。矢嶋良一さんと、それから……。

中村 あなたと、女性は二人で、そして前副会長の西川徳馬さんと、中島さんと会長以下六人行ったんです。

その前に東海さんたちがロシアの方に行かれたんでしょう。

東海 NBCが、「ハワイで平和の鐘を鳴らしましょう」ということでツアーを組んだんです。そのときに、「被爆者手帳友の会が行かんばいかん、金は出してやるけん、とにかく行きなさい」とか言われてですね、それで私と長濱さんと、それから……佐世保の北村さんと松尾さんそれに……。

とにかくだれも行くという人がいなくて、それで私たちも友達を二人さそって行ったんですよ。でも、お金は出してもらえなかったんです。

中村 私達は、平成十年の十二月七日にあわ



東海ムツ子

せて行ったのです。

東海 その後にキング牧師の生誕祭があったんですよね。それに合わせて行ったのが矢嶋さんと、そして長濱さんと私と、それからだれだったかな。

井原 そしたら、東海さんは二回ハワイに行ったの。

東海 はい二回行きました。二回目ときは旅費の一部をいただきました。

中村 あの時は、もめたんです。旅費が出たり、個人負担だったりしたものだから、でも会長がね、「そげんこといわんちゃよか」と言っておしきったのです。

東海 中国のときは、中国のどこかに学校を建てられたんですよ。そのお礼に中国から呼ばれたのに、私一人に行けと言われてですね、私も中国に、一人だけ男性の中にまじっては行ききらんとって、長濱さんと行かせてもらいました。それは平和センターの方々との旅だったと思います。

井原 平和の鐘にまつわる話はね、今私も

ずっと取材して文章をつくっているんですけど、二〇〇〇年、ちょうど六年前ですよ、

六年前の十二月に、ベラルーシというロシアから分かれた国の、チェルノブイリの原子力発電所が爆発したでしょう、二十年ぐらい前

その子供たちで、被ばく者がたくさんいます、その子どもたちに生きる望みを与えようということ、長崎の被爆マリアの展示が企画され、それにあわせて「平和の鐘を贈ろう」ということになり、設計図を送って向こうでつくって設置されました。その橋渡しを深堀さんもしているんですよ。そのことは知られていなかった。

皆さん 知りませんでした。

井原 それは西村勇夫さんに聞いてわかったんですけれどもね。カトリック相浦教会の三村主任神父さんにお会いして二時間ぐらい話をしてきましたが、島本大司教さんが行けなくなつて、自分が代表で行きましたということ、詳しく聞きました。

今、毎週日曜日の昼に鳴らしているんだそ

うです。

手土産は揚げかまぼこ

井原 立ち上げて、当初の段階は、できるだけ支部をつくる、会員をふやすということ、本当に皆さんも奮闘された。子供の手を引いて一軒一軒回って組織していったということですが、二カ年間に長崎県内で会員三万人ということになっていまして、「三万ねえ」と呼ぶ者あり）それは、もう対馬から五島列島まで（「そうそう」と呼ぶ者あり）全県下にまたがつているんですよ。それが、さらに大きくなり、政治家の皆さんとのかかわりも深く、そしてまた、よく努力していただいて、成果もおさめられてきたわけですが、特に皆さんが感じられている、いろいろ自分たちのためになつていただいた政治家の皆さんたちがたくさんいらっしゃると思うんですね。特に国会議員の先生方ですね、そういう人たちに思い出がある人がいますか。

辻原 国会に陳情に行くときに、西川徳馬さん、それから、諫早の女の方で永田さんと私と三人一緒に会長に同行したんですよ。そのときに持っていくお土産といたら、揚げかまぼこをどっさり。アジかまぼこ、を本当にいっぱい、それを動いている列車の中で袋に分けると。

井原 ああ、なるほど。

辻原 これは初村、これはだれ、これにしよるか、これはだれにして、そして、その手は油だらけになり、よごれないようにナイロンの袋をかぶせて、それで十枚、十枚、十枚と、汽車に揺れながら、席と席の間に座り込んで、数えていると、「まだ時間のかかつか」と会長が言うんですよ。「はい、ちよつと数えて、今入れています」と言うと、しばらくして「西川さん、済んだとか」「いんにゃ、まだまだ」、やつと東京に着いた。で、議員会館に行くんですよ。ちゃんと門衛がおつて、体をこう触つて、何か持っていないか。ちようちんとか、盾とかのぼりは絶対だめだとか

言われて、私も初めて陳情に行ったときのことなんですけど、もう中に入る前にそんなふうなことがあって、そして、これが初村先生、これはだれ先生にて、いろいろな方々に分けて上げたんですけど、とにかく着替えというても、そのままの格好で運動靴は中村さんが言われたように、本当に黒くなった運動靴、ノーネクタイ、そして、もうづかづか入って検閲も何も「あーっ！」と言って払うようにして、(笑声)「何を言うか、おれを知らんか」というようにして議員の部屋に入ると「おう、先生、元氣やったのお」というようなそんなことで、「頼むばい」ということで要望が済むんです。

辻原 その日を終わって一応宿舎に帰るんですよ。そして、私は言えないから西川さん、「会長と一緒に風呂に入ってくれんね」というと「うん、そげん言うけん、」会長、風呂に入ろうで。おいが背中流してやつけん」て何回も言う。それでも来ん。最後にやつとかつと来たんだそうです。来てもでくの棒みたい

に突っ立って、脱がせる、脱がせる、脱がせる、もう本当、そして背中も流して、やっとかつと風呂から上げて、そしてそれもパンツからみんな下着も着せて。子供よりは本当ひどかて言うかな、何て言うかなて、そういうふうなことを西川さんと話したんですけど、もう諫早から来た永田さんという女の方は、もう手も足も出んというておどろいていました。

会長の臨終に立ち会って

辻原 深堀会長が危篤という電話は中村さんからいただいたて、井上病院に駆けつけて、そして、「会長、一緒にお祈りしようね、マリア様にお願いしようね、神様にお祈りしよう」、手を握り、まだ会長は酸素吸入をしていましたけれども、息はありました。そして、額をなでながら、額に十字の印をしながら、「ヨゼフ様助けてください、この方は立派な仕事をされた方なんです。どうぞお恵みがあつた



辻原津田子

ら、もう一日でも二日でも会長を生き延びさせてください。私たちのためにはなくてはならない人です。もうしばらく、もうしばらく……」と言いながら、もう会長は意識がだんだんだん薄れてくるんですよ。手を握りながら、会長の額をなでて、十字を切りながら、「聖ヨゼフ、ヨゼフ様、深堀勝一をもうしばらくこの世にとめてください」と心の中で何回も何回も何回もお頼みしました。そして、とうとう「御臨終です」と言われたときに、もう腹の底から突き上げてくるものがありました。

そして、「会長、長い間きつかったね。でも、いいものを残してくれましたね」。手を握り、額をさすり、もう別れがつかつたんですよ。

中村 しかし、考えてみれば幸せな方でしたよねえ。

東海 そうです。

中村 ねえ、死ぬ間際まで東海さんと辻原さんがずっとお祈りを上げたんですよ。あれ

は三十分以上でしたよ。

東海 ズーっとロザリオのお祈りをして。

中村 普通の人だったら、ああいうことはできませんよ。

亡くなるまでああいうふうなことをされて、臨終に立ち会ったのはほとんど会員でしたからね。

辻原 あのロザリオを会長が持っていたから、そのロザリオを口に接吻させ、額に置き、胸にまた移動させたりしてから「会長、よく頑張ったね、もう一遍目をあけて、会長、もう一回ね、もう一回よ」と言っつて、額に手を当てながら、ロザリオを何回も口に接吻させながら、「イエズス様よ、マリア様に助けてもらおうね、長い間きつかったね」、もう声が声にならず、祈りが祈りにならず。

長年、行動を共にしてきた原点は

井原 そのように皆さんが慕うというのか、大切にするという原点は、何でしょうね。

中村 原点といえば、私にとつては、弟のような方でもあるし、また、子供みたいな面もあるし、家に遊びに来られても、一つのものでもわけて「会長食べる？」「食べんね」と言う様に、みんなと食卓を囲んで食べるその楽しさがあの人はほしかったのではないかと思います。

私は会長はやっぱり自分の弟のような感じですよ。また親戚みたいな感じがあつてみたりね。

辻原 私たちも家族、もう兄としか

中村 うん、そうそう。そこが私は一番会長に長年ついてきた原点になっていると思う。だから、靴でも「会長、もう少しきれいな靴はなかとね」というふうなことだね、それはやっぱり肉親しか言えないでしょう。

「よか背広ば持つとつとばつてん、ネクタイ締めたりなんたりすつとはやぐらしかろうが」と言うので、「いや、やっぱり時と場合によつてはね、このジャンパーではだめよ」と、そういうときがまた兄弟みたいな、弟の

ような気持ちになったりね、そのところが、長年ずうっとより添ってこれたんじゃないかな。

田川 余り恵まれていらっしやらなかったの
で、みんながそういう思いやりで言うとかね、愛情がみんなから注がれていた。

中村 そうなんですよ。私一人じゃない、皆さん長年来られた方はそういった感じでね、やっぱり。

井原 友の会自体がもう家族みたい……。

中村 そうです。だから、よその団体から「あんたたちは大したもんたいね」といわれていた。友の会の会長というとは大した人なのに、みんなが集まれば、アイスクリーム買って、木陰に立ってアイスクリームをみんなと食べる、ちよつと変わった行動もするし、「ようあんげん人に長年ね、友の会も感心ばい」で、それはもうどの方からも言われました。

森 「アイスクリーム食おうかね」と言ってお金渡してみんなの分買ってきて、ねー。

中村 ああいうふうにするから、よその会か



森ユキ

ら見たら、ようあの会長にみんな何であんなしてついていくとやろかと思われたに違いないけどね、そこはまた私たちにしかわからない魅力というか、少々文句言ったらといって腹を立てる人ではないし、また明るく朝にここにこしてね、「うなぎば食べに行こうか」、「ちゃんぽんば食べに行こうか」て言つてね、だれば呼ばんね、「中村さん、あいに電話ばかり呼ばんね」て言つてね、長く会に見えない人には電話かけて、「出てこんね、会長がちゃんぽんば食べるて言うけど、出てこんね」「とにかくみんなで顔ば合わせようや」て言つて、そういうふうなつながりをずうつと持ってきたんですよね。

東海 そこら辺の優しさはあつたですね。皆さんがつくつたジャガイモとか、タマネギとかをもちよつて、鍋も持つてきて、ガスやガス台まで用意してきて、料理をしたりしてみんなで鍋をかこんだり、家族でしたね。

中村 みんなとお食事をするのが一番の楽しみなんですよ、会長はね。家庭的にちよつと

薄かった面もあつたからね。

そうね。寂しがり屋でね、とにかく土曜、

日曜が来るのが一番あの方は悲しかったんですよ。それに、お正月の四日間の休み、事務所にも来ませんでしょう。「お正月も出てこい」ということでね、「会長、お正月まではだめよ」と言うたら、「そげんことはなか、あんた電話ばかり」というので、順々に一日はだれ、二日はだれに、何でも言うときは私は私にすればみんなに言えというんです。私こそ迷惑だけど、会長に嫌ということは言われんしね。そいけん相談するさね。「済まんばってん、一月一日ね、あんた」で、「うーん」で。「ちよつとでよかけん顔出して、あとは帰ってよかけんね」で、私もそれをお願いしてね、そして、ほら何人かの方たちに、一日ですよ、そして「行って何した」「いや、行って黙って座つとくばっかりさ」、それで会長は満足して、もう帰ってよかよて、二時間ばかりして帰ってきたて。そいけん、寂しがり屋さ。

井原 そうね。朝の電話がとにかく三十分以上、それも早朝六時にかけてくる。長いんですよ、それがまた。

中村 用事もなかとにね。

井原 そして、今度はパツと切ってしまう。

中村 そうそう、こつちの用事は聞かんとやもんね。もうね、ひどかですよ。台風の時が大変。その前の日から、夜中の二時、三時に電話が来る。ああ、また会長たいと思つて。「はい、もうわかつとつ」「どうね、小瀬戸は」「いや、まだ。雨戸は閉めとつけけど」、それは二時。また四時ごろ「どうね」「少し風の吹いてきた」「そうね、小瀬戸は海側やけん」そんな話、真夜中よ。そんなして、電話は元気なときはかかってきてたけど、今ごろ寂しいです。

井原 三年、四年ぐらい前までかかってきたね。

中村 そうですね。

井原 相手は何人か決まっていたようだった。

中村 決まつとつとですよ。うちの息子がね、

「あれだけの団体の会長で言って、本当は常識のある人やろばってん、本当あんたたちの会長は、夜の夜中に電話ばかりから、常識も何もなかない」て我が息子から言われて、「いんにゃ、会長は特別さね」と弁護すると、「その特別がおかしかったい」て。そうして「かかったときにはもう電話切つて知らん顔しかんね。あんたがどうやこうや言うけんかかってくつとたい」て言つて、しまいには息子とけんかになつたり、私も会長のことを言われれば腹の立つて、息子とけんかもするしね。本当やっぱり自分の思つてる人にだけあれは何人かにかけてたんでしようね。

辻原 けど、何をされても憎めないんですよ。

中村 そうなんですよ。おかしかね。

田川 本当、憎めないです。

「キング牧師像」設置騒動記

井原 ハワイから帰つて突然、キング牧師の像ばつくらにやいかんということ、すでに

大学の彫刻の先生に頼んでた。それを平和公園に据えろと言うんです。「平和公園は何もかんも据えられんと、ちゃんと決まりがあつて」というと「それはけしからん。平和公園にそのスペースをとれ」と言われる。

中村 あんときは騒動したよね。八月にハワイからたくさんのお客様を迎えて除幕式をするという。像の置き場がないから、坂本町の深堀さんと言う方のちよつと横に畑があつたんですよ。通り道ですよ。そこに置いてくれるというと、「そりゃ立派な銅像ばつてんね、そげんとは家の横に置かるんもんね」といつて断わられた。

井原 結果的に、三ツ山の純心大学で仮設置して除幕した。

会長についてのちよつと困つたお話

中村 お金のことは、もうわけわからんことなつてね、もうあつちに突っ込み、こつちに突っ込み……

井原 そういうこと。だから、平和賞ももちろん、ずっとやってきたわけですけど、平和賞も、一〇〇万円もの金については全く触れんやったもんね。

中村 そうです。

井原 それは銅像のことだつてそうだし、そういう面では、やっぱりお金はきちつとしているようで、ルーズだったところがありましたね。

中村 ハワイに行く時にもお金なしでね、「中村さん、コーヒー代ば払え」と言うから、「会長、お金は持つてきとらんと」と言うたら、「おれは一銭もお金のあるもんね。だいがお金ば持つてくつか」て、こげん。そしたら、矢嶋さんが、「会長、本当に一銭もなかと」「僕も持つとらん」て、矢嶋さんはびっくりして労働金庫に走つて準備した。

田川 それも長崎駅を出発する直前ですよ。

中村 やつと、福岡の駅に着いたときも忘れもせん、食事をしたでしょう。あんどきも私に「払うとけ」て言うけんね、私もね、出し

たつきり、そのままですよ。そんな調子でした。

田川 結局矢嶋さんは一電車おくらせて福岡に着いたんです。

中村 そんなとき、私が出した食事代のお金の事を言つたら、「宝来軒でこの前、ごちそうば食べたろうが」て、「うち一人じゃなくて、みんなで食べたでしょう」と言つてもさ、「そげんことば強く言うな」そのままさね。

井原 まあ、しかし、事務所のダンボール箱から出て来た大金についてはやはり外債、外国債権を買うというふうな形にして残したのは、いまにして考えれば……。

中村 今考えればよかったです。それがあけんね、助かつているんですよ。

一時期には年に二千万百ぐらい利子が入つてきていましたもんね。

田川 会員拡大には島原半島を一周、そしてまた五島なども、真夏に冷房つけないで車に同乗してまわるのはつらかった。

中村 大変ですよ。会長のお供は。汽車の中

に、夏に行くにしても、ほら、電気ヒーターを持っていつてつけるんですから。昔は夜行列車でね、寝台が上と下とある電車で行ったんですよ。

ヒーター持ち込んでつけると車掌さんが来て、「やめてください」と言われて消し、行ったらまたつける、もう本当に。

田川 だから、よく考えてみると、そのときには体調が悪かったんですよ。

中村 寒い寒いて言つとりましたもんね。寒いというのは、やっぱり体調が悪い証拠ですもんね。

辻原 そう、私も西川さんたちと一緒に東京に行ったとき、空気が乾燥していたので汽車の中の洗面所で紙コップにいっぱい水をくんで、ずうつと会長の周りにまくんですよ。何回も何回もまく。「空気の乾いてきた、ほらまけ」といわれる。西川さんと永田さんと三人でもうずうつとね、到着するまで紙コップでずうつと交代交代で会長の周りに水をまいておりました。

井原 突然、「井原さん、広島に行くけんついできてくれんね」て、「なんの用事ですか」と、「うん、ちよつと広島で打ち合わせをせんばいかん」と言うので、嘉松愛子さんと私と、もう一人の方と会長と四人で広島駅に着くと「どこやったかねエ」と被団協に行くというわけ。「聞いてみよう」といっても「いやわかる」といって、タクシーでぐるぐる回り、やつと見つかった。事務所につくと役員の方から「あれ、深堀会長何の用ですか」という始末。「うん、ちよつと来た」って。

一時間ぐらい雑談をしていたが、相手も忙しく会議が予定されていて、「ちよつと私たちもきょう用件のあるけん」と言うので、「会長、打ち合わせしとらんやつたとね」ときいたら、「うん、打ち合わせはしとらん」って。中村 そげんやもんね。

井原 そしたら今度は「よし、それなら長滝さんにちよつと会つていこう」とか言うので、平和会館に行った、今「国際会議中です」と言う。「呼び出してくれ」と言うので、応待

してくれた方が「いやあ、国際会議ですから」と言ったら、「よかけん長崎から深堀が来た」といって呼び出さんね」とか言うて、そして、この長滝さんが会議を抜けてきたんですよ。「今ちよつと会議中ですけど、抜け出してきました」と。そしたら、「やっぱり被爆者援護の事はアメリカの大統領に言わんとちよつと問題解決せんけん、日本政府に言うたっちゃだめやもんね。アメリカに代表団は送ろうと思っておる」と言つてさ。で、向こうも「ああ、そうですね、そうですね」って。会長の性格を読みきつてのことだったと思う。

中村 本当に行き当たりばったりやったね。東京に行くのも。

本当東京に行つても、だれに会うというその計画もなかった事が何回もありましたよ。でも、厚生省の部長とか、えらい方々に会うと言うて、そしたら、受付から「連絡はしてあったんですか」って、「いやあ、何もしてらんけど、おいが来たつて言うてくれんね、すぐ出てくるけん」というぐらいのことです。



田川チサ子

た。それでも、深堀会長の名刺をやつたら、やっぱりすぐ出ては来られたですよ。でも、「今はちよつと会えませんで、ちよつと三十分ほど部屋におつてください」と言つて、その部屋で待つと、しばらくして出て来た役人は「会長、前から来るという連絡をしてくれんばね」「いやあ、そげんさるつもんね。忙しゅうして」とかの会話でした。

井原 今はそういうことは全く考えられない事ですけど、当時はいろんな長崎の名物とか、ビワのときはビワ、あるいはかまぼこ、カラスミとか、そんなものまで、東京にどんどん贈っていたわけですよ。向こうは忘れていないですよ。だから、行つても時間をとつてくれるわけです。

中村 そうですね。やっぱり名前はよくわかっておつた。やっぱり贈り物をしよつたんでしょね。

井原 会長と役人との人脈はできておつたわけですね。

田川 偉い人でも、もう一声で本当に……親

身に話していたですもんね。

中村 天皇陛下にでも会おうという人だった。でも、皇太子殿下がいらつしやつたときに、あんときには、やっぱり「さすが」と思ったね。やっぱり地名士の方が金子知事さんとかずらつと並んで会長の番になったじゃないですか、あのときに皇太子殿下が一生懸命話をされて、あれは五分以上やったもんね。もう何やかんや話されてさ、そして、帰ってから会長はぐあいが悪うなつてしまふほど緊張していた。

井原 そういろいろな面での心配りは個人的にはあつたんだけど、何と言うのか、自分をより大きく見せるところもあつたんですよね。彼には。

中村 自信過剰もあつたわけね。

会長の運動のお陰で「友の会」の今日が

田川 でも、会長がこの運動をリードしてくださつたおかげで、長崎だけでなくて、その

全国の被爆者の方たちも、本当に救われたのだと思います。大なり小なり幸せをいただいている人々は多いと思うんですよ。

中村 やっぱり根を広げてくれたおかげで、友の会の今日があるんですからね。現在の方々は、一つのでき上がったものを続けていけばいいですけども、会長というのは、自分が一番先にそれをなさつた方ですからね。そこは大したもんじゃないですよ。

それは大変ですよ。農林省の職員でありながら一個人から始められたということは、やっぱり頭が下がる。

田川 無鉄砲なようなところがあつたからできたかもしれないね。

ワンマンな面もあつたからやれたかもしれない。

中村 まず、動員学徒の会をつくって、軍属並の処遇に持つていこうということでしたが、動員学徒も成功して、その次は被爆者ということに目をつけたのは、やっぱり立派だったですね。数字に強かつたですからね。やっぱ

農林省の統計事務所で、いろいろなさつていたんでしよう。

井原 あれだけ元気かった、本当にばりばりで、文章も随分たくさん書かれ、「ちくりちくり」にも書いておられたけど、中身も政治的なことも含めて非常に深いものがあつた。

運動の当初の段階は、政治家もほとんど保守系の人とつき合っていたようです。初村滝一郎さんとか西岡武夫さんとか、次第に革新系の人にもおねがいで、よく働いていただき、被爆者のいろんな要求を実現するために皆様は相当に努力していただいたと思いますよ。

中村 中村重光さんもよくやっていたと思いますね。私たちも何回も陳情したですね。

田口健次先生とかね。社会党系の人でしたもんね。

井原 高木義明代議士も力になってもらった。現在もなお。

中村 そうですね。それに倉成正さんにも大変お世話になった。

田口長次郎さんにもお願いに行きました。

最初のころの総会などには、ひな壇に、ずらーっと国会議員の先生方が並ばれ、県会議員の先生、それから市会議員で、本当にひな壇でしたよ。もう……。

辻原 そして、リボンをね、紅白のリボンの大きいのを用意してこれは国会議員と衆参議員の人たちにつけて。

中村 あれだけ来てもらうていうかね、あれだけの人を集めきるといふのは、ちよつと普通の方ではできませんよ。

田川 それから、原爆病院の院長の安日先生もね。

井原 金子原二郎さんが初めて知事に出るとき、ぜひ推薦せんばいかんと言って、私も一緒に事務所二人で行つた。被爆者のホームをつくるなどと要望していたが簡単ではない事業だつた。次いで二回目はもう切りかえてばつさりという始末。

中村 そうですね。

晩年の会長と愛犬ターボのこと

井原 会長が七十歳すぎて脳こうそくをわずらっていたことを私は知らなかった。それが引き金になって、まだらボケ症状が出た。そういう事情を悪用して、いろいろな人たちはびこってききましたが、亡くなる前の最後の四、五年というのは、やっぱりちよつときつかったですね。

それで、昨年は五回ぐらい入退院を繰り返したんですけど、井上病院に入院されて、一番最初、私が見舞いに行ったときに、「あんた銭持たんけん土地ばやる」「はあ?」「土地ば六、〇〇〇坪持つとるからやるけん」と言い「それはそれはどうもありがとう」とうけながすと、「六、〇〇〇坪ば売って選挙に使わんね」と言ったあと、「犬ば何とかかわいがつてくれ」と、たのまれた。

中村 ターボウ。

井原 自分の事よりもターボのことが心配なわけ。



中村 その犬がね、子供と同じやったけん、ハワイでね、私たちの二人の部屋に来てね、「電話ば貸さんね」て言うから、「どうぞ」て言うて、「どこにかくつとね」と言うたら、「長崎に」て。「奥さんにかくつと」て言うたら、「うーん」て言うてたけど。奥さんが出たら「ターボはおるね」て言うてるもんね。しばらく黙つとったとが、「ああ、ターボがワンワンて言うた、中村さん、ターボが言うた、ほら、聞いてみんね」て言うてね、そのターボに電話ばかけたとですね。

辻原 で、初代のターボがいたでしょう。そのターボが死んだときに二階でお通夜したんですよ。

中村 葬式にも私たち行ったんですよ。「中村さん来んね」て夜中にかかってね、それで、「何事ですか」て言うたら、「ターボが死んだ」と言うので、行ってみると犬の死体に布をかけていた。「葬式する」葬祭場に連絡して車も来ました。会長が、「あんたたちも黒か洋服ば着てこい」ていうので、真っ黒の洋

服を着て、犬の葬祭場まで車と一緒にについて、そして焼いて、お骨ば持って、納骨しましたよ。

そして、家にも祭壇をつくりましたよ。

辻原 そんなときそのお通夜に行つたんです。

井原 お通夜にねえ……。だから、自分の子供みたいね。

田川 家庭的にもっと恵まれて幸せだったら、もっと変わっておられたかもしれないですね。もっと人間性もね。何かも。

井原 やっぱり厳しい部分もありました。自分にも厳しかったと思うけど、人に対しても厳しすぎる面も多々ありましたよね。

中村 とにかく自分のことは何でも通るといふふうなことですね、やっぱり自信過剰も多々ありましたからね、だから、ここまで来れたのかもしれない。

井原 まず本人が努力して、中心になって奮闘したことは事実であり、それには組織の力というか、たくさん皆さんが会員として支えていた力があの人を、どの人の前に行つても、

自分の発言ができるようにしていたんだと思います。

深堀さんの功績というのは、数え上げればきりはありませんが、あの人のある意味ではカリスマ性というか、強力な指導性というか、それによつてこの会もまとまってきたし、一方で反発する人も出てきましたけど、むしろ功績は限りないですよ。だから、今日こうして私たちが被爆者として法に基づいてということではありますが、法律をつくつたり改善したりしてきた原動力にはやっぱり深堀会長の存在が大きかったと言えるでしょう。そういうことについては、忘れちゃいかんと思いますね。

中村 これから先も、長く、深堀会長の遺徳をしのび学びながら運動を続けていきたいと思えますね。

田川 この運動はずっと続いていかなければならないと思います。その中で、私、新しい井原会長さんのもとで、今まで以上にそして、会長を支え、本当に私達の団結のすごさを示

しましょう。

全員 組織のパワーというか、そこら辺を大切にしましょう。

井原 当初会長が目指しておったようなもの、組織もそうですが、被爆者援護の諸施策も一応の目標が達成されましたが、いろんないきさつで離れていった人もあります。今後はできるだけそういう人たちとも、目指すところは一緒ですから、共同して行動できるようにしたいと思います。新たな目標に向かっていこうということで、今何とかそういうことができつつありますから、私たち会員自身が組織をきちんと保ち諸々の運動を続けられるということが、会長の意志に報いる道だと思っていますから、今後とも力をあわせて頑張りますようにね。

〔はい〕と呼ぶ者あり)

きょうは本当にありがとうございました。

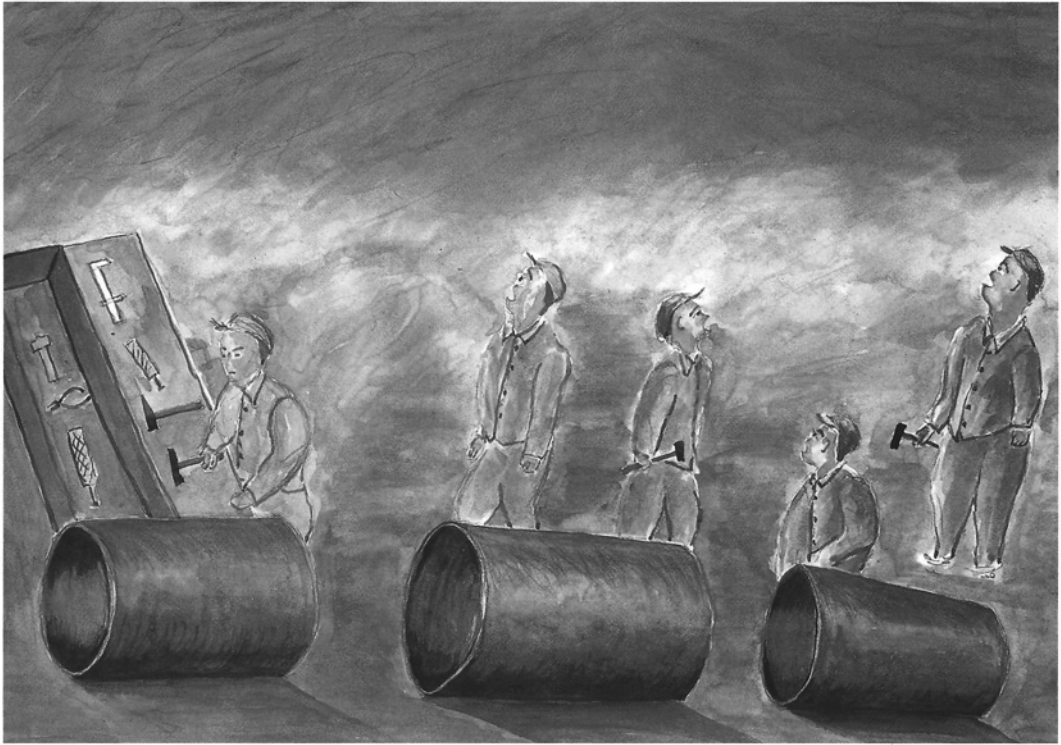


文・画——深堀勝一

空白の二十時間

原爆被爆惨状絵図

平成9年6月1日発行「空白の20時間」より抜粋



平成8年7月3日

炭塵修状絵図オ1号

「あら………閃光だ。」

長崎県被爆者手帳友の会
会長 炭塚 勝一

「オ1号絵図」

この画面は、昭和20年8月9日 午前11時頃、私が三菱炭産大橋工場、
オ一社工場、山口 辰美組において、魚雷の水圧試験をしていたときの
ことでした。ピカッ!と上空に光るものがあった。

それは、電車がスパークしたときのようにでしたが、その規模がはるかに
大きく、色は赤味が濃く、アラッ……と上空を見上げたときの画面でした。

この地点は、A・B・C・C炭塵被害調査委員会の調べでは、塵心地からの
距離1374米とのことでした。それから時間にしたら、0.5秒して、私の
身体が10米ばかり吹き飛ばされたのでした。

私は閃光を見て、「アラッ! 大変だ!」身をかかえろばと思って、周囲を
見渡したが、かくれるところがなかったことを今もよく記憶しています。

◎ 絵図作成者

・当時の住所 長崎中本原町 XXXXXXXXXX 氏名 炭塚 勝一 ながし かついち

・身 分 長崎商報新聞隊 生年月日 昭和3年1月12日

・家族の安否 母、炭塚 とも 百歳(42才) 姉、炭塚 光枝 百歳(19才) 弟、炭塚 博 百歳(11才)
即死 即死 即死

◎ 本人の被爆受傷の状況

右身に負傷、頸部、首、右手、右足の部位、被爆後、西町防空壕にのがれ、
朝鮮人のリマカーに乗せられて、救援列車オ3子(午後7時出発)に収容され、
大村病院に入院、昭和20年9月30日まで退院するまで治療を受けた。



原爆惨状絵図 ②号

「顔面を負傷して、逃げまどう女子挺身隊」

この場面は、原爆投下から10分ばかりだったとのことでした。

時間にして、昭和20年8月9日午前11時10分から15分ほどのことだと思います。被爆場所は、三菱兵器大橋工場、オー仕上工場中島組です。中島組は、仕上工場の平面から1.5米ばかり掘り込んでいたところの仕上工場でした。画面の少女は、鹿児島県実践女学校のNさんと言う名の浅黒いクルクルとした可愛い少女でした。

私（現在会長 深谷勝一）が「キマッ！」と言う悲鳴を聞いて、振りかへて見たところ、私より7米ばかり後方で、顔面に手を当て、鮮血がポタポタ飛び散っております。

私はその後、このNさんが生きていたのだろうか、気にしておりました。

ところが、被爆から50年後の平成7年10月30日、元、鹿児島県女子興業学校の女子挺身隊16名が、被爆地、長崎を訪ねて来られ、平和公園三菱兵器製作所に足を踏み、爆死した同僚2名の足跡と再確認されました。

岡本末子さんが、女子挺身隊の隊役で、長崎の兵器工場に出動している人達を説得して、36名が長崎に来られました。

それで、いつまでも亡くなった2名のことばかりになって、50年後の平和公園の「長崎の鐘」をたいてながら、これでマツと責任を全うしたと云って泣いておられた。

その際、実践女学校のNさんのことと聞いたところ、団員の1人が、Nさんの死亡を8月10日の翌日、私がみたところから5.6米前で、死んでいるのを発見したそうです。

◎ 後日談（被爆惨状絵図 ②号）

この画面の女子挺身隊員は、色が黒いので、私ども、男の勤労生徒の皆さんから「黒ちゃん」と呼ばれておりました。それは色の黒いぐるぐるとして髪型があり、皆さんに可愛がられておりました。

そのときは、女子挺身隊として、一半年間真面目に働いた場合1ヶ月の休養があったのでした。

この休養を利用して、黒ちゃんも、8月のはじめから、鹿児島の実家に帰っていたのでした。

ところが、8月9日（原爆投下の日）の朝、ひっそり取場に茂って来ておりました。

聞くところによると、家に帰ってからもう退屈したので、長崎の取場に友達を訪ねて来たとのことでした。

私は、あのときの光景で「黒ちゃん、あの黒ちゃんも帰って来なければ負傷せんでよかったのに」とときどき黒ちゃんのこと思い出してはつがやしていました。



原爆惨状絵図 第3号

「三菱兵器大橋工場 才三門に殺到した負傷者達」

大橋工場に門が 三ヶ所ありました。

才一門が 社員ならびに東濃者の 通用門でした。

才二門が 工員ならびに 勤員学徒の 通用門でした。

才三門 女子従業員ならびに 女子挺身隊 女子勤員学徒の通用門でした。

この場面は、三菱兵器大橋工場には 7000名近くの従業員ならびに 女子挺身隊勤員学徒が、昭和20年8月9日午前11時頃に勤務していたと思われる。あとの3000名近くは、夜勤勤務者トンネル工場の従業員などと思われます。

原爆投下後 この才三門は一番多数の人々が、この才三門を 通って 西町方面へと 逃げたものと思います。

それは何故か？ 才三門を出ると、園鉄があったからだと思います。

恐らく この才三門から 4000名の人が 逃げたと思います。

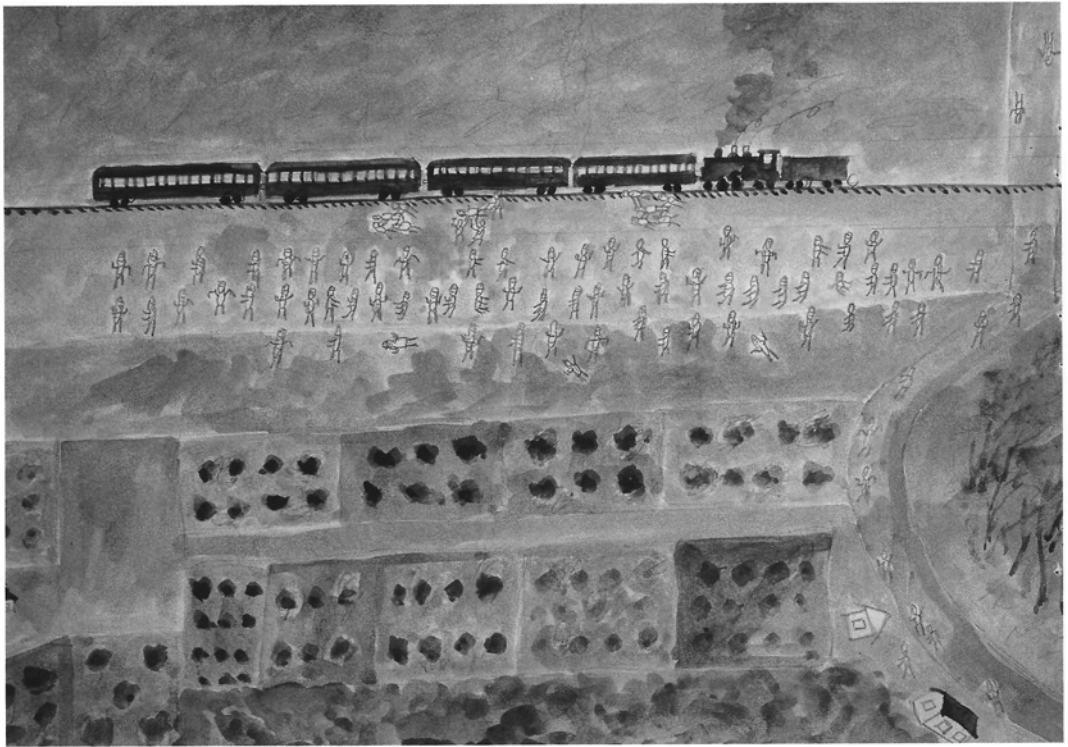
この場面は、原爆投下から 10分後、即ち、昭和20年8月9日、午前11時 10分前後だと思います。

負傷者達は、血だらけとなって、友達に助けを求めながら、あたかも、

東京ドームに殺到する群衆のようなものでした。

私もその一人でした。

◎ 証言者. 深 堀 勝一 (68歳)
長崎市 坂本 [REDACTED]
長崎県被爆者手帳友の会 会長



原爆惨状絵図 オ4号

「救援列車3号車」

この画面は、昭和20年8月9日午後6時半頃の場面で、長崎市西町隈月寺の辺で北の100米ばかりの地点の救援のために停車した救援列車3号車でした。代用車を逆にして、道の尾駅方面からゆっくりゆっくり南下したもので、鉄道線路には、負傷車が横たわっていたので2人の代用車の乗務員が旗をかりつつ、下って来たものでした。

そこには、数百名に及ぶ負傷者など待たしておりました。

重傷者のみ列車に乗せよと指令が出て、警防団、軍人、軍醫、鉄道員が負傷者と抱きかかえて、列車に乗せ、又、列車の方から手を引きあげて救援列車に乗せられました。

この列車は、数両の客車でしたので、負傷者は200名ばかりが乗ったと思います。北に向って出発したのが午後7時頃で薄暗くなって行くところでした。列車は諫早駅で止って軽傷者をおろし、終点の大村駅に、午後7時30分頃着きました。

このオ3号車に深塚勝一、又、奄美大島の新網ササキム乗車しておりました。

なお、救援列車オ1号(石原公明)午後2時頃出発六地蔵前附近から出発

- 、 オ2号(高次正志)、 4、 、 、
- 、 オ3号(深塚勝一)、 6時30分、 、 、
- 、 オ4号(大平力男)、 7時、 、 道の尾駅出発



原爆惨状絵図ヲ5子

「原爆投下後3時間 F6Fの偵察は？」

この画面は私が、西町の防空壕にいたときのことでした。
壕の中には、20名前後の人が身をひそめていたときの争でした。
午後2時頃だったと思います。突如、稚佐虫の上空から急降下して、
地上から100米半ばほどのところまで低空飛行して偵察飛行
した、グラマンF6Fがあった。

防空壕の出口にいた私と真正面に向い合ったのでした、20名前後
の飛行士の顔まではっきり見ることができたのでした。

私は思わず「この野郎！」と云ったようでした。

ところがF6Fは米海軍の艦上戦闘機でしたので、五島近海に、
米国の航空母艦に来ていたと思われます。

アメリカがいかに長崎原爆投下を大作戦にしていたかと推測でき
ると思います。

なお、この飛行機を元果議の高決正志さんは、私のところから
100米ばかり離れたところの小川で見たと云っておりました。

又、救援列車ヲ1号車に乗っていた石原公明さんも知り
おり、両名とも午後2時頃だったと云っております。

証言者

深堀 勝一

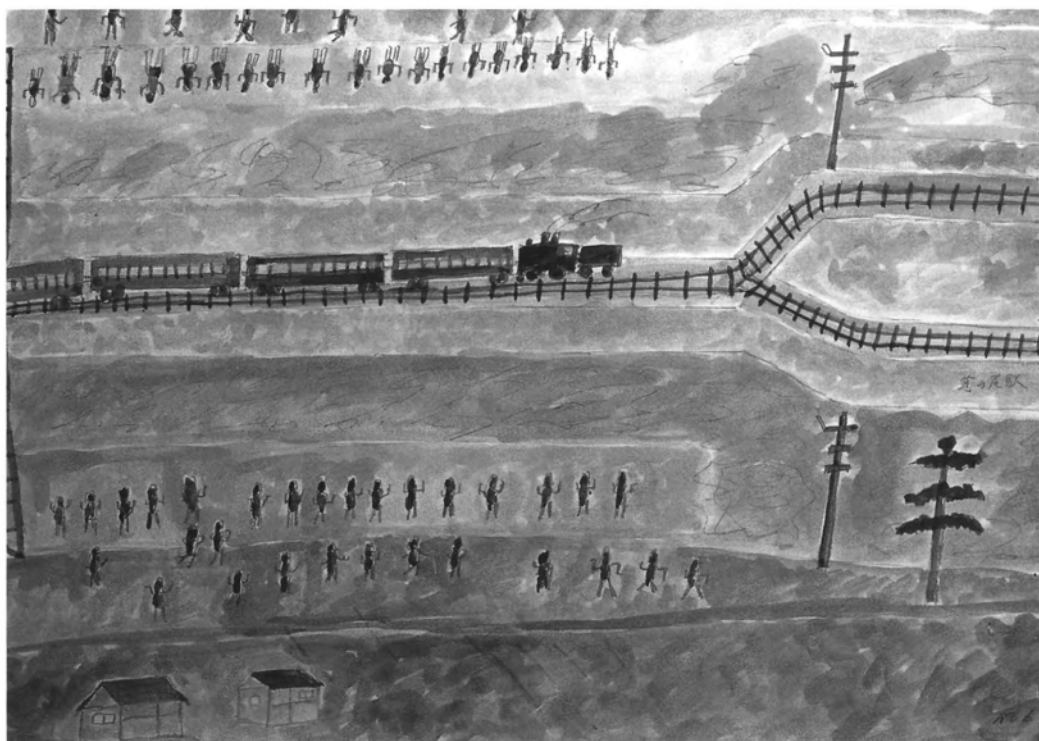
長崎市 坂本ノ町

石原 公明

西彼村 西彼町 下長郷

故・高決 正志

長崎市 蚊城町



原爆惨状絵図 ㉔

「絶対に戦争はしていけない！
 救援列車 道の尾駅を 通り過ぎるとき」

この画面は、私が 救援列車 ㉔号車に 収容されたときが、6時50分頃
 で、道の尾駅の 切り通しを 通過するときが 7時20分前後だ と思います。

あの 7米ばかりの 切り通しの上を 目とむけると、あの 土手に 這いつくばって
 救援列車を のぞきこんでいる人が ぎっしりいた、その数字は、100人 前後の
 人だった と思います。

薄暗くなって行く 車中から、私は あーあ 戦争は 負けたなあ ……
 あの 長崎の 光景を見て、戦争は 絶対に しては いけない、どんな ことが
 あっても、決意した のでした。

この 救援列車は、何処 に行く てもなく、ただ、長崎市を 逃れる ことで
 楢一杯の 救援列車、これより 以上、不安な ことは なかった のでした。

この 思いが、私が 40年間、平和運動、被爆者運動を 推進した 原動力
 でした。

◎ 証言者 深 堀 勝 一 (68歳)
 長崎市 坂本ノ丁目 [REDACTED]
 長崎県被爆者支援会の 会長



被爆惨状絵図オ32号

「原爆投下2ヶ月前に原爆の講習会が」

それは、昭和20年6月の梅雨晴の頃でした。

私ども、三菱兵器大橋工場勤労部の前庭の芝生の上で、
昼林升(12:00から12:45)をしていたときの事です。

当時、三菱兵器大橋工場には日本で最高水準にある
青年技術者校が20名程 配属され、各種新兵器の研究が、
急ピッチで進められておりました。

「おい中学生 集まれ」と言う号令で、私ども勤労学徒
の中学生が40名程度が集合しました。

ところが、何をするのだろうか？ 私どもは、いびかって
いたのです。

講義の内容は、今日の新兵器についてでした。

だんだん話が進んでくると原子爆弾に及び、原爆の
原理が詳しく説明され、私どもにもおぼろげながら、
理解することができました。

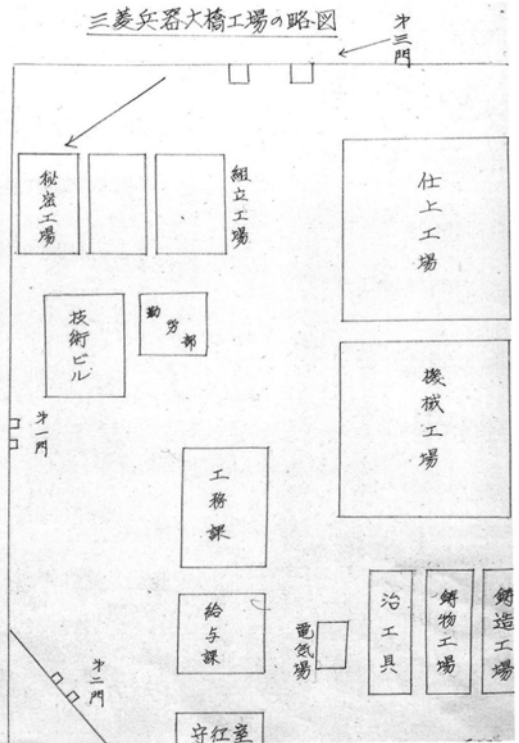
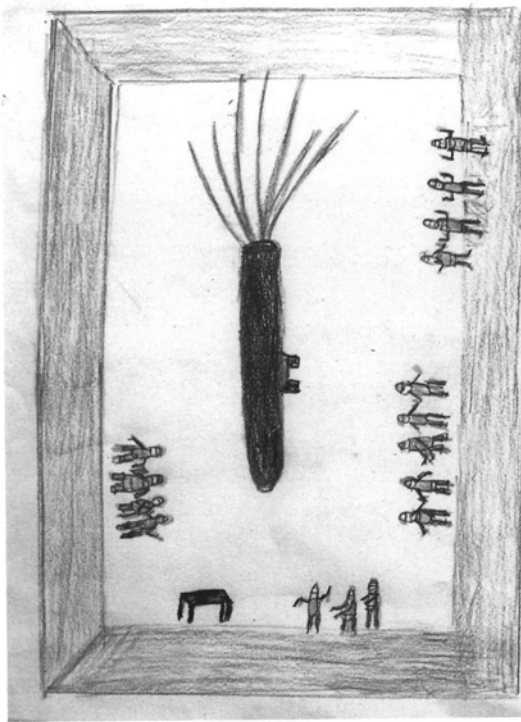
そして、今日の状況では残念ながら、アメリカが一番
進んでいて、美用の段階まで来ているとのことでした。ところが
私どもは、この原爆の被害者オノキになろうとは、

知るよしもなかったのです。

私は、8月6日に広島市に新型爆弾が投下された日の夕方、
ソ朝光の本原町ノ母の喪家において、弟、壽から聞いた時、
「あっこれは原爆だ」と、弟にいました。

その弟も3日後8月9日の原爆により死んだのも何かの因縁な
だったと、今も思っております。

◎ 証言者 深堀 勝一



被爆惨状絵図オ33号

「ドイツ、VI、VIIの
ロケット兵器実験が長崎で」

昭和20年の4月頃でした。三菱兵器大橋工場の秘密工場、当時、ドイツ空軍が、英国土を攻撃していた、無人飛行機VI、VIIの記事は、毎日新聞にのっておりました。

それは、新兵器でイギリス、アメリカ、フランスなどの連合国を大いに驚えあがらせた兵器でした。

ところが、そのロケットの噴射推進実験が、三菱兵器大橋工場の秘密工場で実験されることを聞いた。私も教人の勤労学能は、その現場にのりこんでいきました。

刑務所のへいのようなものを（前々5米程）のりこえて、里面にあるような恰好で見学をしました。

本来ならば、叱られて追放されるどころであつたが、新兵器開発の技術将校はただ黙認していました。

そこは、150坪程のコンクリートで周囲をかこまれておりました。

なかにはロケットが直径50cmの筒で6米ばかりの長さでした。実験がはじまると、噴射推進の音が、耳をつんざく程のものでした。

戦争末期には、相つぐ敗戦の報に、国民の大多数は、新兵器発見をこころ待ちしていたことで、見学していた私どもも大いに期待しておりました。◎証言者 深堀 勝一(69歳)

◎ 追跡記事 (被爆惨状絵図オ33号)

あのロケットは、ドイツ政府が同盟国の戦力増強のために潜水艦によって、インド洋上に運び、日本潜水艦に引渡したものであると聞いております。

そしてあのときの立会人が、技術将校15名で原爆のとき一番南側の技術ビル(爆心池から距離1100米)にいたため、全員が犠牲したと思われまます。

あの光景をみたもので、平成8年(51年後)の今日、生き残っているものは私(茶畑)1人であると思います。

なお、この絵を見た村崎圭子さんが私の兄立会人であつたと、兄から聞かされました。

村崎さんの兄さんは、東大工学部卒の青年教師でした。



被爆惨状図 才34号

「昭和20年8月1日、B24、B25による
長崎大爆撃」

私は、その日、8月1日は、動員による疲れで、三菱兵器大橋工場を休んでおりました。

お昼過ぎのことではなかったかと思ます。空襲警報がなり、やがて敵機襲来の鐘が鳴ったようでした。そこで、私は、家の中の防空壕に入りました。

しばらくしてから、外庭に出てみると、長大医学部の学生が、グビロケ丘の体育館の前にたむろしていた学生20名程の人が、急に山の手の防空壕に駆けて行きました。

これは危いと、大学病院の上空をみると、画面のような光景でした。B24、B25の8機編隊が、頭上に来ておりました。そこで、私は防空壕に入ると、すぐに爆弾が、だだだど、投下されました。

非常に近い場所にと投下されたと思いました。それは防空壕の四隅がくわれて、砂ほこりがしました。

それから、1時間ばかりの間、つぎつぎに編隊爆撃がありました。

爆撃の終了後、外に出てみると、わが家にも大きな穴がありいくつかやられ大破しておりました。

私の家から20mばかりのところ、250kgの爆弾が投下され、10mの穴があいておりました。

その日の午後5時頃、姉、母が家に帰りつき無事をよこびあいました。

午後5時近くになって、弟が学校より帰って来て、皆が無事であったことをよこび合って、家族のきつなが、こ人なにまで、強いのかと知りました。

その日の長崎市の死者2000名、負傷者5000名とか、人が云っているのを聞きました。

その後、わが家は、疎開先を母の実家にしようか、姉が長崎に予約していた家に行こうかと、迷っていたが、結局、母の実家である長崎市本町町1丁目20番地の家に疎開したのが3日後のこととさでした。前記のように、長崎市内においては、住居の移動が激しくなり、長崎市外に流出したもの、ちょっとした民族の大移動のように8月2日より、8月9日までは、引越荷が、道路をあふれた感がありました。

なかには、洪の町の人々が、浦上の方に引越して来て、原爆によって爆死したものがあり、運命のときの人も多数いたわけてした。

◎証言者 深堀 勝一(88歳)
長崎市 坂本1丁目 8-29

参考)

皆さま、爆弾が空中より落下する音をご存知にはならないうでしよう!!

私は、昭和20年8月1日、B25、B24による編隊爆撃を受けましたが、1時間半ばかりの反復攻撃で「ヒューンヒューン」という深意味な音で、そのとき私の近く20mにも250kgの爆弾が落ちたのです。

◎証言者 深堀 勝一(88歳)
長崎市 坂本1丁目 [redacted]
長崎県被爆者身障友の会 会長



被爆惨状絵図 才36号

「七高生 大いに集れる」

この画面は、昭和20年4月、勸業学院として、鹿児島県の才七高等学校が、三菱兵器大橋工場に配属されました。

その数 200名程度の学生でした。(土屋節、鹿児島県知事ら来ていたと云って居られました。)

三菱兵器大橋工場才三門(現、長大正門)と通って、弊衣破損の七高生隊列を作った。道一杯はたがって歩く姿は、異様なものでした。まるで暴力団の行進のようでした。

その頃でも高下駄をはい、雨の日は、おのを肩にかけて、雨傘は持ちませんでした。そのまじまじに皆さん驚いておりました。

三菱兵器工場の人気者にすぐにのしあがり、中学生などはその弊衣破損をまねして、自分になる人もおたくらいでした。ところが、20年6月頃、各地の工場が爆撃の被害で、部品の調達がおくれて、仕事がない日々が続いたときがありました。

そのとき、七高生が本を読んでいたそうです。ところが工場の守衛が「工場に来て本をよんでいるとは、何事だ」守衛の詰所に連行して叱ったのでした。そこで件の七高生「学生が本を読んで何が悪い、私ども学生が来ているのは、貴方達の手のひらだ、学生が本を読むのは本分だ」とやり合い、遂には、工場側と

大げんかになり、2日間のストライキとなりました。

最後には、工場側が、わびを入れ終結しました。

この要因は、守衛が、小學校卒のたの、社会に出れば、自分達より出回する学生を今のうら、いらぬておこうとする、万華上尊夫の根性でした。

◎ 証言者 茶 滋 勝 一 (69歳)

長崎市 坂本1丁目

長崎県被爆者支援協会会長



被爆惨状絵図オコサ

「さげすんでいた朝鮮人に助けられて」

この絵面は、昭和20年8月9日午後5時頃のことでした。私は、原爆投下により、全身に負傷して、三菱兵器火器工場第一仕上工場より、第三門を出て西町の防空壕にへと逃げこきました。

それは、三歩行って倒れ、五歩行って倒れて、まるで鉄豆をける駒に恰好で逃げ込みました。

ところが、4時頃になって、トンネル工場前を救護列車が出たということと防空壕内で聞きました。

そこで、起き上って、鉄道線路まで、歩いて行こうと思いついて、ところが、さきほどまで歩いて来たが、もう歩くことが、

できませんでした。そこで何人かの日本人に頼んだが断られました。このままここにいたら出血多量に

なってしまうと思いました。そこで思いあきらめて、通りがかりの朝鮮人に頼んだわけでした。ところが、その朝鮮人、

「まあいいですよ」と簡単に引き受けたのでした。

それからしばらくして、二人の朝鮮人がリヤカーをもってきました。私は、このリヤカーにどこから持って来たかと不思議でした。

露心地から1,400米の地点でよくまあリヤカーがあったものだなあ……と、

私は、お陰様で、間もなく到着した救護列車オコサに収容されたわけで、午後10時頃には、大村海軍病院に入院しました。

私はこの朝鮮人に助けてもらわねば、出血多量で死んでいたろうと思いました。

私は、朝鮮人と云えば、さげすんでいた、私も日本人のことを思うとき、非難にはずかしい思いをしました。

それからは、どこの国の人であろうと、どんな人であろうと、敵意を覚悟して行かねばならぬと決意しました。

私が被爆者運動、平和運動をはじめたのも、神様より、この運動をするようにまき残されているものと思ひ、この運動を終生続けたいと思っています。

◎ 証言者 浜塚 勝一 (68)

長崎市 坂本1丁目

長崎県被爆者手帳返の会会長

〈後日談〉

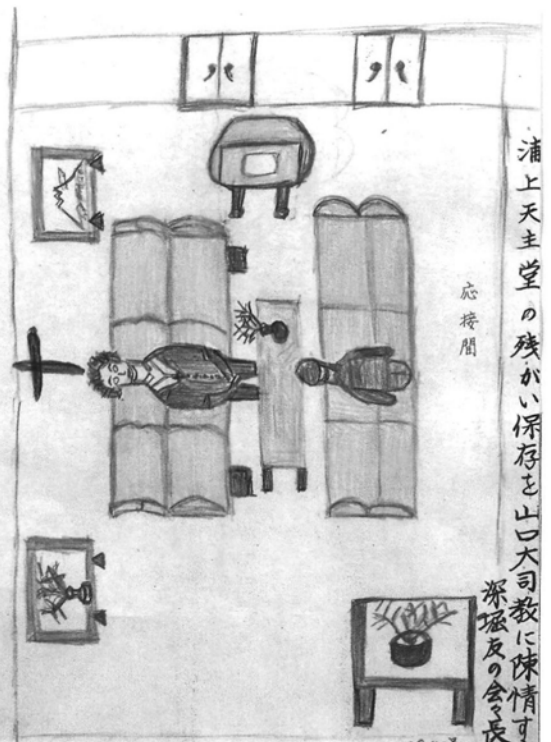
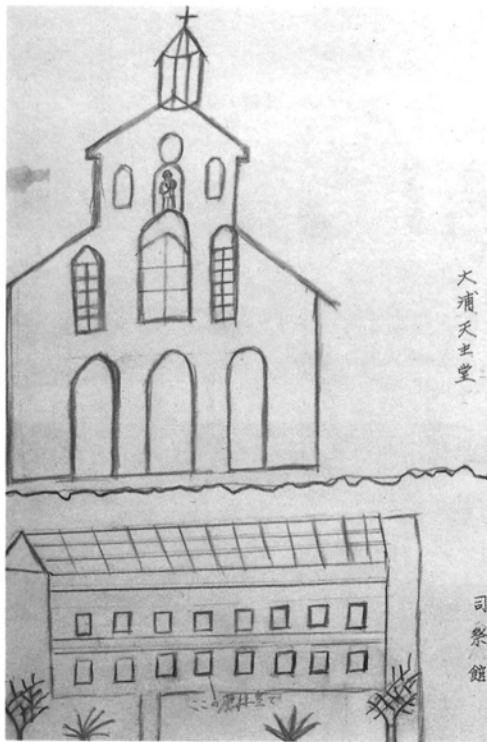
平成8年3月に、友の会本部2階会議室において被爆惨状絵図教室において、長崎市 西町支部副支部長 山川 米雄さんから、会長が乗っていた、あのリヤカーは実は私の家のリヤカーで、あつた証言されました。「私の家にはリヤカー5台があつて、被爆後に使用していたそうです。

そのうち、4台が家において焼け、あとの1台が畑中の小屋にあつた為、焼けずに残つていたそうで、あのリヤカーで、浜塚会長が救護列車まで運ばれたと云うことが判り、大笑いでした。私もあの厩リヤカーは、どこから持って来たのか、不思議でなりません。

因くところによりますと、原爆が投下されたとき、あの朝鮮人達は、西町附近において、防空壕掘りをしていたので、畑の中で健在であるリヤカーを突いていたものだと言判りました。

そのために、翌8月10日 山川 米雄さんのお母さんが道の尾崎操所に行くために、親せきの犬八車を借りて行ったそうです。

誠に熱いお話を聞きました。



被爆惨状絵図 第40号

「浦上天主堂の存置運動についての経過」

この画面は、昭和32年6月頃のことで、私は浦上天主堂の残がい、残すべきで、長崎県勧業学術振興会の会（昭和32年11月10日）の発表前のことでしたが、この問題については、重文な関心を持って、NKKKの私運のことも、浦上天主堂の存置を断って、全国放送により、発信していただきました。

このような経過で、私は大浦天主堂に山口大司教を勧めたわけでした。私はまづ、「浦上天主堂の残がい、現在に残すべきで、ホムベいの遺跡にも匹敵するものです」と陳情したのでした。

ところが、山口大司教は、「お前は誰の息子か？」ああ、か！「その人ならよく知っているぞ」と、返された。

なんでも、うちの母の舅家と近所だったのでよく、私の家のことを知っておられました。

続いて、貴方の考え方と全く同意で、その事に、長崎市の方に浦上天主堂の後方の土地を買って頂ければ、天主堂を後方に引いて建てますので、申し入れしてあり、「もう五年にもなるが返事が無い」と云っておられました。

「私も前金者となったので、米園など行脚して、教会建設の寄附をもらわれればならぬので、もう時間的余裕がない」と云われたので、私もこのような事情なら止むを得ないと思いました。

当時の土地の価格なら、1000坪で1,500万円位の金だったと思います。

後年私の女房がイタリアを旅行してホムベいの遺跡を見て、「勿体なかったなあれを残しておけば、在野的遺産になっていたであろう」と嘆いておりました。

それは山口大司教と、田川勇市長の見識のちがいがこの様な結果となったと思います。

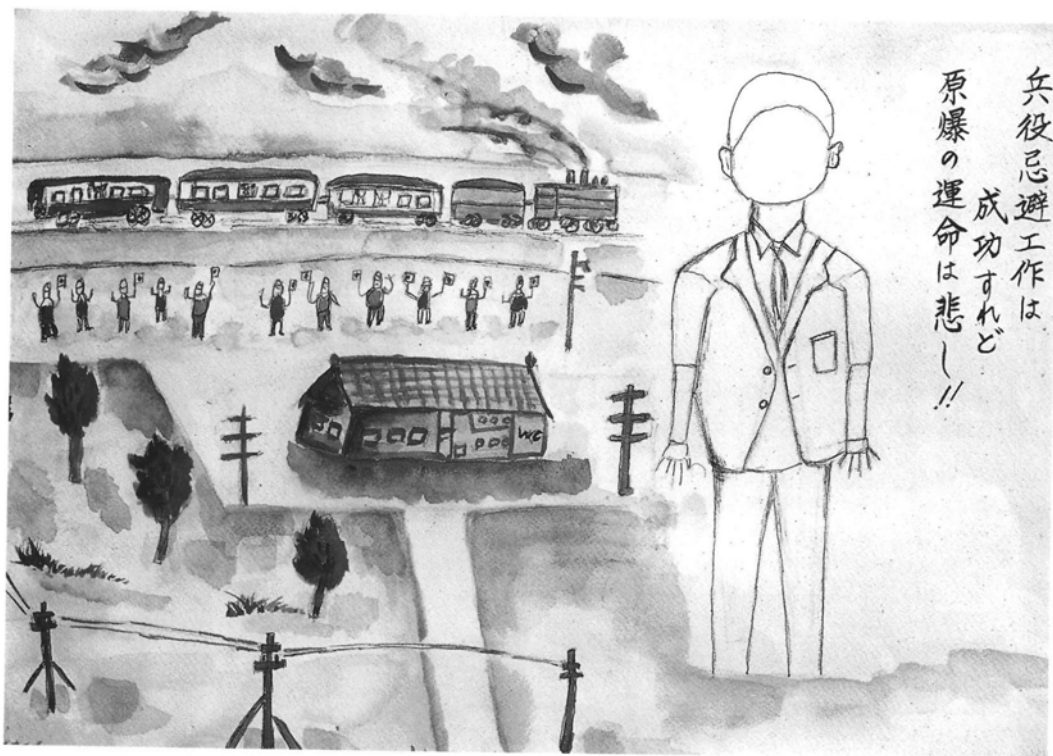
山口大司教は、若い時ローマの大神学で学位、ヨーロッパ諸国を遊歴して、遺産遺産に対する価値観を身につけていたと思います。田川勇市長は、小學校出身で弁護士にいられた人でした。

しかしながら政治家としては高潔な人物で、長崎市長で現代の政治家に対して、私は田川勇市長のつめアカを痛めて飲めなさいと云いたくらい、立派な人で、明治時代に生れた偉人だと今も私は尊敬しております。

なお、山口大司教はこれに対する手紙を8冊頂いていると云われ、市議会で、荒木徳五郎さんが存置のために頑張っておられました。

◎証言者

深堀 勝一 (88歳)
長崎市 深堀 1丁目
長崎県長崎県庁長官の秘書



兵役忌避工作は
成功すれど
原爆の運命は悲しし!!

被爆惨状絵図才49号

「兵役忌避工作は 成功すれど 原爆の運命は悲し」

長崎市には、三菱造船、三菱電機、三菱製鋼、三菱兵器、川南工業と、五大軍需産業の基地でした。

その従業員数などを合計すれば、約5万人に達していたと思います。その為、各企業の戦争貢献度は、重大なるウエイトを占めていたことは容易に予測されるところです。

さて、その中において、従業員が兵役に服すると、余人をもって、かえりたい、技術者が多くいたのもまざれぬ事実でした。

そこで、会社においては、軍当局に対して、兵役猶予の申請書を提出して、技術者の確保を実施していました。

その数は、推測するに従業員の数パーセントに達していたと思います。私の知っている人だけでも相当数の人がおられるわけです。ところが、其中、どこにでもドロボーもあれば、サギ師もいるのです。特に軍関係のトップとコネがある人が、この手を使って、兵役義務をのがれたわけです。

その数は、数百人もいたと思います。其中、ずいぶんのおかしなわけがないのです。原爆の投下によって、爆死した人々を私は何人かと知っております。兵役に行つておれば、助かっているものと思ふとき、原爆の運命は多数の人の人生を狂わしたと思います。

◎ 証言者 深 堀 勝一 (48歳)
長崎市 坂本1丁目
長崎県被爆者手帳友の会長



被爆惨状絵図才50多

「大村海軍病院のベッドの中で、
人類は必ず滅亡すると」

私は、昭和20年8月9日、長崎市三菱兵器大橋工場において、原子爆弾によって負傷し、その日の午後10時30分頃だったと思います。大村海軍病院に入院しました。

私は、ベッドの中で、得体の知れない痛気で入院患者が、つぎつぎと、死んでゆくが……

次のような結論を下しました。

原子爆弾と言うものは、この広島、長崎が、一歩であり、云わばひな型であると思う。

この兵器が、つぎつぎにこれから改良され、又、発展して行くものと思う。そうすれば、この兵器はやがて人類を滅亡させることができる兵器となるであろう。

私どもの、キリスト教の予言に人類の滅亡の日のことが書かれているが、これぞ、人類を滅亡させるものだと思います。

そして、又この兵器の発展は、危険なものだと言う声も必ず出て来て反対運動も起るだろうが、結局は人類は滅亡するだろう……

それは何故か、人間には果てしなき欲望があるから、つい負けてしまうことになるであろう、と思った。

また、潜水艦に被爆弾をつんで、洋上にほろり浮かんで、ロケットによって、本土を攻撃すれば防衛方法は無いのでは

ないか、

ところが、今日ホセイドンと言う恐ろしい兵器があるが、その原理は、私が51年前考えたアイデアと同じです。

なお、大村病院には、才15病棟がありました。

◎ 証言者 深堀 勝一(88)

長崎市坂本1丁目

長崎県被爆者手帳協会会長



被爆惨状絵図のそと

「お母さんの金の指輪、ゴルフバットとなりて」

原爆にひいて、一家全滅の家がありました。華商産業の要職をつとめていた人がおりました。

私どもが数万人に及び会員を持っている関係上、いろんな情報がありました。

その人が一家全滅のために、会社より命令を受けて、従業員が焼跡に見たものは、銀の風呂釜だったといました。

ところが、このおえら方の身内となる人が、ある日、友会の事務所を訪ねて来ました。

そこで、例のおえら方の話が出て来ました。

私は、「あの人の家には、銀の風呂釜だと聞いております」と私が切り出すと、実は、私の身内^(お母)の家には、「そのおえら方の金のゴルフバットが、かくしてあったよ」となったわけです。

どうですか、国民の皆さま、あの戦時中に、金の供出を呼びかけられて、私の母も、金の婚約指輪を供出したことと記憶しております。このようなことが戦争中いろいろとありました。

厚生年金と従業員からとっておきながら、社会保険事務所に納付してなかった企業もあります。私が昭和22年養老者に勤務して給与係を担当しました。

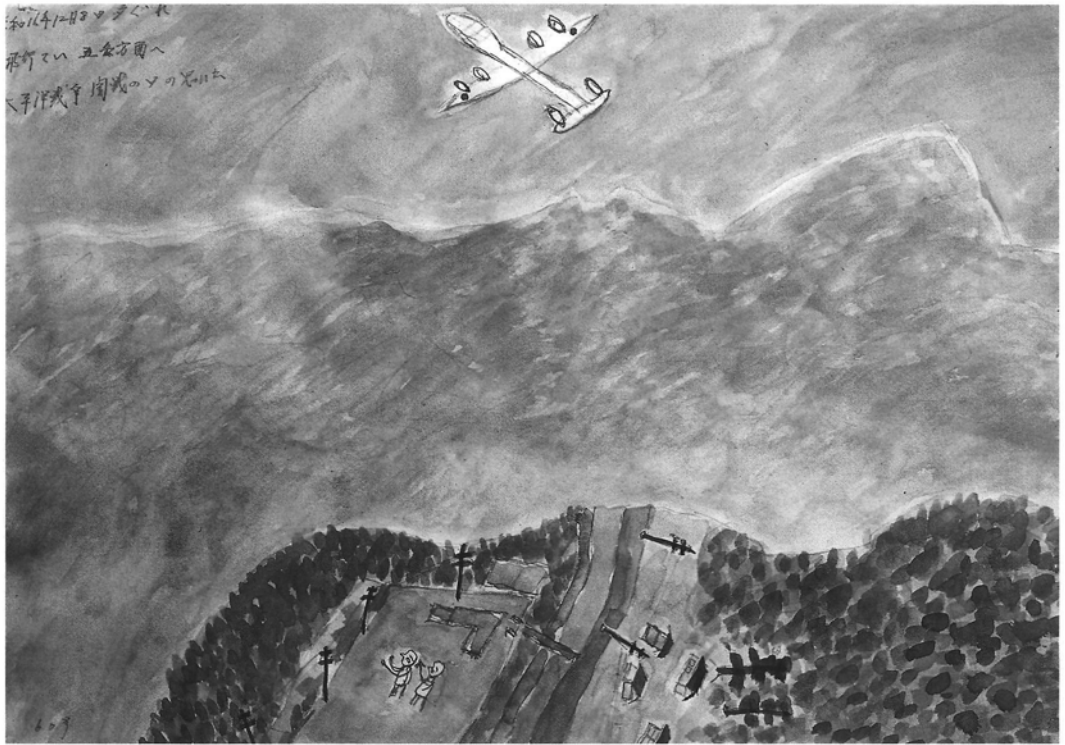
ある日のこと、私が従業員の給与を支拂つた後に徴収した所得税を税務署に納めに行こうとしたとき、経理課の上司から「澤塚君、その税金をみんな税務署に納めるのが、私どもが前に勤務していた会社では、半方位しか税金は納めていなかった。そこで私は「この人へんなことさう人だね」と思っております。

ところがその後、私が友会の運動として、はじめておのたのですが、戦争中友会においては、税金、厚生年金など政府に納付しなれば、行かぬたものと、ごまかしていたた存ありと思つた。

戦争中、政府、軍、大企業などが、権力を握つていたもので、裁判所、警察、税務署など、どうでもなるさとして、国民の義務を怠つてたのだと思つた。

さきの私の上司の方もこの系列の人でした。今日、朝鮮人、中国人、台湾人などが、日本政府に補償を要求して来ますが、それはすべて真実で、日本政府は誠意をもってこれに対応しなければ、地が、日本は、世界の孤児となりまふ。

◎ 証言者 澤塚 勝一(88)
 長崎市 坂本/〒
 長崎県被爆者手帳協会の長



被爆惨状絵図才60号

「開戦の日 12月8日の思い出」

私がいつものごとく、午前7時20分自宅を出て、長崎商業に着くのが、午前7時55分頃でした。

当時学校は、油木谷にあったので、いつも徒歩で学校に通っておりまして、ご承知のとおり、昭和16年ともなると、支那事変が悪化して、戦況急を告げていたころでした。

ところが、私の家を出て5分もしないところで、小佐々島石門さんの家の前で、臨時ニュースを聞いたわけでした。

「臨時ニュースを申し上げます」

大本営発表

「帝国陸海軍は、本八日未明、西太平洋において、米機と戦い状態に入れり」と報じておりました。

学校に着いてからも、この報でもうざりでした。

朝礼のとき、火の狂校長、熊川千弥校長が例によって、土をこぼす演説をされたのも、当然の成りゆきでした。

それから敵機がつぎつぎに発表されて生徒一同若干興奮気味でした。その日、一日中ざわさわしてどこかしら落ちつかないところでした。

私は、皆さん果敢しているなかになにかしら、不安が類をもたげて来ました。

それは、今でさえ、支那と戦争しながら、そのうえに、米英という大國と戦争をして、大丈夫だろうかと思っただけでした。

その日の午後4時頃花庭に又、集合させられました。

そのとき、大村と出発した飛行艇が、五島方面に、1機ゆつくり、西進してゆくのを見とどけました。

なにか、一日の果敢をほぐすかのように

◎ 証言者 添 浜 勝 一

長崎市 坂本ノ丁目

長崎県被爆者学校校長の父



被爆惨状絵図 才63号

「私の主人が 死んだのよ!!
遺族年金を申請して いたら!!」

今から 5年頃前の ことですから 平成3年の頃だと思ひます。私に、県立病院の 医療社会事業部に いたところ 病衣姿の 美しい 婦人が 近づいて来て、「私の主人が 死んだのよ。」と云うのです。私は、この 婦人が 誰か 知らなかつたのでした。どうも、友の会の 会員らしく、西城山支那の 永田 さんと 名の つたわけていた。よくよく 聞いてみると、長崎原爆の 被爆者で、三夏兵器工場の 被爆者だといふのでした。そして 死亡診断書、肺癌の ようでした。

ですから 永田 さんに対して、私に だまされたと思つて、戦傷病者 戦没者 遺族等 保護法による、遺族年金を申請して いたら……

現在、放射線学会の 推移と かれは 30年 40年 になって、多量の放射線と 浴びた人は、白血球、癌になることが、立証されている。今日、急性放射能症のみを、遺族年金を支給するのは、おかしいのでないか、私にも 厚生省企画課の 事務官に 在職していたら、上司に 進言して、遺族年金を支給すべきと云うのだが、

とにかく、私に だまされたと思つて申請したらと、すめたわけでした。それから 1年ばかり 経過して 永田 さんの 奥さんが 友の会を 訪ねて くれました。ところが どうですか、

「会長さん 遺族年金が 交付されて 来たんですよ」

「そうか、でも 何れ 来たか、でも 考えたら くるのが 当たり前だからね」

永田 さん 云々、会長さんから 云われて、市役所、果行に行つたら そんな ものが 通らぬか」と云つて それは 冷淡なものでした。

私が 補正して 返つて 来りました。

「あれは、いかん、これは いかん」と云うのが、市役所、果行の いつもの ことですよ」

いつれにしても、肺癌性放射線後遺症に 遺族年金が 画期的な こと でした。その後、今日まで 12件 程 交付されたのでした。

◎ 証言者 米 堀 勝一 (60歳)
長崎市 城本1丁目 [REDACTED]
長崎県被爆者手帳友の会 会長

特別報告

井原東洋

長崎県被爆者手帳友の会会長

「被爆マリア像」と深堀勝一さん

●特別報告

「被爆マリア像」と

深堀勝一さん



長崎県被爆者手帳友の会会長

井原 東洋一

キリシタン浦上信徒の苦難と教会建設

今、浦上天主堂の小聖堂に安置されている「被爆マリア像」

は、世にも不思議で数奇な運命をたどって来ています。

秀吉や徳川幕府による二五〇年間にも及ぶ徹底した弾圧と迫害に耐えぬいてきた浦上の潜伏キリシタン達は、一八五三年のペリーの黒船来航以来ようやくにして、時の為政者が開国への道をたどり、一八六四年末には、フランス人神父によって大浦天主堂が建設されました。その事を知った浦上の十数名の男女が一八六五年三月、大浦天主堂を訪れて自らキリシタンである事を名乗り出しました。いわゆる「信徒発見」により、二五〇年ぶりに信教の自由を得たとの喜びも束の間、最

後の迫害となった「浦上四番崩れ」となる弾圧が明治政府によって断行されました。

「村民総流罪」というもので、浦上の信徒三三九四人が異郷の地に流され、苛酷な牢獄生活と拷問が科されました。このことは欧米諸国から強い批判をうけましたが、禁教令が解かれるまで六年余も新たな弾圧に耐えなければならず、六六〇人が殉教しました。実に二五九間に及ぶ長い迫害の歴史によりやく幕が閉じられたのは、一八七三年（明治六年）の事でした。

これらの度重なる弾圧と迫害に耐えぬいて来た浦上の信徒たちは、キリスト教信仰の自由を得た「信仰の痛みの丘」に

教会を建てる事を決意しました。

ようやく一八九五年（明治二十八年）に工事を着工したものの、予想を超える困難の数々に直面し、一九一四年（大正三年）天にそびえる双塔が工事半ばの未完成な中で献堂式が行なわれ、当時東洋一の威容を誇った旧浦上天主堂が完成したのは、一九二五年（大正十四年）の事でした。

実に三〇年間もの長い歴史を重ねての所産でした。

被爆マリア像の原型

顔の部分のみが焼けただけが残った「被爆マリア像」の原型は、スペインの画家ムリーリョが十七世紀に描いた代表的な傑作「無原罪の聖母の御宿り」を模した木彫りの寄せ木細工の、高さ二mにも及ぶもので「聖母マリア像」として、一九三五年（昭和十年）頃から浦上天主堂の中央祭壇最上段に安置されていたものでした。

原爆で全てが焼失した中に残った――。

野口嘉右エ門神父が発見

長崎の浦上に生まれ、幼い頃から中央祭壇の「聖母マリア像」を仰ぎ見て来た、野口嘉右エ門氏は、十四才の若さで故郷を離れ、函館のトラピスト修道院で生涯を捧げる決意をし

ました。

しかし、修道者も兵役を免れず軍務にありました。一九四五年（昭和二十年）八月九日、長崎市に投下された原子爆弾は、たった一発で浦上地区を中心とする市内一円を焼きつくし、破壊しつくし、十五万人もの人々を殺傷しました。

浦上のキリシタン信徒も一二、〇〇〇人のうち、八、五〇〇人の命がこの日失われました。

兵役にあった野口氏は、故郷の事を心配していましたが、その年の十月頃除隊して函館に帰る途中、どうしても長崎を訪れ、胸中に鮮烈に描いていた旧浦上天主堂で祈りたいとの思いをこめ、浦上の丘に立たれました。

野口さんが目にしたものは、かつて東洋一の規模を誇った浦上天主堂は、灰燼に帰し、瓦礫の山と化しており茫然自失、言葉を失いました。

何か遺品はないものかと何回も堂のまわりを巡って見たものの、手にする遺品は見当らず、疲れ果てて祭壇礎石の一部に座った時、ふと目の前の瓦礫の中に木片を見いだし、「助け出してくれ」とのかすかなつぶやきと哀切な表情を全身にうけとめて拾い上げてみると、それが「マリア像の頭部」でした。

これこそ幼少の頃仰ぎ見ていた「聖母マリア像」の顔の部

分に間違いはないとの確信をもったものの、相談する人も、預けるすべもなく、函館に持ち帰って、鏡台の前に置き、或は仕事場である教会の牧舎にしつらえた簡素な祭壇に安置して、毎日敬虔な祈りを捧げ続けてこられたのでした。

時は流れて、一九七五年（昭和五十年）の被爆三十周年を機に、「被爆マリア像」はやはり長崎の地に戻して安置する事が適切だと判断され、カトリックの重鎮であった片岡弥吉さんと相談の上、純心短大で大切に保存される事となりました。

そして、一九九〇年、浦上天主堂敷地内に信徒会館が完成したのを好機として、片岡千鶴子純心大学長など各位の計らいで、玄関ロビーの展示ケースに納められました。

現在でこそ「被爆マリア像を世界遺産へ」との動きもありますが、一九八五年に、ローマのパチカンで開催された「平和のための原爆展」に出展されたと伝えられているものの、その後も知る人々も少なく、ひっそりとしていました。

朝日新聞報道で脚光

横須賀壽子さんの先見性と活躍

一九九八年十二月四日、朝日新聞は当時のシリーズ特集「二十世紀からの伝言」第三部「七つの村の記憶」の全国版で、

「被爆マリア像」を紹介しました。この記事を見た横須賀壽子さんは強烈なインスピレーションを受け「原爆展」での展示を直感しました。

首から上部の焼けただけ顔、うつろな目の高さ二六cmの木彫品の写真から放たれるメッセージに心うたれたのでした。かねてよりロシアに多くの友人をもち、多彩な民間交流で数多くの実績と貢献をされている東京都清瀬市在住の日本基金・代表理事・横須賀壽子（七〇）さんは、ベラルーシでの「原爆資料展開催」を企画し、具体化の最中の事でした。

早速モスクワの友人に、この新聞切抜きを送り、その友人がベラルーシの首都ミンスク市の友人に伝え、さらにそのミンスク市の友人は、カトリック教会の神父に、記事と写真を贈りました。

横須賀さんのこの真剣な努力が実り、ミンスク市のカトリック教会の神父は、隣接するチェルノブイリ原発事故による多くの被害者や将来に生きる希望を失っている子どもたちの為に「マリア様は身が焼けこげてもなお心の中に生き続けている」との強力なメッセージを伝えたいとの思いを重ねて、日本、ロシア、ベラルーシの平和を願う友人たちによる信頼の逆送便で、一九九九年秋ごろ、ミンスク市聖シモン・聖ヘレナーローマカトリック教会主任司祭、ウラジスラフ・ザ

ヴァリニユク様から、浦上天主堂・大主教 島本要様宛に「被爆マリア像」を展示したいとの要請書が送られてきました。

ロシアの学生への奨学金「深堀基金」に次いで、「被爆マリア像」展示へ、深堀勝一さんの出演

※深堀奨学金（「地球人」より）

長崎は、日本で一番古いロシアとの関係が深い土地である上、人類史上二度目の原爆被災地であることから、私にとつても結びつきがとても深かったです。長崎の平和公園にソ連から平和の像が贈られたとき、長崎の平和団体や被爆者の団体、市民から、ぜひともソ連に長崎から平和のシンボルの「長崎の鐘」を贈ろうという取り組みが起きました。その折、私も八十八年に世界大戦で大きな被害を受けたレニングラード、今のサントペテルブルグに「長崎の鐘」

横須賀壽子さんは、長崎の平和公園にソ連から「平和像」

が贈られた時、当時のレニングラード市、いまのサントペテルブルグ市に「長崎の鐘」を贈る時、ゴルバチョフ元大統領への「友の会平和賞贈呈」の時、そして「深堀奨学金」として一九九六年からロシアの学生達の支援に生かされてきた

が設置できるように協力しました。

その取り組みの中で、長崎県被爆者手帳友の会の深堀勝一会長と知り合いになり、長崎に行く折があると

「深堀奨学金」のいじり

日本基金・代表理事

横須賀壽子

直接、事務所にお尋ねしました。そんなある日、深堀会長が奨学金の話を聞いて、ぜひ協力しようと寄付金を頂き、その後も二回受け取りました。

私たちは、これは長崎の被爆者か

らの支援として受け取ることにし、日本基金の中に特別奨学金制度の規定をつくり、会長名をつけて「深堀奨学金」としました。九六年から、

その奨学金をサントペテルブルグとチェルノブイリ事故の被害を受けたベラルーシ共和国のミンスクとゴメリの学生たちの支援に生かすことができました。

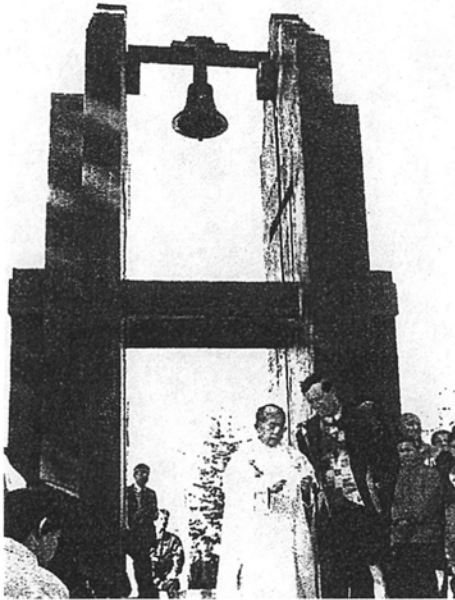
その深堀会長は、今年二月二日に亡くなられました。心からご冥福をお祈りいたします。

基金設立など、長崎への思い入れには大きいものがあります。

横須賀さんは、かねてからの深堀会長との知友関係から、「被爆マリア像の展示」についても、深堀勝一さんに相談され、ロシア、ベラルーシとの間にたち、カトリック信徒の深堀さんは、栄光式典社の西村勇夫社長を通じて、島本大司教に意向を伝えるなど協力し、一方、横須賀壽子さんもまた、伊藤一長長崎市長の紹介を得て、島本大司教に面談して話し合われるなど夫々が実現に到るまでの努力を重ねられました。

「長崎の鐘」も設置、大司教区が寄贈

ベラルーシ共和国のカトリック教会からの手紙をうけとら



「復元長崎の鐘」の祝別・除幕式であいさつする三村神父

れた、長崎大司教区の島本大司教は、この要請を真剣にうけとめられ、二〇〇〇年の大聖年にあわせて、この大事業にとりくむ事を決意されました。

西村勇夫さん、深堀勝一さん、横須賀壽子さんの打合せは綿密にくりかえされ、この際「被爆マリア像」の展示が実現する事になった記念に、何か後世に残すものはないかと検討された結果、長崎とミンスク市をつなぐ平和のシンボルとして「長崎の鐘」を設置する計画がまとまりましたが、長崎で製作して送るとすれば、時間と資金の両面から困難となる事から、設計図をミンスク市へ送って、ベラルーシで製作する方法が採用され、現地製作の資金すべては、島本大司教、三村誠一浦上教会主任司祭および西村勇夫栄光式典社社長など有志の寄金でまかなわれ、長崎大司教区による寄贈となりました。

又、横須賀さんは具体化していた「核の悲劇写真展」を同時進行で実現され、長崎、広島、チェルノブイリの被爆に関するもの、浦上に関する写真など七十枚と絵画十点の展示は、聖シモン・聖ヘレナ教会の地下ホールでの開催となりました。

三村主任神父を団長にミンスク市へ

二〇〇〇年の大聖年に合わせて、ベラルーシ共和国への平

和の旅を準備されていた島本大司教は、別途用件が重なり日程調整がつかなくなり、三村誠一教区総代理 浦上教会主任司祭（当時）が団長をつとめられ、滑石教会の川口明人神父（当時）、西村勇夫浦上教会信徒を代表員とし、横須賀壽子事務局長以下約二〇名のツアーグループが結成されました。

この団にはテレビ長崎の密着取材スタッフ三名が同行され貴重な長時間番組が制作報道されました。

二〇〇〇年九月十九日～二十九日にかけての旅は二十四日から二十六日までの三日間の展示会を主目的としたミンスク市六泊七日の滞在ではありましたが、「惨事と祈り」「平和と生きる希望」や遠隔の地で知り合うすべもなかった人々を引き合わせた「沈黙のマリア」から、強烈な叫びが伝わって来るようです。

横須賀壽子さんの平和運動家としての直感が知人の深堀勝一さんを通じて、西村勇夫さん、そして、カトリック大司教の心を動かししました。

ミンスク市の「長崎の鐘」は、いまでも毎週日曜日の正午に打ち鳴らされ、市内一円と世界に平和の響きを伝えていきます。

（了）

（追記）

この特別報告は、深堀勝一さんの多彩な活動の裏面に「いぶし銀」のように光っている事実を伝えておきたいとの思いから、西村勇夫様、三村誠一様（現、カトリック長崎大司教区司祭・相浦教会）、および横須賀壽子様と面談や電話でお話して、了解をいただき、井原東洋一の責任によってまとめたものです。

資料の提供は、三村誠一様、横須賀壽子様からいただき、又、歴史的な史実などについては次の方々からの報道と記述と講話の一部を使用させていただきました。

一、市民セミナリオ、二〇〇六年六月十七日

長崎純心大学 片岡千鶴子学長講話

二、「被爆のマリアに捧げる賛歌」

上智大学教授 長島 正様解説

三、「沈黙のマリア」ナガサキから世界をみつめて」

テレビ長崎制作ビデオ

深堀 勝一 略年譜

昭和3年1月12日 深堀力造の二男として長崎市に生まれる

昭和20年8月9日 「新型爆弾」にて、長崎市三菱兵器工場で動員学徒として作業中に被爆、母、姉、弟を失う

昭和20年3月 長崎市立商業学校卒業（六十・六十一回生同時卒業）

昭和22年8月 長崎作物報告事務所 就職

昭和50年11月30日 九州農政局長崎統計情報事務所 退職

組織
昭和32年11月10日 長崎市農民会館の一隅で、長崎県動員学徒犠牲者の会を発足す

昭和42年6月18日 県青少年センターにおいて、長崎県動員学徒犠牲者が主体となって被爆者手帳友の会が発足す

受章
昭和57年11月23日 長崎県から優良団体の表彰を受ける

平成10年4月1日 長崎市政功労表彰を受ける

平成14年6月16日 韓国平和交流功労賞、受賞

出版
昭和47年11月30日 生き残りたる吾等集いての発行

昭和60年8月8日 わが戦いの日々の発行

平成6年6月15日 被爆者手帳友の会会報綴の発行

平成9年6月1日 空白の二十時間―被爆惨状絵図の発行

役職
昭和44年4月1日 日本赤十字社長崎原爆病院運営委員

昭和55年7月21日 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ初代理事長就任

長崎県動員学徒犠牲者の会 長崎県被爆者手帳友の会の主な歩み

- 昭和32年11月10日 長崎市農民会館の一隅で、長崎県動員学徒犠牲者の会の発足
- 昭和42年6月18日 県青少年センターにおいて、長崎県動員学徒犠牲者の会員が主体となって被爆者手帳友の会の発足式
- 昭和47年11月30日 生き残りたる吾等集ひての発行
- 昭和51年8月7日 安日 晋先生（長崎原爆病院）のご遺徳を偲び被爆者手帳友の会が建立した記念碑
- 昭和52年8月5日 「長崎の鐘」除幕式（平和公園六〇〇名参加）
- 昭和53年3月7日 口之津支部慰霊碑除幕式
- 昭和54年3月26日 西有家被爆者慰霊碑
- 昭和54年12月8日 特養ホーム「かめだけ」起工式
- 昭和55年5月11日 千々石原爆慰霊碑落成式
- 昭和55年8月5日 特養ホーム「かめだけ」落成式
- 昭和56年12月14日 ベトナム難民を迎えてクリスマスパーティー（特養ホーム「かめだけ」）
- 昭和57年4月10日 創立十五周年記念（功労者表彰・記念祝賀会・タイムカプセル・その他）
- 昭和57年5月30日 南串山原爆殉難碑
- 昭和57年11月14日 島原原爆殉難者の碑
- 昭和57年11月23日 長崎県から優良団体の表彰を受ける
- 昭和58年12月24日 ベトナム難民を迎えてクリスマスパーティー（特養ホーム「かめだけ」）
- 昭和59年11月19日 ソ連観光客の原爆被爆者特別養護ホーム「かめだけ」慰問
- 昭和60年8月8日 わが戦いの日々発行
- 昭和62年5月16日 友の会創立二十周年記念祝賀会 宝来軒別館
- 昭和63年8月9日 長崎の鐘 第二号（ソ連邦・レニングラード市）贈呈式
- 昭和63年12月2日 第一回友の会平和賞授賞式 具島兼三郎氏
- 平成元年12月2日 第二回友の会平和賞授賞式 宇都宮徳馬氏

- 平成2年9月18日 長崎の鐘 第三号(中国・瀋陽市) 贈呈式
- 平成2年12月1日 第三回友の会平和賞授賞式 森滝市郎氏
- 平成2年12月8日 長崎の鐘 第四号(ハワイ州・ホノルル市) 贈呈式
- 平成3年12月7日 第四回友の会平和賞授賞式 杉原千畝氏
- 平成4年9月1日 第五回友の会平和賞授賞式 初村滝一郎氏
- 平成5年12月8日 第六回友の会平和賞授賞式 岩崎和佳子氏
- 平成6年6月15日 被爆者手帳友の会会報綴の発行
- 平成6年7月7日 “かめだけ” ホーム創立十五周年記念祝賀会
- 平成6年12月8日 第七回友の会平和賞授賞式 杉山千佐子氏
- 平成7年8月23日 ハワイ長崎の鐘ツアー出発
- 平成7年11月14日 第八回友の会平和賞授賞式 ゴルバチヨフソ連大統領
- 平成8年12月8日 第九回友の会平和賞授賞式 日本山妙法寺
- 平成9年3月11日 被爆惨状絵図完成記念祝賀会
- 平成9年6月19日 友の会創立30周年記念集会 勤労福祉会館
- 平成9年12月3日 第十回友の会平和賞授賞式 高木仁三郎氏
- 平成10年4月1日 長崎市政功労表彰 於長崎市民会館
- 平成10年8月8日 キング牧師の除幕式(恵の丘純心大)
- 平成10年12月2日 諫早原爆殉難者の碑除幕式
- 平成10年12月7日 ハワイ・ホノルル市訪問(六名)
- 平成11年1月15日 ハワイ・ホノルル市訪問(五名)
- 平成12年5月17日 第十一回平和賞授与式 車 貞述氏 平和祈念会館
- 平成12年8月7日 キング牧師顕彰碑、除幕式(平和祈念会館)
- 平成13年8月9日 「聖マリア像」除幕式の実施
- 平成14年6月16日 韓国平和交流功労賞の授与式 受賞者 深堀勝一
- 平成15年2月17日 第十二回平和賞授与式 大相撲横綱 朝青龍関

平成16年5月29日 第十三回平和賞授与式 龍田弁護士（龍田紘一朗）
平成18年2月2日 深堀勝一会長 死去
平成18年6月18日 井原東洋一会長 就任
平成19年2月4日 故 深堀勝一会長追悼ミサ及び偲ぶ会・追悼集発行

編集後記

深堀勝一さんは、独断専行、破天荒で大胆、荒っぽくて計算高くて緻密、何者をも恐れぬ言動、失礼の極みを重ねながら、したたかな利得を手にするような特技、頑固ながら弱き者に対するいたわりとやさしさも備え、文筆にも長けていました。

著名人との交友も深く、信頼を勝ち得ていた実情もたくさん見てきました。

通常感覚ではとても把みきれない巨人だった様に思います。被爆者達は深堀さんの力に頼って、多くの恩恵を受けてきたことを決して忘れません。

晩年というか、命を失われる数年前からは意識の混濁も進行し、甘えん坊のような淋しさの中にありましたが、やはり「巨星落つ」の感一しおであります。

一周忌を前に追悼集の発行を手がけ、編集委員一同非才を合わせましたが、深堀勝一のごく一部分にしか迫る事は出来なかつたと自省しています。

株式会社昭和堂スタッフ各位のお心配りに心から感謝いたします。

編集委員長 井原 東洋一（友の会会長）

編集委員 中村 キクヨ（友の会副会長）

〃 東海 ムツ子（友の会副会長）

〃 山本 敬一（友の会副会長）

〃 上島 富太（友の会副会長）

〃 中村 すみ代（友の会常任理事）

〃 増山 勝幸（友の会事務局）

